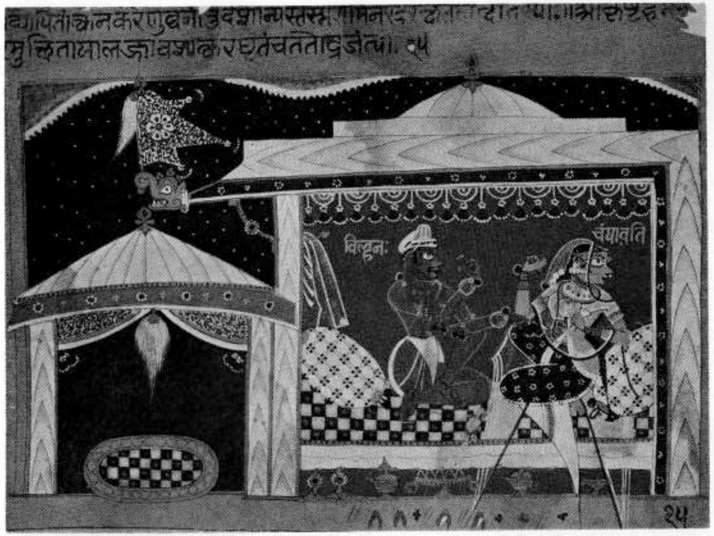
まえがき

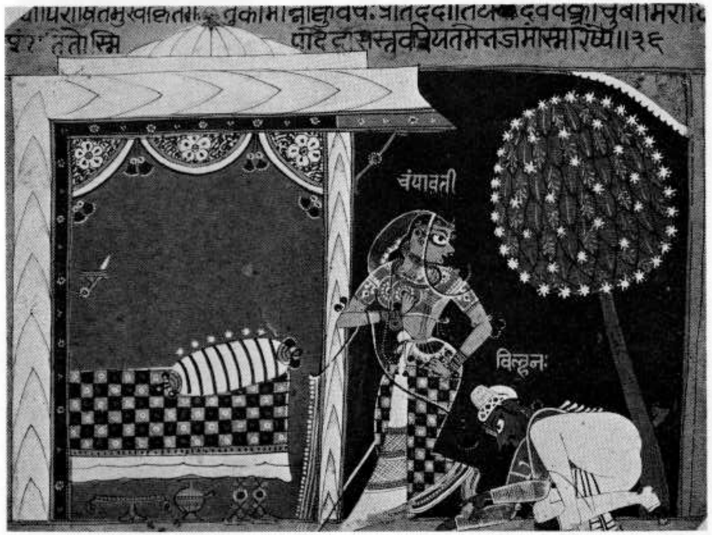
本書の初版が出されてから、やがて十六年になる。この年月の間に、インドの宗教文化に関する日本人の関心は飛躍的に高まった。インドの宗教文化に関する情報が一般に広まったことは、筆者としてはもちろん歓迎する。そして、本書のような地味な出版物も、徐々たるものではあるが、そのための何らかの役割を果たしたのではないかと考えている。

本書は、サンスクリット語で書かれたインド古典文学のうちでも、最高傑作のうちに数えあげられる二つの詩集の翻訳を中心としている。

まずバルトリハリの詩集は、いかに社会生活に処するか、いかに異性を愛するか、いかに解脱を求めるかということを説く。少年時代には諸学を修めて実利を学び、青年時代には心ゆくまで性愛を追求し、老年においては宗教的生活に入って解脱を求めよと教える『カーマ・スートラ』の理想を詩集にしたものである。インド史研究者であるとともに推理小説家としても知られる荒松雄先生は、バルトリハリの詩集を取り上げて、『青春、さもなくば森』（未来社）という本を出版された。この書名は、恋愛に関する詩集の第三十九詩節から採用したものであるが、その他にも、拙訳から多くの詩節を引用してくださった。

次にビルハナによる詩集は、小品ながらインド古典の通人に高く評価される愛の讃歌である。本





王女とビルハナ

L. Shiveshwarkar, *The Pictures of the Chaurapañchāśikā* (New Delhi 1967), Pl. 1, 13

書の初版が出てからしばらくして、アメリカ文学研究者の中山喜代市先生からお手紙をいただき、ビルハナ詩集の数詩節がスタインベックの短編小説（*Cannery Row* 邦題『罐詰横町』）に引用されていることを知った。スタインベックは、*An Anthology of World Poetry*（Ed. by Mark Van Doren）から引用したのであるが、有名なアメリカの小説家がビルハナの詩に注目したということは興味深い。このアンソロジーにはバルトリハリの詩も収められている。本書に収められた二つの詩集が、荒先生やスタインベックという感受性豊かな文学者に注目されたのはまことにうれしいことである。

青春の残り火が消えやらぬ時期に訳したものではあるが、本書に収められた詩集は、五十を過ぎ、寂静の境地にあこがれるようになった筆者にとっても再読に耐えるものである。このたび出版社の御好意により、旧版に多くの修正をほどこし、装いも新たに改訂版が出されることは無上の喜びである。旧版の『インドの詩人』という題名はあまりにも漠然としているという御指摘もあったので、編集者の助言により『インド詩集　夢幻の愛』と題名を変えることにした。「夢幻の愛」というタイトルに、愛を求めつつも、その空しさをも説くヒンドゥーの教えをこめたものである。

平成十年二月二十八日

上村　勝彦

旧版まえがき

学問研究において、感受性などというものは無用の長物であるように思われる。最も研究者の感受性を要求されると予想される文学研究に例をとろう。わが国の大学に設置された学科の殆んどが欧米から移植されたものであり、文学研究とて例外ではない。外国の文学を研究する者は、専門家となる過程において、想像を絶する量の知識を身につけねばならぬ。この膨大な量の知識を身につけるためには、わき目もふらずに、外国語で書かれた専門書に没頭する必要がある。そして、そのためには、充分な語学力が不可欠であるとされる。一切の非能率的な思考を中止して、語学に習熟し、欧米から移入された知識を吸収しなければ、「一流の学者」になり得ないのである。わが国においては、このような吸収の能力に長けた人が専門家となる。この単純作業に情熱を傾けて、そこにある種の喜びを見出せないような者は途中で脱落する。欧米から移植された「学問」の権威を頭から信じることができず、自分自身の問題でもないことに血道を上げて何になると考えるような人は、一流の専門家にはなれないのである。だから、学者たるものは、すべからく感受性を抹殺しなければならない。

しかし、研究生活によって抹殺されるような感受性は、果たして本当の感受性なのであろうか？
また、感受性を押しつぶすような研究が、真に意義のある研究なのであろうか？

何年か前、レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』を読んで、私はこの卓越した研究者が、同時に類い稀なる感受性の持主であることを知った。纖細の精神は決して学的研究と相容れぬものではないのである。このすぐれた詩人の資質をそなえ、伝統的な哲学研究の方法を捨てた男が、全く新しい独創的な研究方法を樹立したのであった。

こういうことが言い得るのではないか。すなわち、詩的な感性を持つ者が学的研究に入り、もし奇蹟的にその志を持続することが可能ならば、彼は時として、既成の方法に励む専門家の想像を絶するような、全く新たなる方法を生み出すと。

私が最初にこのようなことを述べたのは、五世紀後半のインドの文法学者にして詩人でもあったバルトリハリの伝説を念頭に置いているからである。義浄三蔵の伝えた文法学者バルトリハリは、出家と在家の生活を七度も往来したという。並はずれて感受性の豊かな人物であったからこそ、厭離と世俗の生活のいずれにも満足できなかったのである。義浄は言う。「深く因果のことわりを信じなければ、誰がこのようにあくせくするだろうか。」

これは伝説にすぎない。しかし、義浄がインドに行った頃、すなわち七世紀後半にはすでに定着していたと思われる伝説である。歴史上のバルトリハリがいかなる人物であったかということは問題ではない（一七九頁以下で述べるように、バルトリハリ二人説はとらない）。重要なのは、当時のインド

人——もちろん主として知識人であったろう——が、バルトリハリについてこのようなイメージを抱き、後代にいたるまで、類似したバルトリハリ観を持ち続けたということである。彼らにとってバルトリハリは真にそういう人であったのだ。だからこそ、世俗と厭離とを同時に讃えた詩集『三百頌』に彼の名が冠せられたのであった。この場合にも、歴史上のバルトリハリが実際に詩を作ったかどうかは問題でない。感受性豊かな文法学者のイメージがまず形成され、それから、この独創的な言語哲学を樹立した学者が同時に詩集の作者であったという伝承が成立したのである。もちろん、逆に言えば、歴史上のバルトリハリが感受性豊かな人であったからこそ、そして、作詩したからこそ、かかるイメージが形成されたとも推測されるのではあるが、いずれにせよ、そういうイメージが定着したことには変りがない。ここに、偉大な文法学者が同時に詩人であってほしいという、インドの知識人たちの願望を認めることができよう。

最初、私はバルトリハリに帰せられる詩集『三百頌』（Śataka-trayam）の日本語訳を出版しようと考えていた。しかし、その解題を書くためにバルトリハリの伝説を調べていくうちに、私の興味はむしろ伝説そのものに向かい、最終的には本書のような体裁をとることになった。

なお、以前に『春秋』（No. 203–205）に連載した、ビルハナの『チャウラ・パンチャーシカー』の翻訳と、新たに執筆したビルハナの研究をも本書に収めた。このビルハナというすぐれた詩人も、ヴィクラマ・アーディティヤ六世の宮廷で、ヴィディヤー・パティ（学問の主）の称号を得た博識の学者であった。

『三百頌』も『チャウラ・パンチャーシカー』も、典型的な「ムクタカ」（内容的にも形態的にも詩節ごとに独立している作品）として、インドの内外で絶賛されてきた。この両作品と並び称される「ムクタカ」である『アマル・シャタカ』の訳をも本書に収めれば、代表的な「ムクタカ」が揃うことになるが、立川武蔵氏による絶妙な『アマル』の訳（『東海仏教』に連載）があるから、ここではとり上げないことにした。

なお、本書の出版にあたって、春秋社の田中弘吉社長、及び編集部の佐藤清靖、宮元啓一の両氏にお世話になった。記して謝意を表する。

昭和五十七年三月

上村　勝彦

インド詩集　夢幻の愛

目　次

第一部　バルトリハリの詩と伝説

第一章　バルトリハリ三百頌（Śataka-trayam）

凡例

一 底本に用いたニルナヤ版及び対照した批判版については、第二章三（注35）を見よ。

二 〔 〕内に記した章名はニルナヤ版の註釈者によるもの。

三 各詩節の番号はニルナヤ版のもの、後の（ ）内の番号は批判版のものである。

一 処世百頌 Nīti-śataka

〔祝詞〕

一

寂静にして光輝よりなる〔絶対者(ブラフマン)に〕敬礼する。
その体は時間と空間等に限定されず無限で
知そのものよりなり、
自己認識だけがその存在を証する
唯一の手だてである。

（一五六）

一 知そのもの（cin-mātra）―最高原理ブラフマンは純粋知（jñāna-ghana）で、認識主体であり、他によって認識され得ない。

〔愚者の章〕

二

知識人は妬みに蝕まれ
諸王は高慢に汚され
他の人々は無知にうちひしがれる。
それ故、有益な言葉は
私の体内で古びてしまう。 (四)

三

無知の人を満足させることはたやすい。
賢者を満足させることは更にたやすい。
しかし、梵天といえども
半可通の人を満足させることはできぬ。 (八)

四

海獣(マカラ)の牙の内から力ずくで宝珠を取り出すことはできよう。
逆巻く怒濤にわきたつ大海を渡ることもできよう。
猛りくるう蛇をも、花のごとく頭にのせることもできよう。

二 知識人たちはいつも他人の学説を批判することばかり考え、すぐれた説をも受け入れようとしない。王たちも慢心しているから、他者の説を受けつけない。また、無知な人々は理解することができない。それ故、すぐれた箴言も外に出ることなく終ってしまう。「しかしながら私は語ろう」という趣意を含む。

三 無知の人といえども教育によってこれを導くことができる。真の知者ならば、更に容易に理解してくれよう。しかし、自分を知者だと思いこんでいる似非知識人を導くことはむずかしい。

四 海獣(makara)―マカラは想像上の海獣。海豚あるいは鰐を指すといわれる。二・一(解説)を見よ。

しかし、頑迷固陋な愚者の心を喜ばすことはできない。 (九)

五

もし努力して搾れば、砂から油を得ることもできよう。
渇きに苦しむものは、蜃気楼から水を飲むこともできよう。
また、捜しまわれば、兎の角を得ることもできよう。
しかし、頑迷固陋な愚者の心を喜ばすことはできない。 (三九)

六

甘露したたる箴言で、無理やりに愚者を導こうとしても、
繊細な蓮糸で狂暴な象を繋ごうとするようなものだ。
シリーシャの花びらで金剛石を切ろうとするようなものだ。
一滴の蜜で海を甘くしようと望むようなものだ。 (六七)

七

創造神はまことに御親切にも

五 四も五も、不可能なことをならべたてて、頑迷固陋な愚者を説得することは、それらのことよりも更にむずかしいとする。

六 趣意は四、五と同じ。
○シリーシャ(śirīṣa)―学名 Acacia sirissa. その花は繊細で美しく、女性の耳飾りとして用いられる。

自在に無知を隠す手だてを創ってくれた。
愚者にとって沈黙は金。
とりわけ博識者の集会において……。　(六八)

八

私がわずかしか知らなかった時は
象のように高慢(マダ)で盲目となり
「俺は一切知者だ」と思い
私の心は驕り高ぶっていた。
だが、賢者から少しずつ学び知るに及び、
「俺は愚か者だ」と
私の高慢は熱のように消え失せた。　(五)

八　わずかな知識・情報しかなかった若い頃は、自分の能力を鼻にかけて高慢であったが、賢者から種々の知識を学ぶにつれて、自分の無知であることを痛感し、謙虚になった。
○高慢（mada）—発情した象がこめかみから分泌する液、という意味を掛けている。

九

蛆虫だらけの驢馬の骨、悪臭を放ち
おぞましく、犬の唾でぬれ……
肉も付いていないが、犬はそれを
無比のごちそうと喜んで食い、
たとい神々の主（帝釈天）が傍にいるのを
見ても恥じることはない。
まことに、卑しいものは
持物が下らなくとも、意に介さぬものだ。　(二〇)

一〇

天上からシヴァ神の頭へ、
シヴァの頭からヒマーラヤ山へ、
高山から大地へ、大地から海へ……。
このようにガンジス河は
次第に卑小な地位に至る。
知性を無くしたものたちもまた
多様に没落する。　(三四)

一〇　バギーラタ王は天上のガンジス（Gaṅgā）を地上、海、地底界へと導こうと企て、苦行を行った。シヴァ神はその願いを容れ、まずその頭でガンジスを受けとめてから、地上に流した。以上の神話をふまえ、知性（viveka）を無くしたものたちは、ちょうどガンジスのように次から次へと没落するという。ガンジスの降下については拙著『インド神話』（東京書籍）八一—八七頁を見よ。

〔一〇〕

火は水で、太陽熱は日傘で妨ぎ得る。
発情した巨象は鋭い鉤で、牛や驢馬は棒で、
病気は薬を飲むことで、毒は種々の呪句や呪法で
鎮めることができる。
すべてのものには、論書に規定された薬がある。
だが、馬鹿には薬がない。　　（七五九）

〔賢者の章〕

一一

論書を修め言葉も正しく美しく、
弟子たちに学問を授けることのできる
高名な詩人が、ある王の領地に住み、
貧乏な場合、それは王の不明である。

〔一〇〕　ニルナヤ版には詩節番号がつけられていない。「愚者の章」を一〇詩節にするために補ったもの。
○日傘（chatra）—異本の読みをとる。ニルナヤ版は śūrpena（箕によって）と読む。

賢者は財を持たずとも尊敬に値する。
悪しき鑑定家に過小評価されたとしても、
宝石は非難さるべきではない。　　（三）

一二

学問という、賢者の内なる財は
盗賊に盗まれることもなく
常に言い知れぬ幸を育む。
請願者たちに絶えず与えられても
いや増しに増大し、劫末（こうまつ）においても
消滅することはない。諸王よ、
賢者に対し高慢を捨てよ。
何人（なんびと）が賢者に対抗できるか。　　（一五）

一三

最高の真理を極めた賢者らを軽んじてはならぬ。

一二　通常の財産は盗賊に盗まれたり、過多に人に施したりすれば無くなってしまうが、学問という内的な財産は永久に消滅することはない。世俗的権力に対して学者の優越を説く。
○劫末（kalpānta）—カルパ（劫）は梵天（ブラフマー）の一日。四三億二千万年。カルパの終りに世界は帰滅する。『インド神話』一三一—一三二、一三九頁を見よ。

一三　世俗的な富は取るに足らず、ちょ

草のごとく取るに足らぬ汝の富は
彼らをひき止めはしない。
蓮糸は、新たなる漿液の線で黒ずんだ頬をした
象たちを繋ぎ止めることはできぬ。　（一六）

一四

創造神は激しく怒って、蓮池で遊ぶ
ハンサ鳥の娯しみを奪えるかも知れぬ。
だが、乳と水とを区別することに巧みという、
人に知られたハンサの名声を
奪うことはできない。　（三八）

一五

腕環も、月のように輝く頸飾りも、
入浴も香油も、花も、飾りたてた髪も
人を真に飾りはしない。
洗練され身についた言葉のみが
人を真に飾るのである。
すべての装飾品は滅するが、
言葉の飾りは常に人を飾る。　（七八）

一六

学問は人間の最高の美であり
隠し守られた財産である。学問は
享楽をもたらし、名声や幸福をもたらす。
学問は師のうちの師である。
学問は異郷にある時の友人、
学問は最高の神。学問は諸王の間で
敬われるが、財物はしからず。
学問のないものは獣である。　（七〇）

一七

うど蓮糸で興奮した象を繋ぎ止めることが不可能なように、賢者たちを拘束することはできない。
○漿液（mada）―発情した象のこめかみから分泌する液。

一四　神といえどもハンサ鳥の天賦の能力を奪うことはできない。同様に、何人（なんぴと）も賢者の才能を奪うことはできない、という趣意。
○ハンサ鳥（haṃsa）―鵞鳥の一種。学名 Anser indicus. 水とまじりあったミルクを選別する能力を持つとされる。

もし人に忍耐があれば鎧は不要だ。
もし怒りがあれば敵は不要だ。
もし〔悪しき〕親類があれば火は不要だ。
もし親友がいれば良薬は不要だ。
もし悪人がいれば蛇は不要だ。
もし完全な学問があれば財産は不要だ。
もし廉恥心があれば装飾品は不要だ。
もしすぐれた詩才があれば王国は不要だ。　(三七)

一八

親類には礼儀、使用人には思いやり、
悪人にはいつも抜かりなく、善人には愛情、
王者には処世術、賢者には誠実、
敵には勇猛、目上には忍耐、
妻には尊大……。このように
世事に長けた人々がいればこそ
世間は存続する。　(七一)

一九

善き人との交際は、思考の鈍さを除き、
言葉に真実をふり注ぐ。それは
こよなき尊敬をもたらし、罪悪を退ける。
心を清め、名声を四方に弘める。
語れ、善き人との交際は
人々に何をもたらさぬか。　(四一)

二〇

情趣(ラサ)を成就せる幸運な大詩人たちは
すべてに勝る。
名声よりなる彼らの身体には
老死より生ずる恐怖はない。　(五五)

一七　忍耐はよく身を守り、親友は良薬にすぐれ、学問は財産にすぐれ、詩人の才能は全世界を支配する。これに対し、廉恥心は装飾品に喩えられ、詩人の才能は全世界を支配する。これに対し、怒りは内なる敵であり、悪しき親類は火のように全財産を根こそぎに奪い、悪人は毒蛇に喩えられる。この場合、これらのうちでも学問の重要性が主題となっている。

一八　使用人には (parijane) ―異本は parajane (他人、他国人には)。その他にも、異本の読みは若干異なる。
○妻には尊大 (kāntājane dhṛṣṭatā) ―さもなければ尻に敷かれるから (ニルナヤ版註)。

二〇　すぐれた詩人は不朽の傑作を残すから、彼等の名声は滅びることはない。世俗的な富貴に対する詩人の優越を説く。
○情趣(ラサ) (rasa) ―ラサとは、文学作品や音楽や絵画などを鑑賞する時、鑑賞者の心に生ずる美的陶酔である。
○老死より生ずる恐怖 (jarā-maraṇa-jaṃ bhayam) ―異本は jarā-maraṇa-janma-bhīḥ (老・死・生の恐れ)。

〔誇りと勲の章〕

二一

飢えて痩せ細り、老いさらばえ
力無く惨めな有様になっても、
威光も失せ死にそうになっても、
獅子は発情した巨象の額の肉を裂いて
食べることのみを望む。
誇り高きものたちの第一人者である獅子が
どうして枯れ草を食うものか。 (一七)

二二

わずかに腱や脂肪が付着して汚れ、
肉のついてない牛の骨を得ても、
犬は大喜びする。しかも、それは
犬の飢えをしずめるには足らぬ。
獅子はジャッカルを手中にしても
それを捨て、象を殺す。
あらゆる人は、困難にもめげず、
おのが能力にふさわしい成果を望む。 (三〇)

二三

犬は餌をくれるものに尾を振り、
足もとにひれ伏し、地面に横たわり
口と腹を見せる。
しかるに巨象は尊大に眺め、
幾度も請われてから食べる。 (五七)

二三　犬は餌をくれるものに媚びて種々の芸をし、卑屈な態度を示すが、象は尊大に飼主を眺め、食べるようにとさんざんうながされてから餌を食べる。卑しい人を犬に喩え、立派な人を象に喩えている。
○足もとにひれ伏し (adhaś caraṇâvapātam)—異本の読みをとる。ニルナヤ版は adhaś caraṇâvaghātam.

二四

まわりまわる輪廻の中で、
死んだ者は必ずまた生まれる。
ある人が生まれて家系が高まるなら、

彼は生まれたかいがある。　（七四）

二五

賢者は花房にも似て、
二つの生きざまをとる。
すべての人の頭にあるか、
あるいは森で朽ち果てるか。　（二四）

二六

木星など、重んぜられる星々が
他に五つも六つもあるのに、
特別の武勲を好むこのラーフは
彼等に敵対することはない。
見たまえ！　この頭だけ残った
悪魔（ダーナヴァ）の領袖は、決まった時期に、
輝く太陽と月の両者のみを呑む。　（五三）

二五　花は人々の髪飾りに用いられるか、あるいは森の中でしおれる。ちょうどそれと同様に、賢者は人々の頭に立つか、あるいは森に隠棲して静かに死んで行く。

二六　誇り高き勇者は真の強敵にのみ立ち向う、という趣意。
○ラーフ (Rāhu)—神々の不死の飲料であるアムリタ (甘露) を飲んだために、ヴィシュヌ神に首を斬られた悪魔の名。アムリタの効力で頭部だけが不死となり、ヴィシュヌに告げ口をした月と太陽とを追い、月蝕と日蝕をひき起すと信じられた。『インド神話』六四頁を見よ。

二七

大蛇シェーシャはその鎌首に全世界を担う。
そしてその彼を、亀王がいつも背中に乗せる。
そしてまた海が、苦もなくその亀を胸にかき抱く。
ああ、偉大なものたちのめざましい行為は際限がないのだ。　（七三）

二八

誇り高きインドラの放つ金剛杵（ヴァジュラ）の打撃は
熾盛の火焔を噴出し耐え難いが、
ああ、ヒマーラヤの息子の場合は
それで息の根を止められた方がよかった。
父が苦痛にうちひしがれていた時に、
海水に飛び込んだのは彼にふさわしくない。　（三二）

二七　大蛇シェーシャ (Śeṣa)—千頭を持つ大蛇 (nāga 竜) の名。アナンタとも呼ばれる。その頭で大地を支えると考えられた。異本を参照して訳した。
○亀王 (kamaṭha-pati)—ヴィシュヌ神の化身 (avatāra) の一つ。その背で大地もろともシェーシャを支えるとされた。

二八　太古、山々は翼を持っていて、自由に飛行していた。そのため大地が動揺したので、インドラ (帝釈天) は金剛杵 (ヴァジュラ) でもって山々の翼を断ち切った。ヒマーラヤ山も翼を切られたが、その息子のマイナーカは海中に飛び込んで難を逃れたという。『インド神話』四二頁を見よ。
ここでは、マイナーカが父を捨てて自分だけ助かったのは、偉大なものにふさわしくないと非難している。

二九

太陽石は心を持たぬものではあるが、
太陽の光線に触れられたら燃え上る。
誇り高い男は、敵に加えられた侮辱に
どうして耐えられよう。　（六五）

三〇

獅子は幼くとも、頬に襞液(マダ)をたらす象に襲いかかる。
これは勇気あるものの本能である。
まことに年齢は威光の原因ではない。　（七五）

〔財産の章〕

三一

生まれの良さなど地底へ行ってしまえ。
群なす美質はもっと下へ行くがよい。
徳性は山の頂から落ちろ。
血筋のよさは火で焼かれろ。
憎たらしい勲には早く雷が落ちろ。
俺達にはただ財産があればよい。
もし無一物なら、あらゆる美質は
草のように取るに足らぬ。　（一五）

三二

富を持つ人は家柄よく
賢者にして博識で徳を知る。
彼のみが雄弁でハンサムだ。
すべての徳は金しだい。

三三

王は悪しき助言により、修行者は人との交際から、

二九　太陽石（ina-kānta）―スーリヤ・カーンタ（sūrya-kānta）のこと。太陽の光線を受けると燃え上るといわれる石。○太陽の光線に……―「光線」（pāda）は「足」という意味をも持つ。「太陽の足で蹴られたら激しく怒る」という意味をかけている。

三〇　襞液（mada）―一・一三の解説を見よ。

三一　地底（Rasātala）―ラサータラを「地底」と訳したが、ラサータラは実は地底界（Pātāla）の一つ。○徳性（śīla）―この語については、一・七七の解説を見よ。

息子は甘やかすことにより破滅する。
バラモンは不勉強から、家は悪い息子により、
徳性は悪人とつきあうことにより滅びる。
慎みは酒から、農業は不注意から、
愛情は別離により滅ぶ。友情は不信から、
繁栄は無策から、財産は施しや放逸により滅びる。　(三二)

三四

布施、享楽、遺失、
これが財産の三つの帰趨だ。
施さず楽しまぬ者には
第三の帰趨がある。　(五〇)

三五

砥石で磨かれた宝玉、
武器に傷ついた戦場の英雄、
漿液(マダ)を流し憔悴した象、
秋に砂地が少し乾いた川、
弦月、愛戯にやつれた少女、
乞う者のため財を使い果した人々。
これらは衰えにより美しい。　(二)

三六

貧しい人は一握りの麦をも望む。
その彼がやがて富者ともなれば
全世界をも取るに足らぬと考える。
このように所有者の気持は
ものごとの軽重に関し不定であり、
物を過大評価し、過小評価する。　(三)

三七

王よ、もしこの大地なる牝牛の乳を

三四　財産は他者に布施したり、享楽に用いてこそ意義がある。死蔵していれば、盗まれたり火事で失ったり、あるいは所有者が死んだ時は、彼にとって無駄金となる。

三七　民衆を保護育成してこそ、王国は

搾りたいと望むなら、今この民を
仔牛のように養え。
民が常に正しく養われたならば
大地は如意樹のごとく
種々の果実を実らせる。　（五八）

三八

真実にして不真実、
乱暴であってやさしく語る、
冷酷かと思うと慈悲深く、
欲ばりで気前がよい。
絶えず浪費しても、
より頻繁に財が入って来る。
王の行為は娼婦のように
かくも多様なものだ。　（三八）

栄えるという意。
○如意樹（kalpalatā）―インドラ神（帝釈天）の天国にあると信じられる蔓草。何でも望んだことをかなえるとされる。

三九

命令、名声、バラモンの保護、
布施、享楽、友人の守護……。
もし〔諸王に〕この六つの徳が無いなら、
王よ、彼らに頼って何になるか。　（六八）

四〇

財産が多かろうと少なかろうと、
それは創造主が我々の額に印したことだ。
荒地においても財を多量に得るし、
黄金山（メール）においても定められた以上
得ることはない。だから平静であれ。
富者に空しくへつらうことなかれ。
見よ、井戸からも海からも
瓶は同量の水を汲むではないか。　（五六）

三九　もし諸王に…―ニルナヤ版の註に従って、pārthiva を呼格（vocative case）と解した。「もし王臣たちが、これらの六つの徳が発揮できるようにしなければ、彼らが王に仕えることが何になる」という解釈（ミラー女史の英訳他）もあるが、少し無理のように思われる。

四〇　人の運命は生まれた時から定まっているから、財物を求めて卑屈になってはならぬという趣意。ある人の運命は、生まれる時、創造主によって額に印されると考えられた。
○黄金山（Meru）―メール山は宇宙の中央にあると考えられた高山。黄金や種々の宝石でできていて、神々の住処である。仏教では須弥山（しゅみせん）（Sumeru）と呼ばれ、妙高山と漢訳された。

〔悪人の章〕

四一

無慈悲、理由もなく争うこと、
他人の財や妻に対する欲望、
善人や縁者を嫉むこと。
これが悪人の天性である。　（六一）

四二

たとえ学問で飾られていても
悪人を避けるべきだ。
蛇は宝玉で飾られているが
どうして恐ろしくなかろうか。　（二七）

四二　蛇は……蛇は頭部に宝石をつけているとみなされた。

四三

悪人は謙虚な人に愚鈍さを、
敬虔な人に偽善を、清い人に虚偽を、
勇者に苛酷さを、隠者に知力の欠如を、
やさしく語る人に弱さを見る。
威厳ある人に高慢を、雄弁家に多弁を、
平静な人に不能を見る。
まったく、悪い奴にかかれば、
有徳の人々の美徳もすべて非難される。　（四三）

四四

貪欲があるなら、他の悪徳が何になる。
中傷があるなら、他の罪悪が何になる。
真実があるなら、苦行が何になる。
清らかな心があるなら、聖地が何になる。
友情があるなら、縁者が何になる。
偉大さがあるなら、装飾品が何になる。

四三　雄弁家に……異本の読み(mukharatā vaktary aśaktiḥ sthire) を採用。ニルナヤ版は、mukharatā vaktavyaśaktiḥ sthire.

すぐれた学問があるなら、富が何になる。
不名誉があるなら、死が何になる。　（三七）

四五

昼に蒼白くなった月、若さの過ぎた女、
蓮のない池、美男の無学な顔、
財にあくせくする主君、いつも貧しい善人、
王宮にいる悪人……。
これらの七つが私の心を傷つける。　（一〇）

四六

激しい怒りにかられた王には
親しいものは誰もいない。
火はそれに触れれば、
供物を捧げる祭官をも燃やす。　（六〇）

四七

黙していれば唖者だといわれ、
雄弁ならばおしゃべりといわれ、
傍にいれば無遠慮といわれ、
離れていれば内気な奴といわれ、
忍耐すれば臆病といわれ、
我慢しなければ生れの悪い奴と
いわれるのがおち。
仕官の道はこよなく不可解で、
ヨーガ行者といえども理解しがたい。　（三五）

四八

卑しい男が運よく富貴を手中にしたら、
自分の最低の仕事と生活を全く忘れ果て、
調子にのって、すべての邪悪さを

四八　卑賤な身分から成り上って驕慢になった者には決して仕えるなという意。

むき出しにして、美徳を憎む。
そういう男に仕えたら、
誰が気楽に暮せよう。　（六九）

四九

最初は大きいが次第に小さくなる。
初めは小さいが後には大きくなる。
悪人と善人との友情は
午前と午後との影のように、
前半と後半で変化する。　（六二）

五〇

鹿は草で生活し、魚は水で生き
善人は満足して暮すが、
猟師や漁夫や悪人はこの世で
理由もなく彼らを憎む。　（三一）

四九　影は、午前中には、最初は長く後に短くなり、反対に、午後には、最初は短く後に長くなる。それと同様に、悪人の友情は、最初は篤いように見えても次第に薄くなり、反対に、善人の友情は、最初は薄いようでも後になると篤くなる。悪人の友情を午前の影に、善人の友情を午後の影に、それぞれ比較している。

五〇　理由もなく……—ニルナヤ版（niṣkāraṇam eva vairiṇo）は韻律（āryā metre）にはずれる。異本の読み（niṣkāraṇa-vairiṇo）を採用。

〔善人の章〕

五一

善人との交際を望み、他人の長所を喜び、
長上を敬うこと。学問に没頭し、
自己の妻に歓び、世間の悪評を恐れること。
シヴァ神に対する信仰、自制の力、
悪人との交際を断つこと。
こういう汚れなき美徳をそなえた
偉大な人々に敬礼する。　（四三）

五二

逆境において毅然とし、
繁栄においても驕らぬこと。
集会における雄弁、戦闘での武勇。

名声を望み、学問に没頭すること。
これは偉大な人々の天性である。　（五二）

五三

手には讃えらるべき布施、
頭には長上の足下に平伏すること、
口には真実の言葉、両腕には
常勝にして無比なる武勇、
心には汚れなき状態、
両耳には極められた学問。
これが本性偉大な人々の装飾だ。
たとい富貴がなくても……。　（七三）

五四

不殺生、不偸盗、真実語、
適切な時に可能な限りの布施をし、
他人の妻に関する話に黙すること、
渇愛の暴流（ぼる）を断つこと、
長上に対し礼儀正しいこと、
すべての生類に対する憐れみ。
以上はあらゆる論書に共通に、
不滅なる教えで、至福への道である。　（三）

五五

偉大な人々の心は
富貴においては
蓮の花のように柔和である。
逆境においては
大山の岩石のように堅固だ。　（三三五）

五六

正しい行為は好ましく、悪しき行為は

五三　偉大な人々が自然にそなえている諸々の美徳は、王者の装飾にまさる。○頭には……—長上（あるいは師）の足下に頭を下げることの意。○学問（śruta）—本来は「聞かれた」という意味だから、耳と関係がある。

五四　渇愛の暴流（tṛṣṇā sroto-）—ニルナヤ版（tṛṣṇā śroto-）は誤植であろう。註では訂正されている。

五六　誰も教示したわけではない。立派

生命を賭してもなすべきでない。
悪人に懇願すべきでなく、
友といえども貧者に要求してはならぬ。
逆境にあっては高らかに平常心を保ち、
偉人の足跡をふむべきである。
この実行不能の誓いを
誰がよき人々に教示したのか。　（一八）

五七

人に知られず布施すること。
家を訪れた客を接待すること。
親切を行っても黙していること。
集会で他人の親切を公表すること。
富貴であっても驕らぬこと。
他人の話をして決して非難せぬこと。
この実行不能の誓いを
誰がよき人々に教示したのか。　（三五）

五八

水が熱せられた鉄の上に落ちたら
その名すら聞かれることはない。
その水が蓮葉に宿れば真珠の形に見える。
そして海中の真珠貝の胎に落ちれば
それは真珠となる。
一般に、下等・中等・上等のものに
依り所を求めた人々にとっても
同様の帰趨がある。　（三）

五九

善行で父を喜ばせるのが息子、
夫のためになることのみを望むのが妻、
逆境でも幸福でも同様にふるまうのが友。

な人々は本性からこのような誓いを守るという意。

五八　水が落ちた場所に応じてその運命を異にするように、人は依りどころによってその運命を異にする。だから、寄らば大樹の陰。
○その名前すら……—全く跡形もなく消滅してしまうという意。
○海中の真珠貝の……—異本は antaḥ-sāgara- の代りに、svātau sāgara- と読む。スヴァーティ (svāti) は第一三あるいは第一五の星宿 (nakṣatra) の名称である。この時期には降雨が稀で、海に落ちた水滴は真珠になるとされる。

しかし、有徳の人々だけが
この世で以上の三者を享受する。　（二五九）

六〇

善人は謙遜によって傑出し、他者の美徳を
語ることにより自己の美徳を人に知らせる。
他者のため広大な企てと努力をして
自己の目的を達成する。悪人どもが
非難し粗暴な言葉をかけ嘲笑しても、
ただ忍耐のみにより彼らを悩ます。
善人は驚異的な行為によって世間で
尊敬され、すべての人に讃えられる。　（二六〇）

〔利他の章〕

六一

樹々は果実の重みで撓む。
雲は新たな水をふくむと
ずっと低空に降りてくる。
よき人々は富貴により腰が低くなる。
これは他者を益する人々の
本性に他ならぬ。　（六一）

六二

憐れみ深い人々の耳は学問により輝く。
耳飾りによってではない。
その手は布施により輝く。
腕環によってではない。
その身体は利他行により輝く。
栴檀香によってではない。　（六二）

六三

六二　学問―一・五三参照。

求められずとも太陽は
蓮の群を開花させ、
月は睡蓮の群を開花させ、
雲もまた雨を降らせる。
よき人々は自分から
他者の利益に努力する。　(六三)

六四

自利を捨て利他をもたらすのが善人、
自利に反しない限り利他に努めるのが
普通の人、自利のために他者の利益を
害なうのが羅刹のような人である。
しかるに、何の益もないのに
他者の利益を害なう人は何者か、
わからない。　(三三)

六四　何の益もないのに他人の利益を妨害するような奴は下の下だという意。

六五

人を罪悪から遠ざけ、善に向かわせる。
秘密を守り、美点を公表してくれる。
逆境にあるものを捨てず、
適切な時に与えてくれる。
これがよき友の特性と賢者らは言う。　(三一)

六六

以前ミルクは自分と混じった水に
そのすべての属性を与えた。
水はミルクが熱せられるのを見て、
自分自身を火に捧げた。
ミルクも友の危機を見て火に入ろうと
望んだが、また水と混じって鎮まる。
よき人々の友情もまたこのようである。　(二八)

六六　また水と……沸湯したミルクが、容器からこぼれそうになる時、水をそそぐと鎮まる現象を指す。

六七

ここにはヴィシュヌ神が眠り、
かしこには彼の敵の群がいる。
ここには庇護を求める山の群が憩い、
かしこにはすべてのサンヴァルタカと
ともに、海中火がいる。
ああ、海の身体は力強く広大で
重荷に耐えるものだ！

六八

自分の背を用いて広大な大地の重みを
支えているあの亀のみが、
生まれた甲斐があるというものだ。
星の群がその周囲を廻る、
あのドゥルヴァ(北極星)の生は讃えられるべきだ。

(一〇)

六七　ヴィシュヌ神 (Keśava＝Viṣṇu)―ヴィシュヌは大蛇アナンタ（シェーシャ）をベッドにして海上で眠るとされる。○庇護を求める山…―インドラに翼を切られそうになった山々は海中に飛び込んで難を逃れた。一・二八参照。○サンヴァルタカ (Saṃvartaka)―「世界を帰滅さすもの」という意。宇宙の帰滅の時に、世界を焼き尽くす火（Apte, *Skt. English Dic.*, p. 1591)。ニルナヤ版の註によれば、「世界の帰滅の時に大雨を降らす雲」。○海中火 (Vaḍavānala＝Vaḍava or Bāḍava)―海中で永遠に燃え続けると信じられた火。アウルヴァ仙は全世界を滅ぼそうと企て、苦行の熱によって世界を焼き始めたが、祖霊たちの要請を容れて、怒りの火を海に放った。その火は巨大な馬の頭となって、海中で水を飲んでいるとされる。『インド神話』一五七―一六一頁を見よ。

六八　亀 (Kūrma)―亀は大地を支えているとされる。一・二七を見よ。○北極星 (Dhruva)―ドゥルヴァはウッターナパーダの子であったが、継母に疎んぜられて父の愛を得られず、森で苦行に専念する。ヴィシュヌ神の恩寵により、

その他の生類は上方にも下方にも達せず、
利他に関しては全く益なく生まれ、
この梵卵というウドゥンバラの実の中で、
蚊のように、生じたと思うと滅してしまう。

(一四八)

六九

渇愛を絶ち、忍耐を養い、驕りを捨て、
悪を喜ぶなかれ。真実を語り、
正道を践み、識者に仕えよ。
敬うべきを敬い、敵をも愛せよ。
礼儀正しく、名誉を守り、
悩めるものを憐れむがよい。
これがよき人々の行為である。

(四四)

七〇

心と語と身体とにおいて

最高で永遠なる位置を獲得し、星々の支点(北極星)となった。『インド神話』二一五―二一八頁を見よ。○梵卵―宇宙のこと。一・九二参照。○ウドゥンバラ (udumbara)―無花果の一種。学名 Ficus Clomerata.

福徳の甘露で満ちあふれた人、
一連の利他行により三界を喜ばす人、
ほんの些細な他人の美点を山のように
みなし、いつも称讃する人、
自己の心の中で満ち足りた人、
そんな立派な人が幾人いることか。 （一九）

〔剛毅の章〕

七一

神々は大海から現われた諸宝に満足せず、
恐ろしい毒をも恐れず、
甘露を得ぬうちは企てをやめなかった。
剛毅な人々は、決意した仕事を
中断することはない。 （五一）

七一　神々は……―神々による大海攪拌の神話を前提としている。太古、神々は、甘露（amṛta）を得るために、阿修羅（asura）たちとともに、マンダラ山を攪拌棒に用い、大蛇ヴァースキをそれに巻きつけ、巨大な亀を支点として、大海を攪拌した。その際、太陽、月、牝牛スラビ、白馬、神象、宝珠カウストゥバ、天国の樹パーリジャータ、アプサラス（天女）、シュリー（吉祥天女）、酒の女神等が生じたという。『インド神話』六二―六五頁、及び二二五―二二六頁を参照されたい。
○恐ろしい毒……―大海攪拌の際、ハーラーハラという猛毒が生じたという。猛毒が生じた時、シヴァ神は世界の破滅を救うためにそれを呑みこんだ。その毒は彼の首に残り、それを黒くしたので、彼はニーラカンタ（Nīlakaṇṭha「黒い首を持つ者」）と呼ばれる。『インド神話』六五頁を見よ。

七二

劣った人は障害を恐れ何も企てない。
普通の人は企てても障害にぶつかると
やめてしまう。最上の品性の人は
幾度も障害にぶつかっても
企てたことを決してやめない。 （二七）

七三

時には地面に寝、時には寝台に寝る。
時には草を食べ、時には米飯を好む。
時には襤褸（ぼろ）を纏い、時には極上の衣服を着る。
自己の目的を追求する賢者は
苦も楽も気にとめないものだ。 （三）

七四

処世に長けた人が難じようと讃えようと、
幸運の女神が気ままに去来しようと、
死がまさに今日訪れようと
この世の終りに訪れようと、
そんなことはおかまいなし。
剛毅な人が正道から足を踏みはずすことはない。　（一六五）

七五

剛毅な人の心は、恋人のながしめの
矢に貫かれることなく、
怒りの火の熱にも燃やされず、
強力な感官の対象や
貪欲の罠にひきずられることもない。
そういう剛毅な人は
この三界すべてを征服している。　（一三〇）

七四　意志強固な人は、他人の毀誉褒貶に心わずらわすことなく、富貴であろうとなかろうと、死が近かろうと遠かろうとおかまいなしに、常に正道を踏む。○幸運の女神（Lakṣmī）―幸運の女神ラクシュミーはヴィシュヌ神の妃。シュリーとも呼ばれる。吉祥天女のこと。幸運は移ろいやすいことから、浮気女に喩えられる。

七六

剛毅な人を軽んじたところで
その剛毅な特性を除くことは出来ぬ。
火をさかさにしても
その焔が決して下方に向わぬように。　（七六）

七七

大山の頂上からどこか難所に落ちて
この身が堅い岩角で微塵になろうとも、
鋭い牙の大蛇の口に手を入れようとも、
火中に落ちようとも、
決して徳性を捨ててはならぬ。　（三二）

七八

あらゆる人をこよなく喜ばす徳性が

七七　徳性（śīla）―śīlaはよい性質、行い、習慣の意。仏教では、入門・修行に際し、悪い行為をしないように自らに課する誓いをいう。「戒」と漢訳された。

七八　黄金山（Meru）―メール山につい

その全身に輝き出ている人にとって、
火は水となり、海は即座に小川と化し、
黄金山（メール）は石ころとなる。
獅子はたちまち鹿のようになり、
毒蛇は花輪のように心地よくなり、
毒液も甘露の雨と化す。 (三四)

七九

樹木は切られてもまた生ずる。
月は欠けてもまた満ちる。
立派な人々は、そう考えて、
災禍に陥るとも苦しまない。 (四六)

八〇

親切は権力の飾りであり、寡黙は
勇武の飾りである。静寂は智の、

ては一・四〇の解説を見よ。

七九 災禍に……—批判版の読み（vidhuresu）を採用。ニルナヤ版（viślatheșu lokeșu）は韻律（āryā metre）にあわない。

八〇 苦行（tapas）—tapas は修行することにより修行者が蓄積する一種の力。怒りや性交によって消失する。tapas に

礼儀は博識の飾りである。
ふさわしい人に施すことは財の飾り、
怒らぬことは苦行の、寛容は君主の飾り、
偽りなきことは法の飾りである。
ところで徳性はすべての第一原因であり、
あらゆるものの最高の飾りである。 (四一)

〔運命の章〕

八一

帝釈天はブリハスパティを師とし
金剛杵（ヴァジュラ）を武器とし、神々の軍隊を持つ。
彼の要塞は天であり、ヴィシュヌ神の好意を受け、
アイラーヴァナが彼の象である。
このような驚異的な力をそなえた、
バラの殺害者（帝釈）といえども、戦闘で

ついては、原実『古典インドの苦行』（春秋社）を見よ。

八一 ブリハスパティ（Bṛhaspati）—祈禱主神。神々の教師とみなされた。○金剛杵（vajra）—帝釈天（インドラ）はヴァジュラによって悪竜ヴリトラ等を退治する。『インド神話』一七、七三—七八頁を見よ。○アイラーヴァナ（Airāvaṇa）—インドラの乗る象の名。アイラーヴァタとも呼ばれる。神々が大海を攪拌した時、海から生じた。一・七一の解説及び、『インド神話』一〇〇、二二五頁を見よ。批判版の読み（airāvaṇo vāraṇaḥ）を採用。ニルナヤ版は airāvaṇo rāvaṇaḥ. ○バラの殺害者（Bala-bhid）—インドラは、悪魔バラ（Bala or Vala）を退治し

敵にうち破られる。それ故、明らかに
運命のみが依り所ではないか。
ああ、人の努力は空しいものだ。（四九）

八二

蛇は捕えられ、籠の中で体を丸め、
飢えて気力も失せ絶望していたが夜中、
鼠が籠に穴をあけ、自分から蛇の口に
とびこんだ。蛇は鼠の肉で満腹し、
すぐにその穴から出て行った。
気楽でいるがよい。運命のみが盛衰を
決する最大の原因なのだから。（二〇）

たので、「バラの殺害者」と呼ばれる。○戦闘で敵に……一例をあげると、インドラは悪魔マハーシャニとの戦いに破れ、捕えられて妻のインドラニーとともに地底界（パーターラ）に幽閉された。マハーシャニの親類であるヴァルナ（水天）に救出されたが、復讐を誓い、ヴィシュヌ神に祈願した。その結果、マハーシャニは間接的に殺されることとなった。

八三

立派な人は不幸に落ちても
毬のように跳ね上る。
だが小人は、土塊が落ちるように
落ちたらつぶれてしまう。（三七）

八四

禿頭が日光で頭を熱せられ、
涼しい場所へ行こうと
急いで多羅樹の根かたに行った。
すると大きな実が落ちて、
彼の頭は音をたてて砕けた。
不運な人の行くところ
大がい不幸がついて行く。（三九）

八五

象や蛇や鳥が捕えられ、
月と太陽が蝕に苦しみ、
知恵ある人が貧困なのを見て、

八四　多羅樹（tāla）―棕櫚の一種。うちわじゅろ。学名 Borassus flabelliformis.

運命は強力だとつくづく思う。（一四〇）

八六

あらゆる美徳の宝庫であり
地上の飾りであるすぐれた人を
創造しながらも、それを刹那に
滅するものとするならば、
ああ、運命の神は何と愚かなことか。（二四）

八七

夜に月を覆った布切れ（雲）は
昼には太陽を覆う。
ああ、日月の運の悪いこと！（三三）

八八

月は甘露の宝庫にして、薬草の主である。
シャタビシャジュ星宿につき従われ、
シヴァ神の頭の飾りである。
しかもその月に肺病がつきまとう。
悪しき運命の到来は、何人(なんぴと)によって
乗り越えられようか。（一〇九）

八九

親愛なる友よ、
苛酷な運命は熟練の陶工のようだ。
私の心を土塊みたいに力まかせに丸め、
憂慮という轆轤(ろくろ)、絶えず不幸という棒を
ふりおろして廻り廻る轆轤の上にのせ
廻転させる。このようにして運命が
何を作るつもりなのか、理解に苦しむ。（一七八）

九〇

八六 偉人の生を永遠のものとしたならば、創造神（運命の神）は賢明であったのだが、実際には、遺憾ながら偉人の命は短い。運命の神を非難することにより、惜しい人の早世することを嘆じている。

八八 甘露(amṛta)—月は甘露（アムリタ）をふりそそぐ容器とみなされ、その光は甘露に喩えられる。
○薬草（oṣadhi）—月は梵天（ブラフマー）の恩寵により、星々と薬草の主（Oṣadhīśa, Oṣadhi-nātha etc.）となった。
○シャタビシャジュ（Śatabhiṣaj）—第二二または第二四の星宿（nakṣatra）の名。百の星々を含む。月がこの星宿に入った時は、神々の医師ダヌヴァンタリでさえも病気を癒すことができないとされる。「百人の医師」という第二の意味がある。
○シヴァ神（Śambhu=Śiva）—シヴァは弦月を頭飾りにしているとされる。
○肺病（rāja-yakṣman）—「王の病患」の意。月の虧欠を指す。月と肺病については、辻直四郎『古代インドの説話』（春秋社）一五八—一五九頁を見よ。

おい、愚かな運命よ、この努力、
馬鹿気た企てをやめよ。お前は、
不幸の中で偉大な人の剛毅の性が
滅するのを見たいと望んでいるが。
まことに、大山脈や海は
劫末(こうまつ)といえども、自己の道を逸脱し
卑小なるものとなることはない。　〔三七〕

〔九一〕

この世では、運命の神が自ら決めたこと
だけが、人の身にふりかかる。
偉大な依り所といえども
わずかな成果しかもたらさぬ。
雲は万人の願望を満たし、
日ごとに雨を降らすが、
チャータカ鳥の口には、少ししか
落ちぬ。ほんの二、三滴のみ……。　〔六一〕

九〇　運命が偉大な人々を不幸に陥れて、彼等の平常心を捨てさせようとしても、それは無駄な努力である。剛毅な人は志を変えることはない、という意。○大山脈（Kula-sikharin＝Kula-parvata, giri etc.）―インド大陸にあると信じられた七つの主要山脈。すなわち、ヴィンディヤ、パーリヤートラ、シュクティマット、リクシャ、マヘーンドラ、サヒヤ、マラヤ。不動なることを大山脈に喩える。○劫末（kalpâpāya）―一・一二（解説）を見よ。

〔九一〕　チャータカ鳥（cātaka）―郭公の一種。沙燕と漢訳される。学名 Cuculus melanoleucus この鳥は雲の近くを飛び、雨水を食べて生きると考えられた。

〔業の章〕

九一

我々は諸神を拝むが、その神々すら
悪運に支配される。運命は讃えらるべきも、
その運命すら定まった業(カルマン)の果報を与えるのみ。
果報が業に依存するなら、他のものが
何になろう。運命も何になろう。
業に敬礼！　運命といえども
業を支配できないのだから。　〔二二〕

九二

梵天は、この梵卵の器の中で
陶工のようなことをするだけだ。

九二　梵卵（brahmâṇḍa）―ブラフマンの卵。全宇宙を意味する。梵天はこの宇宙卵を割って天地を創造した。

ヴィシュヌ神は十の化身をとるという、
こよなく難儀な仕事に携わる。
シヴァ神は髑髏器を手に持って、
乞食(こつじき)をして歩かされ、太陽は常に
天空をさまよう。それもみな業の故。
その業に敬礼！　（一六五）

九三

善行の女神は即座に悪人を善人に変え、
愚者を賢者とし、敵を味方に変ずる。
知覚され得ぬものを知覚させ、
毒を甘露に変える。
善き人よ、もし汝が望みの果報を
味わいたいのなら、かの善行の女神を
崇拝せよ。災禍に満ちた他の諸徳を
空しく追い求めることなかれ。　（一九）

○十の化身（daśâvatāra）―ヴィシュヌの十の化身（avatāra）は、魚、亀、猪、人獅子、朱儒、パラシュ・ラーマ、ラーマ王、クリシュナ、仏陀、カルキである。『インド神話』一一八頁以下を見よ。
○髑髏器（kapāla）―人間の頭蓋骨で作った器。シヴァ神の持物。シヴァは苦行者の身なりをしている。

九四

輝やける宮殿、艶めく美女たち、
白い傘蓋の輝き……。
このような富貴は、善業が続く限り
長く享受される。
だが、見なさい。それが消滅するや、
痴話喧嘩の戯れにより
糸が切れた一連の真珠のように、
富貴はたちまち諸方に飛び散るのだ。　（七）

九五

大事にせよ小事にせよ、
何か仕事を行う時、
賢者はよくよく結果を熟慮せよ。
性急になした行為の結果は、

九四　富貴を真珠に、善業を真珠の頸飾りの糸に喩える。
○白い傘蓋（śvetâtapatra）―傘蓋は王者の標識。
○見なさい（dṛśyatām）―ニルナヤ版の読みをとる。
○痴話喧嘩（anaṅga-kalaha）―愛しあう男女は、つまらぬことで喧嘩しながら、激しい愛戯に没入する。そのために、女のしている頸飾りの糸が切れて真珠が散乱する。

しまいまで、矢のように
我々の心を苦しめるものだ。　（四五）

九六

胡麻の絞り粕を瑠璃で作った器に入れ
栴檀の薪束で煮る。アルカの根を求めて
黄金の鋤で大地を掘る。樟脳の木を切り
粟の周囲に柵を作る。
——そのようなことをしているのだ、
この世に生まれて修養を積まぬ不幸な人は……。　（三四三）

九七

容姿も家柄も徳性も果実をもたらさぬ。
学問しても、勤めに励んでも実りはせぬ。
過去の修養により積まれた福徳だけが
樹木のように、時いたれば
人に果実をもたらす。　（[illegible]）

九八

海中に飛び込め。黄金山の頂に登れ。
戦闘で敵をうち破れ。商業と農業と
仕官の道と、すべての学問、技芸を学べ。
大空を鳥のように飛行せよ。
だが、このような最高の難行をなしても、
この世では、業の力に支配され、
起こり得ぬことは起きないし、
起き得べく定まったことは
決して空しくなることはない。　（四八）

九九

森でも戦場でも、敵中でも
水火の中でも、大海でも山頂でも、

九六　前半は下らぬ物のために貴重な物を費やす例を列挙する。修養を積まない人間は、この世に生まれたかいがないということ。
○アルカ (arka)—トウワタの一種。荒地に生える。学名 Calotropis Gigantea. 批判版の読み arka-mūlasya をとる。ニルナヤ版：arka-tūlasya.
○粟 (kodrava)—コードラヴァの粒は貧しい人々に食べられる。学名 Paspalum scrobiculatum (or frilmentaceum).
○この世 (karma-bhūmi)—宗教的な儀式（あるいは善行）を行える土地の意。この世界のこと。
○修養 (tapas)—タパスは一般に「苦行」と訳されるが、その結果得られる「力」をも意味する。タパスは倫理的・宗教的徳目をも指し、自制、自戒、禁欲等、精神生活に於ける内向的節度・節制を意味する。原実『古代インドの苦行』（春秋社）五六頁を見よ。

九七　徳性 (śīla) —一・七七を見よ。

九八　黄金山 (Meru) —一・四〇の解説を見よ。

過去になされた善行は人を守護する。
彼が眠っていても、放逸であっても、
逆境にあっても……。（九九）

一〇〇

ある人が過去に多大の善行をなしたら、
彼にとって恐ろしい森も大都市となる。
すべての人が彼の仲間となる。
全地上が無上の宝物に満ちあふれる。（一〇〇）

処世百頌　おわり

二　恋愛百頌　Śṛṅgāra-śataka

〔女性の讃美〕

一

愛神は絶えず、シヴァや梵天やヴィシュヌを、
鹿の眼をした女たちの奴隷にした。
その言語に絶する行為は不可思議極まりない。
海獣(マカラ)の旗標をつけた愛の神に敬礼！（二）

二

微笑、ときめき、羞じらい、恐れ、
顔をそむけ、ながしめで見ること、
甘い言葉、嫉妬で怒ること、

一　まず、愛の神カーマの絶大な力を讃える。ヒンドゥー教の三大神であるシヴァと梵天とヴィシュヌでさえ、カーマの力によって美女たちのとりことなったのであるから、他のものはなおさらである。○奴隷（gṛha-kumbha-dāsāḥ）—「家で水瓶を運ぶ奴隷たち」。批判版 guha-kumbha-dāsāḥ. 異本 gṛha-karma-dāsāḥ.
○鹿の眼をした女（hariṇekṣaṇā）—美女の眼はしばしば鹿の眼に喩えられる。
○海獣(マカラ)（makara）—一・四（解説）を見よ。カーマはマカラの旗標を持つという。

二　ときめき（bhāva）—恋心を抱いた若い女性の身体に表われた「装飾」（alaṃkāra）の一つ。恋のきざし。拙稿「女性の青春における装飾」（『国学院雑誌』八二—九、一六頁）を見よ。
○戯れのしぐさ（līlā）—bhāva と同じく、若い女性のしぐさに表われた「装飾」の一つ。女が恋人の動作をまねることであ

戯れのしぐさ……。
ありとあらゆる感情を現わして
女は男を縛りつける。　(七九)

三

秀眉をひそめてながしめを送り、
やさしく語り、羞じらいを含んで笑う。
戯れて、緩やかに、歩み立ち止る……。
これが女たちの装飾であり武器である。　(九一)

四

ここでは眉をひそめ
あちらでは羞じらいに満ち、
ここではひどくおびえたかのよう、
あちらでは戯れ媚をふくむ……。
少女たちの、愛にあふれて快い
こんな眼の動きで、諸方は
花開く青蓮をいっぱい
播き散らしたかのようになる。　(八九)

五

月のように輝く顔、青蓮の美を
あざ笑う眼、黄金を凌駕する肌の色、
黒い蜂をしのぐ髪の束、
象の隆起した額の美を奪う両の乳房、
豊かな臀部、人を魅する甘美な言葉。
これらは若い女の天賦の装飾である。　(九〇)

六

はつかな微笑あどけなく、
他意なく揺れるまなざしの力。
初めての艶めいた話しぶり、

ると定義されている。拙稿（前掲、一七頁）を見よ。
○感情（bhāva）―「ときめき」と訳したbhāva と異なる。ラサ（美的快感）理論における重要な述語。演劇論では八種（あるいは九種）の恒常的感情（sthāyi-bhāva）をはじめとする四十九種の感情をあげる。

五　象の隆起した額（ibha-kumbha）― 女の豊満な二つの乳房は、しばしば象の額の二つの隆起に喩えられる。はなはだインド的な美意識である。

風情ある言葉が口をついて出る。
歩きだせば、芽ぶいた媚態にあふれ……。
鹿の眼をした少女が青春に触れる時、
およそ快くないものがあろうか。　(九三)

七

見られるもので最高のものは何？
鹿の眼をした女の愛に歓ぶ顔。
嗅がれるもので最高のものは何？
彼女の口から出る息ぶき。
聞かれるもので最高のものは？
彼女の言葉。味わわれるもので
最高のものは？　彼女の新芽のような
唇の味。触れられるもので最高のものは？
彼女の躰。熟慮さるべきものは何？
彼女のうら若さ。
情けを知る人々により、あらゆる場合、
彼女の艶やかさが熟慮さるべきである。　(一〇七)

八

揺れ動く腕環の連と帯飾りが
リンリンと鳴り響く。足環の音……。
娘たちは囀る水鳥（ハンサ）を凌駕する。
恐れおののく雌鹿にも似た
愛らしいながしめにより、
娘たちは何人（なんぴと）の心を魅了しないか？　(八〇)

九

サフランの煉香で躰に模様を描き、
白い乳房に真珠の頸飾りが揺れ、
足環という水鳥（ハンサ）の囀る足の蓮花……。
そんな美女は、この地上で、

八　娘たちは、腕環や帯飾りや足環の音を美しく響かせて、水鳥（rāja-haṃsa―ハンサの一種。一・一四の解説を見よ）の鳴き声を凌駕する。足環の音はしばしばハンサ鳥の鳴き声に喩えられる。

九　足環という……―足環の音をハンサ鳥の鳴き声に喩えることについては、二・八（解説）を見よ。また、美女の足は蓮の花に喩えられる。

何人(なんびと)を魅了しないだろうか？（一一七）

一〇

大詩人たちはいつも女のことを
「弱きもの」と呼ぶが、疑いもなく
彼らは逆のことを言っている。
女たちは絶えず瞳を動かして
視線を投げかけ、帝釈天などをも
征服する。どうして「弱きもの」か。（一二〇）

一一

きっと愛の神は、美しい眉をした
あの女(ひと)の召使なのだ。
彼女の眼の動きによって指示された
男たちに働きかけるのだから。（一三七）

一〇　帝釈天（Śakra）―神々の主インドラのこと。例えばインドラは、ガウタマ仙の妻アハリヤーに魅了されて交わった。『インド神話』一〇五―一〇六頁を見よ。

一二

髪はよく整えられている。
両眼は耳のきわまで達している。
口の中も、生まれつき清らかな
歯の列に満ちている。
この二つの瓶のような乳房は
真珠〔の頸飾り〕がいつも懸かり魅力的だ。
たおやかな女よ、このように
あなたの躰は静寂そのものなのに
我々の情熱をかきたてるのだ。（一三九）

一三

あどけない女よ、お前には何故か
稀代の弓取りの才が認められる。
お前は矢を用いずして、

一二　この詩は次のような二重義を含む。「よく整えられている」（saṃyaminaḥ）＝「感官を制御している」。「耳のきわまで達している」（śruter api paraṃ pāraṃ gate）＝「ヴェーダ聖典（śruti）の奥義に達している」。「歯の列に」（dvijānāṃ gaṇaiḥ）＝「バラモンの群に」。「真珠〔の頸飾り〕がいつも懸かり」（muktānāṃ satatâdhivāsa-）＝「解脱した人々がいつも住することにより」。だから、一連の第二の意味により、「あなたの躰は静寂そのもの」と述べるのである。

一三　弦（guṇa）は諸々の「美質」（魅力）という第二の意味を含む。○あどけない女（mugdhā）―恋を知ったばかりの初々しい少女。演劇論や性愛論などであげられるヒロインの分類の一つ。cf. *Daśarūpaka*, II. 16; *Sarasvatīkaṇṭhābharaṇa*, p. 684; *Nāṭyadar-*

弦(グナ)だけにより心を貫くのだ。 〔二四〕

一四

ランプがあっても、火があっても、
星や宝玉や月があっても、
仔鹿の眼をした女がいなければ、
私にとってこの世は闇だ。 〔二〇〕

一五

ここに豊かな乳房がそびえ立つ。
両の眼はふるえ、眉は波立っている。
この新芽のような唇は愛にあふれる。
これらが苦悩をもたらすのは当然だ。
だが、愛の神が自ら描いた、美を表わす
文字の列のようなこの毛脈は、
胴に生えているのに、どうして
いやが上にも私を苦しめるのか。 〔二九〕

paṇa, p. 179; *Sāhityadarpaṇa*, III. 58; *Pratāparudrīya*, p. 25; *Kāvyānuśāsana*, p. 413.

一五 この詩は次のような二重義を含む。「そびえ立つ」(udvṛttaḥ)=「正道をふみはずした」。「ふるえ」(tarale)=「浮気である」。「波立っている」(cale)=「落着がない」。「愛」(rāga)=「妬み」。であるから、「これらが苦悩をもたらすのは当然」なのである。
また、「胴に生えている」(madhyastha)=「公平である」。だから、どうして「苦しめるのか」と述べる。
○毛脈 (romāvalī)—女性の臍の下部に縦に走るうぶ毛の線。美女の特徴の一つ。

一六

彼女の顔は月のように輝く。
髪は濃紺、両手は紅蓮のように赤い。
まるで宝石でできているかのように
彼女は輝いている。 〔三一〕

一七

彼女の豊かな乳房は重い。
月のような顔は輝かしい。
両足はゆっくりと動く。
まるで星でできているかのように
彼女は輝いている。 〔三二〕

一八

一六 この詩は次のような二重義を含む。「月のように輝く」(candra-kānta)=「ムーンストーン」。「濃紺」(mahā-nīla)=「サファイア」。「紅蓮のように赤い」(padma-rāga)=「ルビー」。だから、「宝石でできているかのように」と述べる。

一七 この詩は次のような二重義を含む。「重い」(guru)=「木星」。「輝かしい」(bhāsvan)=「太陽」。「ゆっくりと動く」(śanaiścara)=「土星」。だから、「星(天体)でできているかのように」と述べる。

彼女の乳房は豊かで
腰つきは男を魅了し
顔は愛らしいけど……。
おお、心よ、お前は何故騒ぐのか。
もしお前がそれらを望むなら
善行をなせ。善行なくして
望みのかなうことはないのだから。

〔三六〕

一九

鹿の眼をした少女の媚態は
青春の美の新たなる香気に満ち、
成熟の悦楽に燃えるきざし、
愛神に勝利をもたらす保証人、
永く男の心を盗む盗人、
春知り初めし娘の変化の唯一の師。
それはこよなく勝利をおさめる。

〔三七〕

一九 媚態（vilāsa-vyāpāra）—vilāsa は恋する女の身体的変化（「装飾」alaṃkāra）の一つで、恋人を見た時などに、身体や動作や言葉にはなはだしい変化が現われること。拙稿「女性の青春における装飾」（『国学院雑誌』八二—九、一八頁）を見よ。ここではより一般的な意味で用いられている。○春知り初めし娘の変化（abhinava-vikāra）—直訳「新しい変化」。思春期の少女の身体的変化。ニルナヤ版註によれば、突然の恐れ、ふるえ、〔恋人の〕模倣など。*Nāṭyaśāstra*, XXII. 4 ff. その他の演劇論に説かれる「装飾」（alaṃkāra）のこと。○唯一の師（eka-guru）—アプテの梵英辞典の解釈によれば、「一人の師を共有する」こと。すなわち、相弟子のことであるという。ニルナヤ版註によれば、思春期の変化によって〔媚態が〕「この上なく多大（guru）になる」という意であるという。

二〇

鹿の眼をした女がしめやかに打ち解けて
話しかける。その言葉は情があり甘く
やさしく快く、恋心をかきたてる。
口調も甘く、初々しさに満ちてはいるが、
悦びの期待をあらわにする。
生来の魅力をそなえ、信頼にあふれ
愛をふるい立たせる。そんな言葉は
こよなく男を魅了するものだ。

〔一七三〕

〔悦楽の描写〕

二一

あるたおやかな女が、森の樹陰で
幾度も休みつつ、歩いていた。

二〇 口調も甘く（bhaṇiti-madhurāḥ）—批判版の読みを採用した。ニルナヤ版は、phaṇiti-madhurāḥ. ○悦びの期待（saṃmada）—ニルナヤ版註（=saṃbhogautsukya）によって訳した。

二一 別離に焦がれる女の描写。彼女は痩せ細り、日光はおろか月光にも耐えられず、樹陰で休息しながら歩く。別離に

胸を被う衣を手で持ち上げ
月光をさえぎりながら……。（三二）

二二

逢わぬ時は、一目だけでも逢いたいと望み、
逢えば、抱きあって歓びにひたりたい女。
その切れ長の眼の女を抱けば、
我々は、二人の躰が離れぬことを望む。（三三）

二三

頭には開花せんとするジャスミン、
身体にはサフランと栴檀の香油、
胸には愛に酔い痴れる最愛の女……。
ここにこよなき天国が訪れる。（二六）

二四

最初はわずかに、「いや、いや」と言って
嫌がる。それから欲情をおこす。
次に恥じらい、そして躰がぐったりし、
更に拒絶する気力が失せる。
それから愛情に濡れ、願わしい幾多の
秘めごとにより奔放になる。
何の障碍もなく肢体を揉むことにより
こよなき快感に達する……。
妻の性交(よろこび)はこのように心地よい。（三四）

二五

女は男の胸に倒れる。
その束髪は乱れている。
眼を閉じ、だがわずかに開けて。
上位の性交(よろこび)に疲れ、
その頬は汗にぬれている。

苦しむものには、一般には冷い光線をもつといわれる月光も、耐え難く身を焦がすものになる。

二三　開花せんとする……—批判版 jrmbhaṇonmukhī を採用。ニルナヤ版は jrmbhaṇaṃ mukhe（口にはあくび）。
○サフランと……—直訳「サフランと交った」。
○訪れる（āgataḥ）—批判版の読みを採用。ニルナヤ版は āgamaḥ と読み、「天国という語で表示される聖典（āgama）」と解するが疑問。

二四　躰がぐったりし(ślathikṛta-tanu)—批判版の読みを採用。ニルナヤ版は ślathodyamam（〔拒絶する〕努力がゆるみ）。
○妻（kula-strī）—一般には「良家の女」という意だが、ニルナヤ版の註（=svas-trī）に従って、「妻」と訳した。

二五　女が男の役割をする(puruṣāyita)時、すなわち女上位の体位の描写。『カーマ・スートラ』二・八の冒頭を見よ。

幸せな男たちは、こんな女たちの
唇の甘露を飲む。　（一二三）

二六

眼を半ば閉じた恋人たちに、
交わりの味わいが〔快感の〕知覚に
続いて現われる。
恋人たちは、お互いに、これこそ
まさに愛の極みであると確信する。　（一二五）

二七

年老いても男たちに性欲があるとは、
不適切で道理にあわぬことだ。
また、女たちの寿命と快感とが、
乳房の垂れるとともに終るように
創られていないことも……。　（一二八）

二六　エクスタシーを知覚した恋人たちは、陶然として眼を半眼に閉じて、その余韻を味わう。この味わいこそ、真に愛の極みであろう。

二八

王様、この世で渇愛の海の果てに
達したものは誰もいません。
莫大な財産が何になりましょう。
自分の体に情熱と若さが失せたら……。
我らは家に帰ります。
満開の白蓮と青蓮のような眼をした
妻たちの容色を、老いが攻撃し
たちまち滅ぼしてしまわぬうちに……。　（八六）

二九

青春は愛欲の唯一の家、
幾多の地獄の大苦を受ける原因、
迷妄の生ずる種子、
知恵の月を覆う雲の群、

二八　長いこと王に仕えて妻と別離している男が、王に向って、家に帰って妻と暮したいと申し出る。

愛神の唯一の友、多様に顕れ出た
明白な罪悪と結びつくもの……。
この世で青春ほど、不利益の群が
巣くう家は他に無い。
（一〇六）

三〇

青春は恋の樹に水をそそぐ雲、
流れ出る愛戯の激流、
愛の神の親しい友、
巧みな言葉の真珠を抱く海、
女の眼というチャコーラ鳥にとっての満月、
幸運と富貴の宝庫……。
青春が訪れた時、少数の幸せな人のみが
正気でいられるのだ。
（一〇五）

三一

三〇　チャコーラ鳥（cakora）―鷓鴣の一種。学名 Perdix rufa. 月光を常食とするとみなされた。→ヒンディー語 cakor→英語 chukar（イワシャコ。学名 Alectoris graeca.）

汚れなき叡知を持つ男たちが、
この空しい輪廻の中で、
悪しき王の宮殿の戸口で
恥ずべき仕事にしがみついて、
どうして心の平静を失ってしまうものか。
もし、昇る月のような光に満ちて、
蓮弁のような切れ長の眼をし、
帯の鈴を響かせ、乳房の重みで
胴を撓める乙女たちがいないなら！
（九七）

三二

ヒマーラヤの地には、シッダの住む洞窟や、
シヴァ神の雄牛の肩に裂かれた樹々や、
ガンジスに洗われた岩々がある。
このヒマーラヤの最上の地があるのに、
心ある人々が、どうして、平伏して

三一　自分がこのような下らない王のもとで、辛抱して仕えているのは、最愛の女、妻を養うためだ。さもなければ、どうして自分のような男が宮仕えしよう。

三二　趣旨は三一と同じ。女のことさえなければ、仕官をやめてヒマーラヤに行って修行するのだが……。
○シッダ（siddha）―ヒマーラヤ山中に住む半神族の一種。あるいは、ヨーガ行者（yogin）のこと。八種の神通力（siddhi）を備えている。
○雄牛―シヴァの乗物である雄牛ナンデ

その頭を汚がし、おとしめるものか。
もし、愛神の武器である、おののく
仔鹿の眼をした女たちがいなければ……。　（三四一）

三三

輪廻よ、汝の果てに至る道は
これほど遠くはなかっただろう。
もし越え難い女たち、
男を酔わす眼をした女たちが
汝の間にいなければ……。　（一〇三）

三四

竹の節のように艶やかなクシャ草を、
石片の先で根を絶ち切り、一口
森の牝鹿たちに与えよ。
さもなくば、シャカ族の乙女の
頬のように純白の蒟醤（きんま）の若葉を、
爪を赤くして裂き、妻たちに与えよ。　（一五七）

三五

感官の対象はすべて空しく、
畢竟不快で、諸悪の根源であり、
嫌悪さるべきではないか。
それにしても、地上で、利他ほど
功徳あるものはない。
また、この輪廻において、
蓮の眼をした女よりも
心地よいものは他にない。　（八三）

三六

高貴なる人々よ、偏見を捨てて
なすべきことを熟慮し、

ィンのこと。

三三　輪廻（saṃsāra）の循環を絶ち切って、再生（再死）しないことが解脱である。もしも魅力ある女がいなければ、解脱はもっと容易に得られるだろうに。女は解脱の最大の障害である。

三四　森林に隠棲するか、妻といっしょに在家の生活を送るか、どちらを選ぶかが問題だ。
○シャカ族（Śaka）―元来、中央アジアの遊牧民（スキタイ）であったが、大月氏に追われ、紀元前二世紀に南下して、紀元前一世紀には西北インドに定着した。
○爪を赤くして……―直訳「赤い爪の先で裂いた…若葉を」。蒟醤（tāmbūla）の若葉は白いが、噛んだり裂いたりすると赤くなる。

三五　後半の読みは批判版と全く異なる。
○感官の対象（viṣaya）―眼耳などの感覚器官の対象。すなわち色声など。感覚的に快いもの。批判版の読み vāthā viṣayā を採用。ニルナヤ版は pāpa-viṣayā.

三六　山々の尻…―尻（nitamba）という語は、山の「斜面」という意味をも含む。山腹に住んで修行すべきか、女の尻

きっぱりと言いなさい。
山々の尻に住むべきか、
あるいは愛に輝く艶やかな女の
尻に仕えるべきか……。（八四）

三七

夢のようにはかなく、畢竟無常なる
人の世において、賢者たちには
二つの道がある。
真理の知という甘露水に游ぎ戯れる
叡知を持ち、孜々として時を過ごすか、
それとも、豊かな乳房と尻をした
魅力あふれる女たちの太腿に手を埋め、
ひたすら感触を楽しんで時を過ごすか……。（八八）

三八

罪を払うガンジスの水辺に住むべきか、
それとも、若い女の
頸飾りの懸かる魅惑の乳房に
すがるべきか……。（一三五）

三九

下らない多弁、おしゃべりが何になる。
男はこの世で、いつも二つのことに
専念すべきである。
初めての愛の戯れを切望し、乳房の重みに
疲れた、美女たちの青春か、
さもなくば、森か……。（六五）

四〇

諸君、私はありのままに言う。
偏見なしに。

を追っかけまわすか、どちらを選ぶのか、という意。

三七　人の世（saṃsāra）—サンサーラは「輪廻」と訳されるが、しばしば生存（bhava）と同義で用いられる。○豊かな乳房……—この部分は非常に難解で、しかも極めてエロチックなので、少し意訳した。

四〇　七つの世界（sapta loka）—一般に、地上より上の世界として、七つをあげる—Bhūr, Bhuvar, Svar, Mahar,

七つの世界において、このことは真実だ。
豊かな尻の女たち以上に
魅惑的なものは、他に何もない。
また、それ以上に苦しめるものも……。　（八一）

〔女性の非難〕

四一

明らかに不浄の袋である女を見て、
賢者すら、「可愛い女（ひと）、蓮弁の
眼をした女、大きなお尻の女、
高くそびえる豊かな乳房の女、
蓮花のように美しい顔の女、
美しい眉の女」と言って
酔い痴れ、歓び、戯れ、讃える。
ああ、迷妄の悪戯！　（一三二）

Janas, Tapas, Satya. また、これに七つの地下界を加えて十四の世界があるという。

四二

思い出せば苦悩をもたらし、
見れば狂気をもたらし、
触れれば迷妄をもたらすのに、
あの女は一体どうして
愛しいものであるのか？　（二四八）

四三

眼のとどく所にいれば
女は甘露よりなるもの。
しかし、眼のとどかぬ所に行けば
毒よりもひどいもの。　（二三五）

四四

豊かな尻の女を除いては

甘露も毒もありはしない。
愛してくれれば
甘露の蔓草となる女が、
愛が過ぎれば
毒の蔓草となる。　（六一）

四五

疑惑の坩堝、ふしだらの世界、
無謀の市、罪悪の倉庫、
幾多の詐術よりなるもの、
不信の発生地、天国の門の障碍、
地獄の都の入口、あらゆる幻術の小箱、
甘露でできた毒、男たちの枷……。
この女という装置を誰が作ったのか？　（六四）

四六

本当は、あの月が顔となったのではない。
また、一対の青蓮が眼となったのでもない。
そして、その肢体は黄金でできてはいない。
しかし、愚かな人々は真実を知りつつも、
詩人にあざむかれて、鹿の眼をした女の
皮と肉と骨よりなる躰に仕える。　（一〇八）

四七

魅惑的な女の媚態は生まれつきなのに、
まさにそれが愚者の心を魅了する。
まことに、蓮花の赤さは
自然のものなのに、
蜂はそこで空しく飛びまわる。　（八一）

四八

嫋やかな躰の女の蓮花に似た顔は、

四六　一般に、美女の顔は月に、眼は青蓮に比較され、その体は黄金のようだと表現される。

四七　赤さ（rāga）—「情熱」、「愛情」という意味をも伴う。

満月の輝きを奪い、こよなく快い形で、
その唇は蜜のようだ。それは
熟れた果実のように、今や、非常に
甘美であるが、この時期が過ぎると、
毒のように苦をもたらすであろう。　（九六）

四九

女の胴の三条(みすじ)の線は波立つ波、
そびえる豊かな両の乳房は
水上を游ぐチャクラヴァーカ鳥の夫婦、
輝く顔は蓮の花……。
愛しい女の形状(すがた)をとる、こよなく酷(むご)い
この河を、この世で遠く捨て去るべきだ。
もし、輪廻の海に沈みたくないなら。　（一〇一）

五〇

四九　女を河に、輪廻を海に喩える。前半は訳しにくいので少し意訳した。
○三条の線（trivali）―女の臍の上にある横の三条の線。美女の標識。田中於菟彌『酔花集』（春秋社）一八二―一八七頁を見よ。
○チャクラヴァーカ鳥（cakravāka）―赤い鴛鳥の一種。極めて夫婦仲のよい鳥といわれる。学名 Casarca ferruginea. 鴛鴦と漢訳される。

一人の男としゃべっていても
他の男を艶やかに見たり、
心にいる別の男のことを思う。
女は本気で愛しはしない。　（一四七）

五一

女たちの言葉には蜜、
心にはただ毒のみがある。
だからこそ、唇は飲まれ、
胸は拳で打たれるのだ。　（一九八）

五二

友よ、ながしめという毒の焔を発し、
媚態という頭巾を拡げ、
本性ねじくれた
この女という蛇から遠く離れよ。

五一　胸は拳で……―性交において、男は女の両肩、頭、乳房の間、背中、陰部、腋に種々の愛打を加える。陰茎を挿入している間は、乳房の間を打つ。『カーマ・スートラ』二・七（一五）を見よ。

五二　女を蛇に喩えて、一般の蛇よりももっと質(たち)が悪いと述べる。
○頭巾（phaṇa）―コブラの頸部にある扁平の脹らみ。コブラは興奮するとこれを拡げる。
○ねじくれた（viṣama）―「蛇行する」と

他の蛇に咬まれた者は
薬により治癒され得るが、
狡猾な女という蛇に食われた者は
呪術師たちも見捨てるのだ。　(一〇五)

五三

愛神という漁師は、この生存の海に
女という釣針を投じ、
女の唇という餌を渇望する
男という魚たちを即座に釣り上げ、
愛の焔（ほむら）の上で焼く。　(一一四)

五四

心という旅人よ、
乳房の山で越え難い
女体の密林をさまようことなかれ。

いう意味を含む。
○呪術師 (mantrin)―蛇の毒を消す呪文 (gāruḍī vidyā) を知っている人。

五三　愛神を漁師に、女を釣針に、生存（輪廻）を海に、女の唇を餌（肉片）に、男を魚に、愛を火に、それぞれ喩えている。

五四　心を旅人に、乳房を嶮岨な山に、女体を密林に、愛神を盗賊に、それぞれ喩えている。

そこには、愛神という盗賊がいる。　(五四)

五五

長くて動きまわり蛇行して、威力あり
頸を脹らませ、青蓮のように輝く
蛇に咬まれた方がましだ。
女の〔切れ長で揺れ動き、ながしめの、
光り輝き大きな、青蓮のような〕
眼によって咬まれたくはない。
もし蛇に咬まれても、解毒に長けた医師は
各地に大勢いる。だが、可愛い女の眼に
少しでも見つめられた私には、
医師も薬もありはしない。　(二九)

五六

ここに甘美な歌が、舞踊が、

五五　やはり女を蛇と比較して、女に見つめられるより蛇に咬まれた方がましであるという。前半の幾つかの形容詞は、蛇にかかる意味と女にかかる意味とを伴う。
○頸を脹らませ (bhogin)―コブラは興奮すると頸部を扁平に拡げる (bhoga=phaṇa)。二一・五二の解説を見よ。

五六　私の眼・耳・鼻・舌・身という五

〔唇の〕味が、香りが輝き出る。
そして、乳房の接触が……。
かくて、真理を忘れ果て、
自分の好む行為のみに長けた
五つの感官により、
私は迷い欺かれた。（一〇一）

五七

愛は癲癇だ。錯乱状態に入ると、
幾度も、言いようもなく身体を変形させ、
精神を乱し、眼をまわさせる。
だが、それは、呪文によっても
鎮められず、医薬の対象ともならぬ。
また、いかなる厄払いを行っても
それは消えることはない。（一二六）

つの感覚器官は、感覚的に快い、女の舞踊、歌、芳香、唇の味、乳房への接触（色・声・香・味・触）という五つの対象に執著して、かかる感覚的快楽が空しいものであるという真理を忘れ果てている。

五七 愛の症状は癲癇のそれに似ている。しかし、癲癇は呪文や医薬や厄払いの儀式（śāntika）によって鎮静するが、愛はそれらのものによっても鎮まることはない。

五八

醜男や老いぼれなどや田舎者、
卑しい男、膿したたる男……。
娼婦はそういう男達にも、わずかばかりの
金のために、魅力あるその躰を与える。
知性の如意樹を切る刀である
こんな娼婦に、誰が惚れるものか！（一〇九）

五九

娼婦は愛の焔だ。美貌という薪で
燃え盛る……。
欲情を抱いた男たちは、そこに
若さと財産とを焼べる。（一一〇）

六〇

五八 如意樹（kalpalatikā）—何でも望みをかなえる樹。一・三七（解説）参照。知性（viveka）を如意樹に喩えている。

貴顕の士は、たとえ魅力的でも
娼婦の唇に口づけするものか。
スパイ、兵士、盗賊、召使、蕩児（ヴィタ）、
役者たちの、唾液の器である……。（三九）

〔離欲と愛執の章〕

六一

白い切れ長の眼をし、
若さを誇り豊かに盛り上った乳房を持ち、
くびれた胴の上に蔓草のような
三条の線が輝く……
そんな女たちの姿を見ても
心を動かさぬ人々は幸せだ。（七八）

六二

少女よ、何故そんなものうげな視線を
投げかけるのか。艶やかに半眼を閉じて。
やめよ、やめよ、いくら努めても無駄だ。
今や我々は変ってしまった。
若気はやんだ。好んで森に住み、
迷妄は尽きて、浮世のことをすべて
草のように見なしているのだ。（六三）

六三

この少女は、青蓮の花弁の輝きを盗む
かのような眼を、私に絶えず投げかける。
彼女は何を意図しているのか？
我々の迷妄は去った。愛神という
蛮族（シャバラ）の矢に撃たれて燃える焔は鎮まった。
それなのに、不幸な女はやめようとしない。（二八）

六〇　蕩児（viṭa）―主人公（nāyaka）の仲間の一人。享楽に身をもちくずしているが、一芸に秀で、礼儀作法をわきまえ、雄弁である。『カーマ・スートラ』一・四（三一）を見よ。cf. *Daśarūpaka*, II. 9; *Sāhityadarpaṇa*, III. 41. ここでは悪い意味で用いられているので「蕩児」と訳した。
○唾液の器（niṣṭhivana-śarāva）―「飲み残しの器」（=ucchiṣṭa-pātra）。娼婦の口は、下等な男たちとの接吻で汚れているという意。

六一　ニルナヤ版註では、六一から八〇までの詩節は「よく愛執を離れた者と離れ得ぬ者の章」（Suvirakta-durvirakta-paddhati）と名づけられている。六一―七〇で「よく愛執を離れた者」、七一―八〇で「愛執を離れ得ぬ者」について描写されている。
○三条の線（trivalī）―一・四九（解説）を見よ。

六三　蛮族（śabara）―シャバラは山岳地帯に住む蛮族の名。

六四

おい、愛の神よ、お前はどうして弓の弦を
響かせて、矢を無駄にするのか？
おい、おい、郭公（コーキラ）よ、お前はどうして
甘い声で空しく囀るのか？
可愛い女よ、やさしく巧みで甘美な
揺れるながしめは、もうたくさんだ。
わが心は今、シヴァ神の御足を念想して
甘露を味わっているのだ。　（三七）

六五

別れていても、互いの心が結ばれていれば、
会っているのと同じこと。
いっしょにいても、心が離れていれば、
別れている方がましなのだ。　（三八）

六四　郭公(kokila)—コーキラはインドの郭公。学名 Eudynamis scolopaceus. ヒンディー語→英語 koel, koil (=long-tailed cuckoo きじかっこう)。この鳥は第五音階 (pañcama-svara) で鳴くとされ、その甘美な声は女性の声と比較される。

六六

もし最愛の妻が生きていないなら、
帰っても何になろう。また
もし生きているとしても……。
新しい雲の群をながめて、
旅人はその家へ帰らない。　（三三）

六七

賢者たちよ、女とつきあうことは
刹那に滅する快楽だ。やめなさい。
慈悲と智恵という妻とつきあえ。
実際、地獄では、頸飾りの懸かる
豊かな乳房も、宝玉の帯が鳴り響く尻も、
依り所とはならぬものだ。　（三六）

六六　「新しい雲の群」は雨季の始まりを暗示する。雨季になると、旅人たちは旅を続けられなくなるので、家路を急ぐ。しかし、この旅人は、妻が別離に耐えかねて死んでいたとしたら、帰っても意味はないし、また生きているとしても、帰って何になろうと考えて、家に帰らない。ニルナヤ版註によれば、この旅人は厭離の心を抱いているからであるという (vairāgya-niścala-cittatvāt)。別の解釈 (P.G. Nath, p.268) によれば、雨季が始まり家に帰れないからであるという。

六八

全身全霊でヨーガの実修に専念する時、
尽きざる慈しみが輝き出る……
そんな幸せな人にとって、何になろう、
恋人のおしゃべり、蜜のような唇、
月のような顔、芳わしい吐息、
瓶のような乳房を抱き、交わることが。

（一四六）

六九

愛の闇（ティミラ）に覆われて無明が生じていた時は、
この全世界が女でできていると見えた。
今や、非常に明晰な知性という
眼薬をつけた我々の眼は正常にもどり、
三界すべてが梵（ブラフマン）であるとみなす。

（六）

六八　全身全霊で……―直訳「ヨーガの実修に専念する（yogābhyāsa-vyasana-vaśayor―批判版の読み）個我（ātman）と意（manas）とに、尽きざる慈（maitrī）が輝き出る時、その幸運な人にとって」。難解である。ヨーガにおける慈（maitrī）などについては、cf. *Yogasūtra*, I. 33; III. 23. ニルナヤ版註は、「すべての外的な対象を捨てて、意（マナス）が個我（アートマン）に喜ぶこと（ātmārāma）、という意である」と述べる。

○恋人のおしゃべり……―以下は、声（しょう）（音）・味（み）・色（しき）（形）・香（こう）・触（そく）（接触）という五つの対象をあげている。

六九　闇（timira）―ティミラは眼病の一種でもある。だから、「眼薬」（añjana）という語が生きる。愛を眼病に、知性（viveka）を眼薬に喩える。

七〇

賢者たちの汚れなき知性の灯明は輝く。
鹿の眼をした女たちの
揺れるながしめに撃たれれぬ限りは……。

七一

執着を捨てろと語ること……
それは聖典読誦に専念する
賢者たちの話題にすぎない。
青蓮の眼をした女たちの、
紅玉の輝く帯をつけた尻を
誰が捨てられようか！

（一四七）

七二

女性を非難する人は、

七一　ここから、「愛執を離れ得ぬ者」（durvirakta）の描写に入る。

七二　他者を欺く（para-pratāraka）―批判版は、sva-para-pratāraka（自他を欺

他者を欺く似非（えせ）賢者。
功徳（タパス）の果報は天国だが、
天にも天女がいるではないか。（一二〇）

七三

この世には、酔象の額を裂く
勇者たちがいる。また、怒り狂う
獅子を殺すことに長けた者もいる。
しかしながら、強力な人々の前で
私はうけあう。力ずくで愛神の誇りを
うちくだく人は稀であると。（一九六）

七四

人は正道を践（ふ）み、諸々の感官を制し、
廉恥心を持ち、礼節を保つ。
ただし、艶やかな女たちの

く）と読む。
○功徳（tapas）―タパスを「功徳」と訳したことについては、一・九六（解説）を見よ。タパスの目的は天界に生まれることである。

七三 酔象（mattebha）―発情し、こめかみから分泌液（mada）を出して興奮する象。
○獅子を殺すことに（-mṛgarāja-vadhe）―ニルナヤ版は誤植。

七四 後半は全体的に隠喩（rūpaka）が用いられている。女の視線が矢に喩えられる。女の眉が弓に喩えられ、眉を顰めるという動作が弓をひきしぼることに喩

視線という矢が彼の心にあたり、
その平静さを奪わぬうちは……。

七五

女は眉という弓をひきしぼり、
矢を放つ。黒い羽根を持つその矢は、
耳をかすめて飛ぶ。（九五）

七六

女がひとたび狂的な愛に燃え
何ごとかを始めたら、
梵天といえども、その妨害を
することを躊躇（ためら）う。（一一五）

偉大さや博識や高貴さや
知性がある。
因業な愛神の火が

えられる。その矢は黒い羽根（pakṣman＝睫）を有する。女がながしめで見ると、視線は耳の端から出る。また、放たれた矢は射手の耳をかすめて飛ぶ。

身体の内で燃えぬうちは……。 (五一)

七七

学者でも処世に長けた者でも
こよなく賢明な者でも、
この輪廻において、よき帰趣の
器となるものは稀である。
この世には、地獄の都市の門を開く
鍵のような、魅惑の眼をした女たちの
美しく曲った眉があるから。 (100)

七八

犬は痩せて、片目で足をひきずり、
耳もとれ、尾もなく傷だらけで、
膿にまみれ、その体は蛆の大群に
おおわれ、飢えに苦しみ老衰し、

七八 瓶の片を……—犬が瓶に首をつっこんで餌を食べているうちに、首が抜けなくなり、瓶を地に打ちつけて壊しても、瓶の入口の部分がとれなくて、首のまわりにつけている状態。

瓶の片を頸のまわりにつけていても、
なおも雌犬を追いかける。
愛神は死んだものをもまた殺す。 (二)

七九

婦人は愛神の栄(はえ)ある印章であり、
一切の物事に繁栄をもたらす。
それを捨て去る愚かで知恵なき者、
空しい果報を捜し求める者たち……。
彼らは愛神に無慈悲に罰せられ、
ある者は裸になり、ある者は坊主になり、
ある者は五髻を、または弁髪を結い、
ある者は髑髏外道(カーパーリカ)となり下る。 (二三)

八〇

風と水と葉を食べて生活する

七九 王が印章 (mudrā) に従わぬ者を罰するように、愛神カーマは女という印章を捨てる者を罰する。
○空しい果報 (mithyā-phala) —解脱 (mokṣa) や生天など、諸宗教が求める果報を偽りであるとする。
○裸になり (nagnī-kṛta) —ジャイナ教の裸形派 (Digambara) を指す。
○坊主になり (muṇḍita) —剃髪する。仏教僧を指す。
○五髻を……—苦行者 (特にシヴァ教徒) は頭上に五つの髪の房 (pañca-śikha) を有する。また、弁髪を結っている(jaṭila) のも苦行者の特徴。この詩は『パンチャタントラ』(ed. G. Bühler, 1891, IV. 34) にもあるが、そこでは、「五髻を結う」(pañcaśikhī-kṛtāś ca) の代りに、「赤衣をまとう」(raktapaṭī-kṛtāś ca) となっていて、仏教徒にかける。拙訳『パンチャタントラ』(大日本絵画) 三六七頁を見よ。
○髑髏外道 (kāpālika) —カーパーリカはシヴァ教の一派。裸で身体に灰を塗り、頭蓋骨の器 (kapāla) を持ち、カトヴァーンガ (katvāṅga) 杖を携える。
八〇 賢者でさえも女に迷うのに、一般の人が諸欲を絶つことは、山が海に飛び

ヴィシュヴァーミトラやパラーシャラ等でも、
女の蓮花のように美しい顔を見ると
迷妄に陥る。
ギーやミルクやヨーグルトとともに米飯を
食べる人々がもし感官を制するならば、
ヴィンディヤ山が海に飛び込むだろう。

（三〇）

〔季節の描写〕

〔春〕

八一

風かおり、樹々の梢は芽吹く。
郭公の恋人たちは甘く切なく
期待をこめて鳴く。
女たちの月のような顔には
わずかに、快楽（けらく）の汗が流れる。

八二

地上に春（マドゥ）が広がると
すべてのものが活気をおびる。

（九九）

この春は、雌の郭公の甘い囁き、
マラヤ山の風により、
別れた人たちを苦しめる。
ああ、不幸な時は、
甘露も毒となるものだ。

八三

かたわらには、愛に昂（たか）ぶる恋人がいる。
種々の媚態を示すことに疲れた……。
耳には雌の郭公の甘い囁き。
花開く蔓草のあずまや。
幾人かの秀でた詩人との集会。

（一二）

込むのと同様に、不可能である。
○ヴィシュヴァーミトラ（Viśvāmitra）—高名な王仙の名。インドラ神に派遣された天女メーナカーに誘惑されて交わる。その結果生まれたのがシャクンタラー。『インド神話』一一五頁以下を見よ。
○パラーシャラ（Parāśara）—聖仙の名。サティヤヴァティーという漁師の娘（実は天女（アプサラス）アドリカーの娘）と恋におち、ヴィヤーサ（Vyāsa, Kṛṣṇa-dvaipāyana）を生ませた。
○ギー（ghṛta）—バター状の乳脂。現在も米飯をいためる時など、インド料理で常用される。
○ヨーグルト（dadhi）—ヒンディー語は「ダヒー」（dahī）。「カード」（curd）と英訳される。
○ヴィンディヤ山（Vindhya）—中部インド（Madhyadeśa）とデカンとを分ける山脈。

八一 以下に、諸季節の描写が始まる。インド文学では、一年は六つの季節に分けられる。春（vasanta 三月中旬—五月中旬）、夏（grīṣma 五月中旬—七月中旬）、雨季（varṣa 七月中旬—九月中旬）、秋（śarad 九月中旬—十一月中旬）、冬（hemanta 十一月中旬—一月中旬）、寒季（śiśira 一月中旬—三月中旬）。拙稿「印度の風物詩」（『仏教文化』第六巻、通巻九号、五二—七三頁）を見よ。
○郭公（pika-pakṣin）—コーキラのこと。二・六四（解説）を見よ。「恋人」は雌を意味する。春になると雌のコーキラは発情する。
○快楽の汗（-surata-sveda-）—批判版の読みをとる。ニルナヤ版は -virasa-sveda-（不快な汗）。夏のような大汗はかかないが、性交の際に激しく動いたので、わずかに汗ばんでいる。
○春（madhu）—マドゥ（=チャイトラ）は春（vasanta）の第一の月で、三月中旬—四月中旬にあたる。以下も、マドゥを「春」と訳す。

八二 マラヤ山（Malaya）—インド南西海岸ぞいの山脈で、古代インドの地理では、七大山脈の一つと考えられた。西ガーツ山脈の南端の連山を指すといわれる。栴檀の産地として有名。古来、春にマラヤ山から吹く風は恋心をかきたてるとされる。

八三 愛に昂ぶる（āvāsaḥ kilakiñcitasya）—直訳「kilakiñcita のすみかであるところの」。kilakiñcita（or kilikiñcita）はヒロインの恋愛表現（「装飾」

玲瓏たる月の光、多彩な花輪。
この春には、これらのものが
選ばれた人々の心を楽しませる。 (二三八)

八四

今や、夫に旅立たれた妻の
別離の火と競いあうマンゴーの花房を、
雌の郭公は切望をこめて眺める。
そして、栴檀の山の風が吹く。
咲いたばかりの凌霄花(パータラ)の強い香を奪い、
ひどい疲れを忘れさせて……。 (二七二)

八五

恋する女たちの心には
あらわな怨みが広がるだろう。
ただし、栴檀の香を運ぶ
マラヤ山の風が吹かぬうちは……。 (二七四)

八六

マンゴーのおびただしい花糸の香が
諸方にあふれ、甘い蜜に蜂が
酔い痴れるこの春において、
何人(なんびと)が切望を抱かぬだろうか。 (三四〇)

〔夏〕

八七

澄みきった栴檀の香水に濡れた
鹿の眼の女たち、
噴水のある浴室、花ばな、月光、
ジャスミンの香を運ぶ微風、
白く輝くテラス……。

alaṃkāra)の一つ。怒り、涙、歓び、恐怖などの種々の愛情表現が混交すること。拙稿「女性の青春における装飾」(『国学院雑誌』八二—九、二一頁)を見よ。○媚態(vilāsa)—やはりヒロインの恋愛表現の一つ。恋人を見た時などに魅力的な態度を示すこと。二・一九の解説を見よ。

八四 別離の火と競いあう(-virahânala-lāhuti-kalām ātanvati)—別離の火にも似た、という意。○栴檀の山(śrikhaṇḍa-śaila)—マラヤ山のこと。一・八二(解説)を見よ。○凌霄花(pāṭalā)—Bignonia (trumpet flower)の一種。芳香を有する。学名Bignonia suaveolens あるいは、Stereospermum suaveolens.

八五 怨み(māna)—怨みには、愛情より生ずるもの(praṇaya-māna)と、嫉妬より生ずるもの(irṣyā-māna)とがある。*Daśarūpaka*, IV. 58–59. この場合は前者。女は愛しているのに拗ねていたのだが、それもマラヤの風が吹く春になるとやみ、素直になる。

それらが、夏、歓びと愛をかきたてる。（九八）

八九

心地よい香の花輪、扇の風、月光、
花紛、浴池、栴檀の粉末、清浄な酒、
白く輝くテラス、薄い衣、
そして、蓮弁のような眼の女たち……。
暑い季節が照りつける時、
幸せな人々はこれらのものを得る。（三四九）

純白に塗られた邸宅、
汚れなく光輝く月、
愛しい女の蓮花のような顔、
こよなく芳わしい栴檀の粉末、
心地よい香の花輪……。
これらすべてが、愛執を抱く人の
心を揺り動かす。
執着を離れた人は無関心だが。（一三四）

〔雨季〕

九〇

雨季は、愛をかきたてる少女の装い。
花開くジャスミンの花の香、
高く隆起した雲の群……。
それは何人（なんぴと）に歓びをもたらさぬか。（一四一）

九一

空には雲が群がり、
大地は新芽に満ち、
風は咲いたばかりのクタジャや

九〇 雨季（varṣa）を若い女と比較している。雨季はジャスミン（jāti）の花を咲かせる。女はジャスミンの花で身を飾る。雨季は湧きあがる雲（payo-dhara）の群をともなう。女は豊かに隆起した乳房（payo-dhara）の重みをともなう。雨季も女も、すべての人を歓喜させる。

九一 雲が群がり（upacita-megham）―ニルナヤ版は誤植。○クタジャ（kuṭaja）―ジャスミンの一種（＝giri-mallikā「山のジャスミン」）雨季に開花する。学名 Wrightia anti-

カダンバで芳わしく、
森は孔雀の群の甘い鳴き声で
心地よい……。
こういうものが、幸福でも不幸でも、
すべての人に切望を抱かせる。（一四〇）

九二

上方には厚い雲のヴェール、
四方の山では孔雀が踊り、
地面は新芽で白く輝く……。
旅人はどこを見ればよいのか。（八七）

九三

ここには稲妻がきらめき、
ここにはケータキーの花が強い香を放ち、
ここには湧き上る雲が轟き、

dysenterica; Holarrhena antidysenterica.
○カダンバ（kadamba）—雨季に橙色で芳香性の花をつける。学名 Nauclea cadamba; Anthrocephalus cadamba.
○孔雀…—孔雀は雨季が訪れると発情し、喜んで鳴き踊る。

九二 上を見ても横を見ても下を見ても、すべて別離の苦しみを強めるものばかりだ。

九三 ケータキー（ketakī）—たこの木の一種。その花。学名 Pandanus odoratissimus.

ここには孔雀が戯れて甘い声で鳴く。
長く美しい睫の女たちにとって、
恋をかきたてるこの別離の日々は
どのように過ぎ行くか。（一三七）

九四

闇が針も通さぬほど密になり、
空が激しい雷雲の音をたてて
その雄弁さを誇り、
水滴の群が落ちる時、
この稲妻の金色の煌めきは
逢引きに行く美女たちを
喜ばせまた当惑させる。（一三一）

九五

恋人たちは篠つく雨のため

九四 喜ばせ…（mudaṃ ca mlānim ca prathayati）—稲光は暗い道を照らしてくれるから、逢引きに行く女（abhisārikā）を喜ばせる。また、自分の身体を照らすので、人に見られることを恐れて当惑させる。ニルナヤ版 grathayati は prathayati の誤植であろう。

邸から外に出られない。
切れ長の眼の女は、寒さにふるえて
きつく男を抱きしめる。
雨交じりの冷たい風は
快楽の果ての疲れを取り除く。
ああ、幸せな男が愛しい女を抱く時、
悪天候も好天となるのだ。　（一四二）

〔秋〕

九六

激しい性交に疲れ果て、気怠い身体を
横たえて、夜半まで眠ってから、
喉が渇いてたまらなくなり、
人気のないテラスで酒に酔い痴れる。
悦楽に疲れた恋人の力無い蔓草の腕が
水瓶から注ぐ秋の水を飲む。
その月光と紛う清らかな水の流れ……。
不幸な男はこうはいかない。　（一四三）

〔冬〕

九七

冬には、ヨーグルト、ミルク、サルピス
を食し、茜染めの衣をまとい、
サフランの香油を躰に厚く塗る。
種々の快楽に疲れ、蒟醤の葉と檳榔子を
口にいっぱい含み、豊かな腿と乳房を
持つ恋人に抱かれて、幸運な男たちは
家の中で安楽に寝る。　（一四四）

九八

九六　激しい快楽のあと、女も男も疲れ果てて眠ってしまうが、真夜中に喉がひどく渇いて目が覚める。男はテラスで酒を飲み始める。女も起きて、蔓草のようにしなやかな腕で、だるそうに水瓶から水を注いでくれる。その秋の水のうまさ！
○水瓶（karkari）—karkari は底に小さな穴のあいている水差し。galantikā とも呼ばれる。

九七　ヨーグルト（dadhi）—二一・八〇（解説）を見よ。
○サルピス（sarpis）—ギー（ghrta）よりも更に純度の高いバター状の乳製品。醍醐と漢訳される。なお乳製品については、拙稿「醍醐味」（中村元編『仏教語源散策』五三—五六頁）を見よ。
○蒟醤……—南方諸国には、蒟醤の葉に檳榔の実を包んで噛む習慣がある。

冬には、咲き誇るプリヤングが輝き、
花開く白素馨（クンダ）に蜂たちが酔い、
寒風に揺れる曼陀羅花（マンダーラ）が貴（あて）やかに輝く。
この時節……。寒さを除くことに長けた
鹿の眼の女が、一瞬でも若者の首に
しがみつくことがなければ、
夜は閻魔（ヤマ）のすみかにも似て、
長々しく過ぎ行く。

(一八〇)

九九

〔寒季（シシラ）〕

頬に口づけし、巻毛のたれた顔に、
シートという音を立てさせ、
胴着をぬいだ胸の豊かな乳房を総毛立たせ、
腿をわななかせ、大きな尻から衣を
はぎつつ、寒季の風が吹く。
女たちに、あからさまに、情夫（ヴィタ）の
ようにふるまいながら……。

(一四四)

一〇〇

髪を乱し、眼を閉じさせ、衣服を力づくで
取り去り、総毛立たせ、興奮によるふるえを
徐々にあらわにさせ、幾度もシートという
声を出させ、唇を傷めつつ、
今やこの寒季の風は、おおかた、
女たちに対し情夫（ヴィタ）のようにふるまう。

(一四五)

恋愛百頌　おわり

九八　恋人と一しょに寝られない不幸な男にとって、冬の夜の長さは地獄のようにつらいものだ。
○プリヤング (priyaṅgu)—蔓草の一種。学名 Aglaia roxburghiana.
○白素馨 (kunda)—ジャスミンの一種。冬に白い花をつける。学名 Jasminum multiflorum (or pubescens).
○曼陀羅 (mandāra)—珊瑚樹。冬に赤色の花をつける。学名 Erythrina indica.
○閻魔のすみか…—直訳「〔そういう若者たちにとって〕閻魔のすみか（地獄）にも似た長々しい更（ヤーマ）(yāma) を有する夜が過ぎる」。ヤーマは時間の単位。一日の八分の一、すなわち三時間。

九九　寒季 (śiśira) の風の行為を情夫 (viṭa) のそれと比較している。
○シート (sīt)—寒さや快感によって女が唇から出す音。『カーマ・スートラ』二・七（一六）を見よ。
○総毛立たせ…—直訳「〔豊かな乳房に〕立毛 (pulaka) の生起をひき起こしつつ」。寒さや快感を感じると、体毛がさか立つ。
○情夫 (viṭa)—viṭa については、二・六〇（解説）を見よ。ここでは、次の詩節をも考慮して、「情夫」と訳した。

一〇〇　前の詩節と全く同じ趣旨。
○幾度も (vāraṃvāram)—ニルナヤ版 vāravāram は誤植。

三　離欲百頌　Vairāgya-śataka

〔渇愛の非難〕

一

髪に飾る美しい弦月という
揺れ動く炎の先端の輝く、
跳梁する愛神という蛾を戯れに燃やし、
至福の境地の頂で輝いて、
内心に広がる限りなき迷妄の闇の群を払う。
ヨーガ行者の心という家における
叡知の灯明であるシヴァ神は
すべてに勝利する。
（一）

一　シヴァ神（Hara）を灯明と比較している。シヴァ神の頭頂の飾りである弦月は灯明の炎の先端に喩えられる。シヴァが愛神カーマを燃やしたという神話は、灯明が群がる蛾を燃やすことに比較される。〔至福の〕「境地」（daśā）には「灯心」という意味も含まれる。シヴァは人の心の迷妄を除き、灯明は闇を払う。シヴァはヨーガ行者（yogin）の心を照らし、灯明は家の中を照らす。

二

危険に満ちた難所を放浪したが
何の成果も得られなかった。
氏素姓にふさわしい誇りを捨てて
人に仕えたが、益なきことだった。
自尊心もなく、他人（ひと）の家で
鴉みたいに、おどおどして食べた。
悪事にふける渇愛よ、お前は増長し
今でもなお満足しないのだ。
（一四）

三

宝を求めて大地を掘った。
種々の鉱石を製錬してみた。
大海を渡りもした。苦労して諸侯に
仕えてみた。呪術にふけり

墓地で夜を過ごしたこともあった。
だが、俺は子安貝の片(かけら)すら得なかった。
渇愛よ、もう満足してくれ！　（一四九）

四

酷薄な奴らの暴言にやっとのことで
耐えた。一生懸命に仕えて……。
涙を内に隠し、空ろな心で笑った。
財に驕り知性を失った奴らに
手をあわせもしたっけ。
希望よ、空しい希望よ、
お前はなおも俺を踊らせるのか？　（一五〇）

五

蓮葉(はちすば)の露にも似たこの生命のため、
無分別にも我々は

五　恥知らずにも（vita-vriḍair）―批判版の読みを採用。ニルナヤ版は māna-vriḍair.

あらゆることを企てた。
財に驕り感性の麻痺した
富者の前で、恥知らずにも
自己の長所を語るという、
そんな過誤を犯しもした。　（一六〇）

六

我々は屈辱に耐えたが、それは
忍辱(にんにく)からではなかった。
家庭の幸福を捨てたが、それは
知足からではなかった。
耐え難い寒さ、風、暑さの苦しみに
辛抱したが、苦行を行じたわけではない。
昼も夜も息をこらして思念したが、
それは富についてであり、
シヴァ神の御足についてではない。

六　聖者（muni）が忍辱（kṣamā）、知足（saṃtoṣa）、苦行（tapas）、禅定（dhyāna）などの善行を行うように、我々も、富者に仕える屈辱に耐え、家庭を捨てて放浪し、寒さなどの苦しみに耐え、いつも富を得たいと念じ続けたが、それらは宗教的動機から行ったことではなく、何の成果も得られなかった。
○それぞれの果報を……―直訳「それぞれの果報によって欺かれた」。

このように、我々は聖者（ムニ）の行う
あらゆる行為をなしたが、
それぞれの果報を得ることはなかった。（一三六）

七

享楽は味わわれることなく、
俺達だけが消耗した。
苦行は行じられることなく、
俺達だけが苦しんだ。
時は〔有益に〕過ぎることなく、
俺達だけが過ぎ去った。
渇愛は滅することなく、
俺達だけが老いぼれた。（一五五）

八

顔は皺だらけになり、
頭は白髪（しらが）でおおわれ、
肢体はぐったりとした。
ただ渇愛のみが若々しい。（一五六）

九

享楽の望みは鎮まり、人々の尊敬もなくなり、
同頸の友たちもみな一せいに天国へ逝った。
ゆっくりと杖にすがって立ち上り、
両眼は厚い闇（ティミラ）に遮られている。
だが、ああ、愚かなる肉体は
死滅することをおびえる。（一五三）

一〇

希望という川は、願望の水をたたえ、
渇愛の波に満ち、そこには
貪欲の鰐や臆測の鳥がいる。

七　〔有益に〕過ぎることなく（na yāto）―善行を行ったり立派な人と交際したりして、時を有意義に過ごさなかった。あるいは、「時間は絶えることなく続くから、過ぎ去ることはない」という解釈もある。

九　老いて欲望もなくなり、身体もぼろぼろになってしまったが、いまだに生命に執著している。ああ、渇愛の恐ろしさよ。
○闇（ティミラ）（timira）―ティミラは眼病の一種。

一〇　希望（āśā）を川に喩え、願望（manoratha）、渇愛（tṛṣṇā）、貪欲（rāga）、臆測（vitarka）、平静（dhairya）、迷妄（moha）、憂慮（cintā）を、それぞれ、

それは平静の樹を倒し、迷妄の渦で
渡り難く、しかもこよなく深く、
そそり立つ憂慮の土手を持つ。
その川を渡りきって、心清い
偉大なヨーガ行者らは喜ぶ。

（一七三）

〔疑似離欲〕

一一

輪廻においてなされた善行が幸せを
もたらすとは、私は思わない。
善行の果報は、よくよく考えれば、
私に恐怖を生じさせる。
多大な善行の結果として
長く享受された快楽は、増大して、
それを楽しむ人々に災を与えるのみ。

（一六三）

川の水、波、鰐、鳥、（土手の）樹、渦巻き、土手に喩える。

一一　善行を行えば、よい果報を得て諸々の快楽を享受できると一般に考えられている。しかし、果報である快楽を味わえば、結局苦しむことになろう。善行の果報として天国に生まれて、この上ない快楽を経験しても、また地上に再生する。このように、輪廻の続く限り苦しみは存続するのである。

一二

享楽はいかに長く続いても、
必ず去ってしまう。人が自ら享楽を
捨てなくても、いずれにせよ
それと別れねばならぬ。ただ、
それが自然に去る時は、人の心に
この上ない苦しみをもたらす。
自らそれを捨てれば、それは
限りなき静寂の楽をもたらす。

（一五七）

一三

ああ、梵（ブラフマン）を知り知性をそなえ
汚れなき洞察を持つ人々は
なしがたきことを行う。
享楽をもたらす富をも、無欲に

一三　願望のみで所有するもの（vāñchā-mātra-parigraha）—実際には所有していないし、また所有する可能性のないもので、ただ手に入れたいと望んでいるだけのもの。

すっかり捨ててしまうのだから。
だが我々は、過去にも現在にも得たことのない、
これから得られる確かなあてもない、
願望のみで所有するものをも
捨てることができないのだ。　　（一六三）

一四

山窟に住み至高の光を冥想する
幸せな人々の、歓喜より生じた涙の雫を、
その膝に恐れなく憩う鳥たちは飲む。
一方、願望に仮作された邸宅や
池の辺や遊林で遊ぶことを望む
我々の場合、寿命だけが尽きてゆく。　　（一九六）

一五

施されたものを食べる。味気のない、
それも日に一度きり……。
大地が褥(しとね)、従者は自分の体のみ。
衣服はすり切れたぼろぎれで作った綴衣(つづれ)。
ああ、それでも、享楽の誘惑は去らぬ。　　（一五八）

一六

乳房は肉塊であるのに
黄金の瓶に喩えられる。
顔は痰のすみかなのに
月に等しいといわれる。
尻は流れる尿で汚れているのに
巨象の頭と競いあうという。
このように、何度でも非難さるべき
女の姿が、大詩人により讃えられる。　　（一五九）

一七

一四　願望に仮作された（manorathô-pacita-）―一三の解説を見よ。

一六　巨象の頭（karivara-śiraḥ-）―象の額の二つの隆起は、普通は女の両の乳房と比較されるが、ここでは尻と比較されている。批判版は karivara-kara- と読み、女の太腿を象の鼻と比較しているととる。

最愛の女の半身を占めるシヴァは、
情熱ある人々の間で、ひとり輝く。
また、愛欲を離れた人々のうちでも、
シヴァほど女への執著を離れたものは
他にいない。抗しがたい愛神の矢という
蛇の毒に翻弄されて迷った一般の人は、
愛神に誑かされて、諸々の享楽を
味わうことも捨てることもできない。　（一二四）

一八

蛾は燃やすものと知らずに烈しい火焔に落ち、
魚は知らずに釣針の肉を食べるかもしれぬ。
しかるに、我々は知っていながら、
この世で、災禍に満ち満ちた
諸々の欲望を捨てることはない。
ああ、迷妄の力は測り知れぬ！　（一六〇）

一七　最愛の女の半身を占める（priya-tamā-dehârdha-hārī）ーシヴァ神と神妃パールヴァティーとが合体した、半身が男で半身が女の形（Ardhanārīśvara）を指す。○愛神に誑かされて（kāma-viḍambito）ー批判版の読みをとる。ニルナヤ版は kāma-viḍambitān.

一九

口が渇いた時には
冷くておいしい水を飲む。
飢えに苦しむ時には
肉などの入った御飯を食べる。
愛の火が燃える時には
妻をきつく抱きしめる。
こうして、人々は、病気の療法を
快楽そのものと思い誤る。　（一五三）

二〇

家はそびえ立ち、息子らは
立派な人々に愛され、富は無限、
妻は愛しく、自分の齢（とし）も若い……。
このように、無明に迷った人は

一九　療法（pratīkāra）ー対症療法。おいしい水や御飯や女は、欲望を一時的に鎮めるものにすぎないのに、一般の人は、それらのものを快そのものと誤認している。

二〇　息子たち（sutāḥ）ー　ニルナヤ版（sutaḥ）は誤植。

すべてを不滅と考えて、
輪廻の牢屋に入る。
一方、幸せな人は、このすべてを
無常とみなして捨て去る。 〔一五一〕

〔歎願と惨めさの非難〕

二一

飢えた幼児が惨めな顔で泣き、
いつも妻のすり切れた衣を引く。
食事をしないで苦しんでいる
この哀れな妻をもし見なければ、
思慮ある男が、どうして、自分の下らぬ
腹のために、「下さい」と乞うものか。
歎願を拒まれることを恐れて、口ごもり
喉は干涸び、声も絶え絶えに……。 〔一五二〕

二二

この満たし難い腹という瓶が
人々を愚弄するのだ。
それは、讃えらるべき偉大な誇りの
結び目を解くことに長け、
広大な美徳の群という蓮花を閉じさす
輝ける月光であり、
一面に生い茂る廉恥という蔓草を
断ち切る斧である。 〔一〇七〕

二三

博識のバラモンの祭火の煙であたりが
暗くなっている、清浄な村や大きな森で、
白い布で縁がおおわれた鉢を持ち、
腹という洞穴を満たすために

二二　人は自分の腹を満たすために、惨めな境遇に陥っている。食うために、人は誇りや美徳や廉恥心を失っている。〇蓮花を閉じさす…ニルナヤ版註とDhanasāragaṇi の註 (p. 122) の解釈に従って意訳した。

二三　親類に依存して卑屈な生活を送るよりも、行乞の生活をする方が好ましい。

門ごとに入り、飢えに苦しみつつも
誇りを持ち、生命を繋ぐ方がましだ。
毎日、親類たちの間で、
惨めに暮すよりはむしろ……。（一七九）

二四

ヒマーラヤの地はガンジスの波しぶきで
涼しく、そこにはヴィディヤーダラの住む
心地よい平石がある。
その土地は無くなってしまったのか？
屈辱的な他人の施食に人々が喜ぶとは。（一三八）

二五

洞窟から球根が無くなったのか？
山々から渓流が無くなったのか？
樹々から、甘い果実と樹皮〔衣〕を

二四　ヴィディヤーダラ（vidyādhara）—「神通を有するもの」という意。半神の一種。

二五　洞窟で球根を食べ、渓流の水を飲み、樹々の果実を食べ、樹皮を着て、隠棲者として生きて行けるではないか。それなのに、何故、成り上り者に、もの乞いをするのか？

もたらす枝が無くなったのか？
全く礼を欠いた酷薄な奴らの
顔を仰ぎ見るとは！　その顔では、
苦労して得た僅かな富に対する
慢心の風に、眉の蔓草が揺れている。（一八四）

二六

今は清浄な根や果実を食べて
好ましい生活をせよ。
新鮮な若葉を敷いて大地に寝ろ。
立ち上れ、森へ行こう！
そこでは、無知に心迷い、いつも
富という病疾によりたわごとを言う
卑しい金持の名前すらも聞かれない。（一八一）

二七

成り上り者が得意そうに眉毛を動かす描写において、成り上り者の慢心を風に、眉を蔓草に喩えている。

二六　森に隠棲してしまえば、もはや有力者に媚びへつらう必要はない。そこでは有力者は力を持たず、その名前すら耳にすることはない。○無知に心迷い（aviveka-mūḍha-mana-sām）—ニルナヤ版の aviveka-gūḍha- は誤植か。

苦もなく欲するままに得られる
樹々の果実は、森ごとにある。
各地に、聖河の清涼で甘(うま)い水がある。
こよなく柔らかい蔓草の葉でできた
やさしい感触の褥(しとね)がある。
それなのに、惨めな人々は
富者の門前で苦悩を耐え忍ぶ。
(一六一)

二八

富者の前でもの乞いの苦しみを味わい、
享楽の誘惑に翻弄されて知性を
低めている人々の日々を、
山窟の石の床に坐った俺は、
禅定から覚めた時に
思い出して内心で笑おう。
(一七四)

二八 感覚的な幸福を求めて、富者にもの乞いしている世間の人々の惨めな生活を、山窟の中で、俺も昔はあんな馬鹿なことをしたものだと笑ってみたい。
○享楽の誘惑に翻弄…(viṣayâkṣepa-paryasta-)— 批判版の読みをとる。ニルナヤ版は viṣayâkṣepa-paryāpta-.

二九

足るを知り常に満ち足りている人にとって、
歓喜は絶えることがない。だが、その他の、
財を貪り知力の乱れた人の場合、
渇愛は滅することがない。
創造神は誰がために、測り知れぬ富の
源泉である黄金山(メール)を造ったのか?
自分にだけ莫大な黄金を貯蔵する
こんな山は、俺には気に入らぬ。
(三一四)

三〇

托鉢の生活、惨めでないこと、
感覚的な快楽を求めぬこと、
いたるところ恐れを断つこと、
悪しき妬みや傲りや慢心を砕くこと、

二九 測り知れぬ…(tādṛk-)—批判版の読みを採用。ニルナヤ版は kīdṛk-.(ただし、註は tādṛk)
○黄金山 (Meru)—一・四〇(解説)を見よ。

苦悩の暴流(ぼる)を滅すること。
どこでも毎日、苦もなく得られる、
善人を喜ばす浄化法。障碍なき
シヴァへの献供……。秀でたヨーガ行者は、
このような不滅の宝を讃える。　（一九〇）

〔享楽の儚さの描写〕

三一

享楽においては病を恐れ、
よき家柄にあっては没落を恐れ、
富においては王を恐れ、
誇りにおいては惨めさを恐れ、
権力にあっては敵を恐れ、
容色においては老いを恐れ、
学問においては反論者を恐れ、
美徳においては邪悪な者を恐れ、
身体においては死神を恐れる。
このように、人間にとってこの世の
事物はすべて恐怖をともなう。
離欲のみが恐怖をもたらさぬ。　（一九四）

三二

生は死に、輝く若さは老いに、
知足は財欲に、静寂の楽は
奔放な女の媚態に、脅かされる。
美質は妬む人々に、森の土地は蛇に、
諸王は悪党に、富貴は儚さに
脅かされる。何ものかに
害われぬものがあろうか？　（一九七）

三三

人の健康は幾多の心労や病により
根こぎにされる。富貴のあるところ
口を開けて災禍がふりかかる。
死は、次々と生まれる無力な人々を
必ずや、速やかに支配する。
この気まぐれな運命に造られたもので
恒常なものが何かあるか？

(一九八)

三四

享楽は大波小波のように揺れ動き、
寿命は刹那に滅する。
青春の快楽は恋人たちに現われるが、
それも束の間……。
人を目覚ます賢者たちよ、
輪廻はすべて空しきものと知り、
世の人々を慈しんで努力せよ。

(一五三)

三五

人間にとって、享楽は雲の群の中で
輝く稲妻のように揺れ動き、
寿命は風に打たれた蓮葉(はちすば)に宿る
露のように儚く、若さの欲望は定めない。
そう考えて、賢者らよ、速やかに
ヨーガに専念せよ。
平静さと三昧とを成就することで
容易に得られるヨーガに……。

(一七八)

三六

寿命は波のように揺れ動き、
青春の美は束の間しか続かない。
富は希望のように儚く、幾多の享楽は
雲の季節の稲光のように定めない。

三五　平静さと…(dhairya-samādhi-siddhi-sulabhe)―ニルナヤ版 -siddha- は誤植か（註は -siddhi- ととる)。

愛しい女が首にすがり、抱いてくれても、
それも長くは続かぬ。
生存の恐怖という海の彼岸に渡るべく
絶対者（ブラフマン）に専念せよ。　（一九）

三七

人は母の胎内で、不浄の中で、
苦しみつつ身を屈して住む。
青春の享楽は、恋人との別離の苦が
いりまじり、つらいものだ。
老境も、美しい眼の女たちの嘲笑の的、
楽しいものではない。
ああ、人間たちよ。輪廻において
ほんの少しでも、何か楽しみがあれば
言ってくれ。　（一九九）

三八

老いは牝虎のように
威丈高に立ちはだかる。
病は敵のように身体を傷つける。
寿命は割れた瓶の水のように流れる。
それなのに、世人が益なきことを
しているとは、不可思議だ。　（三三）

三九

ありとあらゆる享楽は儚いが、
まさにそれらによってこの生存がある。
ああ、世間の人よ、何のために
ここで流転しなければならぬのか。
もう何もするな。もし我らの言葉を
信じられるなら、幾多の希望の罠を

三九　愛欲を絶つべく（kāmocchitti-vaśe）——批判版の読みをとる。ニルナヤ版は kāmotpatti-vaśāt.
○自己の探究に……——直訳「心が自己のよりどころ（sva-dhāman=ātman）において統一さるべきである」。

鎮めて心を清浄にし、愛欲を絶つべく
自己の探究に専心せよ。(一五九)

四〇

そこに住する人は、梵天や帝釈天などの
神群をとるに足らぬと考える。
それを味わうことにより、三界の支配権
などの富貴は味気ないものとなる。
それこそ言い知れぬ唯一最高の享楽で、
常に生じ遍在している。
おお、善き人よ、その他の
刹那に滅する享楽に喜んではならぬ。(一六〇)

四一

〔時間の偉大さの描写〕

あの楽しい都、あの偉大なる王、
その傍に、近隣諸侯の輪、学者の集会、
月のような顔の女たち、誇り高い王子の群、
吟誦詩人たち、種々の会話……。
それらはすべて、時の力により、
もはや思い出となってしまった。
時間(カーラ)に敬礼！(一六九)

四二

大勢の人がいた家には、いつしか
一人しかいなくなり、
一人が住んでいて、ひき続き大勢が
住むようになった家に、しまいには
一人もいなくなる。
このように、〔ゲームに〕巧みな時間(カーラ)は、
昼夜を二つの骰子(さい)のようにころがして、

四〇　絶対者(ブラフマン)と合一する歓喜(brahmânanda)こそ最高の享楽で、それと比べれば、天界に生まれることも全世界を支配することも下らない。このような唯一にして最高の享楽を求めるべきで、空しい感覚的な享楽を求めてはならぬ。○富貴(vibhavās)―ニルナヤ版(vibhavas)は誤植であろう。

四二　「〔ゲームに〕巧みな」及び「世界というゲーム台の上で」はニルナヤ版の読み(kalyo bhuvana-phalake)を採用。批判版は kālyā saha bahu-kalaḥ(非常に巧みな〔時間(カーラ)は〕、カーリーとともに)と読むが、この場合、カーラ(Kāla)はシヴァ神、その女性形カーリー(Kālī)は神妃パールヴァティーを意味する。シヴァが妃とともにダイスを楽しむと解するわけである。

世界というゲーム台の上で、
生類という駒で遊んでいる。
(一七)

四三

寿命は太陽の出没とともに
日毎に尽きてゆく。
多くの仕事の重荷を背負い
あくせく働いて、時「の過ぎ行くの」も
知られることはない。生や老や
災禍や死を見ても、恐怖は生じない。
世人は、迷妄よりなる放逸という
酒を飲んで、酔い痴れている。
(一五一)

四四

夜は前と同じ、昼は前と同じと考えて、
人々は空しく走りまわる。
努力して密かに種々の仕事を企てたり、
お定まりの享楽を求めて働いて……。
このように、この輪廻に苦しめられつつも、
ああ、我々は迷妄を恥じようとしない。
(三六)

四五

輪廻を断ち切るために、正しく
自在神の足を冥想したことはない。
天国の門の扉を破り得る
義務(ダルマ)を行うこともなかった。
また、女の豊かな乳房や腿も、
夢の中ですら抱かなかった。
我々はただ、母の若さの森を
断ち切る斧にすぎなかった。
(一五四)

四六

反論者の群を挫く、識者にふさわしい
学を修めることはなかった。
〔敵将の〕象の額を断つ剣の先で、
名声を天界に響かせることもなかった。
月の出に、恋人の柔らかい唇の
甘露を飲むこともなかった。
ああ、青春は空しく過ぎ去った。
空家にともる灯のように……。　（一九五）

四七

汚れなき学を修めることはなかった。
また、富を得ることもなかった。
ひたすら両親に仕えることもなかった。
揺れ動く切れ長の眼をした恋人を
抱いたことは、夢にもなかった。
我々は、鴉みたいに、他人(ひと)の食を
貪り求めて時を過ごした。　（一七五）

四八

我々を生んだ親たちは、とうの昔に
亡くなった。我々がともに成長した
同胞(はらから)も、もはや追憶のかなたへ去った。
今やこの我々も、日毎に死に近づき、
砂だらけの河岸の樹々同然の有様だ。　（一七〇）

四九

人の寿命はせいぜい百年だが、
その半分は夜に費やされる。
他の半分のそのまた半分は
幼年と老年とに費やされる。
残りは、病や別離の苦をともない、
また宮仕えなどで費やされる。

四九　残りは（śeṣaṃ）―批判版の読みをとる。ニルナヤ版は teṣāṃ（註は śeṣaṃ と読む）。

水波のように移ろう人生において、
人の幸せはどこにあるのか。　（一〇〇）

五〇

人は役者のように、暫し幼児となり、
暫し愛に喜ぶ青年となり、
暫し貧者となり、暫し富者となる。
やがて、老衰した身体をして
皺で身を飾り、人生の終りに、
閻魔（ヤマ）の住処という幕に入る。　（三五）

〔隠者と王の対話の描写〕

五一

あなたは王だが、私もまた
師に仕えて得た智慧で誇り高い。

五一　私（vayam）――場合に応じて、vayam (pl.) を「私」、「我ら」、「我々」と訳す。

あなたは富貴により高名であるが、
詩人たちが私の名声を諸方に広める。
このように、我々両者は、誇りと
富の点ではなはだ異なる。
もしあなたが私を顧慮しないなら、
私もまたひたすら無関心でいる。　（一六三）

五二

あなたは実利（アルタ）の主であるが、
私もまた同じく言葉の主である。
あなたは勇者であるが、
私も論客の誇りを挫く道にかけて
不滅の能力を有する。
あなたには富者が仕えるが、
私にも、叡知の汚れを滅すべく、
聴聞者たちが仕える。

王よ、あなたが私を顧慮しないなら、
私もあなたに全く無関心でいる。　(一六六)

五三

私は樹皮の衣で満足し、
あなたは絹の服で満足する。
満足の点では全く同じで、
どちらが勝ることもない。
ただ、渇愛の大きいものが
貧しいものと言うべきだ。
心が完全に満足したら、
富者も貧者もあるものか。　(一七七)

五四

食べるのは果実で充分、
飲むのはおいしい水で、

寝るのは大地で、
着るのは樹皮で充分。
にわかに得た富の蜜を飲み
すべての感官が動転した
邪悪な人の無礼を
許すことはできない。　(一六一)

五五

我らは施食を食べ、
空衣を着、大地に寝る。
富貴な人に何の用がある。　(二〇)

五六

我らは役者でも粋人(ヴィタ)でも
歌手でもない。品のないことを
言うのに巧みでもない。

五六　粋人 (viṭa)――一・六〇 (解説) を見よ。ここでは「粋人」と訳した。〇どうして王宮に……――批判版の読み nṛ-pati-sadmani nāma をとる。ニルナヤ版

また、乳房の重さに
身を撓める女でもない。我らが
どうして王宮に仕えられようか。(一六五)

五七

かつて、度量の広い主らにより
この世界が生じた。そして
他のものたちがそれを維持し、
また別のものたちがそれを征服し、
それから惜しげもなく施与した。
今も他の英雄たちが、十四の世界を
享受している。なのに、わずかの都市を
支配するだけで、人々はどうして
このように誇りの熱に浮かされるのか。(一六一)

五八

は nṛpam īkṣitum atra と読む。

五七 主らにより (iśair) ―ニルナヤ版註は、ハリシュチャンドラ (Hariścandra) などを指すとし (ハリシュチャンドラについては、ヴィンテルニッツ・中野義照訳『叙事詩とプラーナ』二一〇頁以下、『叙事詩とプラーナ』二六二頁を見よ)、P.G. Nath (p. 296) は梵天 (Brahmā) を指すと解する。
○他のものたち (aparair) ―ニルナヤ版註は、ヤヤーティ (Yayāti) などと解し (ヤヤーティについては『インド神話』一五二頁を見よ)、P.G. Nath はヴィシュヌ神 (Viṣṇu) と解する。
○別のものたち (anyair) ―ニルナヤ版註はバリ (Bali) などと解し (バリについては『インド神話』二二六頁以下を見よ)、P.G. Nath はパラシュラーマ (Paraśrāma) と解する。
○十四の世界 (bhuvanāni…caturdaśa) ―一・四〇 (解説) を見よ。

土地が幾多の王によって領有されぬことは
ほんの一瞬もないのに、
そんな土地を得たとて、
王たちに何の誉れがあろうか。
その一部分のそのまた一部、
その部分のそのまた一部における
支配者たちは、嘆くべきであるのに、
愚かにも逆に喜んでいる。(一六四)

五九

水の列 (海) に囲まれたこのすべての
土塊 (大地) は、ちっぽけなものではないか。
王の群が、幾多の戦いにより、
それをわがものとして領有する。
こんなひどく卑小で貧しい王たちが、
何か他のものを与えるだろうか？

与えているだろうか？　ああ、
そんな彼らに僅かばかりの富を望む
最低の人々。何と惨めなことだ！
（三〇四）

六〇

その白い頭蓋骨が、飾りとして
高らかにシヴァ神の頭上に掲げられた
選ばれた人こそ、生まれたかいがある。
今日では、若干の人が、生命を
守ることに専念し、頭をさげると、
人々（諸王）はこの上なく大きな誇りの
炎を燃やすが、そんなものが何になるか。
（三二八）

〔心の覚醒と制御〕

六一

心よ、どうして日毎に他人（ひと）の心を
種々に喜ばせ、苦汁に満ちた
好意を得ようと努めるのか？
お前が自身の内で満足したなら、
自ずと生じる如意珠の群のような
汚れなき思慮が、お前の望みを
かなえぬことがあろうか。
（一六七）

六二

心よ、お前は何故空しく動きまわるのか？
いずこでなりと休息するがよい。
自ずと実現することは、変えようがない。
私は過去を悔まず、未来をも考慮せず、
思いがけず訪れる諸楽を享受する。
（二六七）

六三

六〇　シヴァ神は人間の頭蓋骨を頭に飾る。シヴァを信仰して、その頭飾りになることこそ望ましい。王などが、卑小な人々に頭を下げられて自慢するのは、下らないことだ。この詩節は難解で、前半と後半の関連がはっきりしないが、ニルナヤ版の註に従って訳した。

六二　どうにもならぬことをくよくよ考えても仕方のないことだ。すべては運命が決定することで、なるようにしかならぬと諦観して、なりゆきにまかせ、その時その時を充実して生きるべきだ。

心よ、この難儀な感官の対象という密林から
離れよ。すべての苦を即座に鎮める
行為に長けた、至福の道に依れ。
真実の自己と一体になれ。
波のように揺れ動く己が道を捨てよ。
定めなき生存の快楽を再び追ってはならぬ。
心よ、今は満足せよ。

（一八〇）

六四

心よ、迷妄を捨てよ。
半月を頭に飾る〔シヴァ神〕に
喜びを見出すべきだ。
天の川（ガンジス）の岸辺に住むことを
切に望め。波、水泡、稲妻、
富貴、焔、蛇、友の群……
そういうものに頼れるか。

（一八一）

六三 行為に長けた(-vyāpāra-dakṣam)—ニルナヤ版(-vyāpāra-pakṣam)は誤植であろう（註は -dakṣam と読む）。○真実の自己と一体になれ(svātmībhāvam upaihi)—或いは、「自己の吟味に専念せよ」。批判版は śāntam bhāvam upaihi（寂静の境地を得よ）という読みを採用。

六五

心よ、この定めなき富貴を
一度でも望まぬよう、注意せよ。
王の眉の顰みという小屋を
うろつく娼婦のような富貴……。
我らは襤褸（ぼろ）をまとい、ベナレスの
街路にある家の門に入り、
手にした鉢に落ちる施食を望む。

（一四五）

六六

前には歌声。両わきには
南部（デカン）の出の、心を酔わす詩人たち。
後には、払子を持つ女たちが
艶やかに揺る腕環の響き……。
もしこのようであるなら、

六五 王の眉の顰み……—疑問の個所。富貴は移り気な女や娼婦に喩えられる。富貴は王の機嫌次第でどうにでもなってしまうという意か？ ○家の門に(bhavana-dvārāṇi)—ニルナヤ版(-dvārāji)は誤植。

六六 心を酔わす(sa-rasa-)—直訳「ラサをともなう」。ラサの表出に長けた。ラサは、文学、芸術を鑑賞する人が経験する美的快感。○払子(cāmara)—犛牛（ヤク）(camara)の尾で作った払子。王者の標識。英語 chowrie. ○無想三昧(nirvikalpa samādhi)—無

生存の喜びを貪欲に味わえ。
もしそうでないなら、心よ、
速やかに無想三昧に入れ。　（一八三）

ーガの実修の最終目標である完全な三昧。*Yogasūtra*, I. 18, 51 を見よ。

六七

人間にとって、あらゆる欲望をかなえる
富貴が得られたところで、それが何だ。
敵の頭に足をのせたとしても、それが何だ。
富によって仲間が得られても、それが何だ。
身体が永劫に存続しても、それが何だ。　（一八六）

六八

シヴァ神に対する信愛（バクティ）、
死と再生の恐怖が心に存すること、
親族に愛着せぬこと、
愛より生ずる動揺のないこと、
交際の害を離れた人気（ひとけ）のない森、
要するに、諸欲を厭離すること……。
これ以上のことが望み得ようか。　（一八七）

六九

それ故、無限で老いることなく
至高にして遍在する
かの絶対者（ブラフマン）について考えよ。
こんなよからぬ思慮が何になるか。
絶対者に専念する人にとって、
この世の王権や享楽などは
惨めな人々の願いに思える。　（一八八）

七〇

心よ、お前は軽々しく動きまわり、
地底界（パーターラ）に入り込み、空を越え行き、

諸方の際までさまよう。お前は、
自己の内なる清浄な絶対者(ブラフマン)のことを
夢にも思わぬが、どうしてか?
そうすれば、至福に到れるのに……。　（一八九）

〔常住なものと無常なものの考察〕

七一

ヴェーダや聖伝書(スムリティ)や古譚(プラーナ)の読誦。
膨大な論書(シャーストラ)。天国という村の
小屋に住む果報をもたらす
儀式に夢中になること……。
そんなことが何になるのか。
生存の苦の重荷を滅する終末の火である、
真実の自己を知る歓喜(よろこび)の境に入ること。
その一事を除き、他の商人行為が何になる。　（一九一）

七一　アートマンを知ること(ātma-jñāna)、すなわち解脱だけが重要であり、一般に功徳あるとされる聖典の読誦などは下らない。儀式を実行して天界に生まれても、大したことはない。
○商人行為 (vaṇig-vṛtti)—善行とひきかえに果報を得るというのは、商人の取引きと同じである。

七二

聖なる黄金山(メール)も世(ユガ)の終末の火に
包まれて滅し、多くの海獣(マカラ)や鮫(グラーハ)の
住む海も干涸びる。
山々に支えられた大地も帰滅する。
いわんや、仔象の耳先のように
揺れ動く、この身体の場合、
何をか言わん!　（二〇六）

七三

身体は曲り、足どりは乱れ、
歯並みは抜け落ち、視力は失せ、
難聴は進み、口は涎を流す。
縁者らはその言葉を敬わず、
妻もいうことを聞かなくなる。

七二　黄金山 (Meru)—一・四〇(解説)を見よ。
○世 (yuga)—ユガは四百三十二万年間続くとされ (大ユガ)、四期に分けられる。(1)クリタ、(2)トレーター、(3)ドヴァーパラ、(4)カリ。このうち、クリタが最良の黄金時代であり、カリは最も劣悪な暗黒時代である。カリ・ユガには、幾多の災禍が生じ、ついには最終的な世界の崩壊がおとずれる。千の大ユガが一カルパ (kalpa 劫(こう)) である。『インド神話』二三九頁を見よ。
○海獣 (makara)—一・四〇及び二・一の解説を見よ。

息子でさえも敵対する。
ああ、老いた人は惨めだ！
〔一四〕

七四

髪が白くなったのを見るやいなや、
乙女たちは、不可触民（チャンダーラ）の井戸のように
男を捨てて、遠く去り行く。
老いて侮蔑の的となり、
骨と皮になった男を……。
〔三三〕

七五

この身体が無病息災で
老いが遠くにある限り、
感官の力が害われず
寿命が続く限り、
賢者は自己の至福を求めて
大いに努力すべきだ。
家が燃えているのに
井戸を掘って何になろう。
〔一九四〕

七六

苦行しながら聖河（ガンジス）の岸に住もうか？
或いは、優雅な婦人に
礼儀正しく仕えようか？
或いは、論書の洪水や
種々の詩の甘露水を飲もうか？
人の寿命はほんの一瞬でしかないのに、
何をしたらよいのか、わからない。
〔七三〕

七七

この王たちは、馬のように
心を騒がせ、宥め難い。

そして我らは、大望を抱き、
こよなく大きな果報を願う。
老いは身体を蝕み、
死は愛しい生命を奪う。
友よ、賢者にとって、この世で
修養に勝るものは他にない。

七八

誇りは萎れ、財は無くなり
人が求めてもかなえられず、
縁者たちは痩せ細り、召使も去り、
若さも次第に失せてしまう時、
賢者らにとって、どこか
ガンジスの水が岩を洗い清める
ヒマーラヤ峡谷の岸辺の
庵に住むことだけがふさわしい。

（一五八）

（三〇三）

七八　岸辺の庵に（-taṭī-kuñje）—ニルナヤ版 -naṭī-kuñje は誤植であろう（註はtaṭī と読む）。

七九

月光は快い。森の草地も快い。
善き人との交際で味わう幸福も快い。
詩の中の物語も快い。怒って流す
涙の滴に輝く恋人の顔も快い。
あらゆるものが快いのだが、
心が無常を感ずる時、
何も快くなくなってしまう。

（一九三）

八〇

楼閣は住むに快いものではないか。
歌なども聴いて楽しいものではないか。
最愛の女と交わる快楽は
こよなき喜びをもたらさぬか。
だが賢者たちは、すべてのものを、

飛び交う蛾の羽の風に揺れ動く
灯火の輝きのように儚いと考え、
森へ行くのだ。　(二一五)

〔シヴァ神の崇拝〕

八一

輪廻の始めよりこの方、我々は
この三界を探し求めたが、ああ、
享楽という牝象に激しく潜(ひそ)かに執著して
酔った心という牡象を制御する網を玩ぶ人を、
全く見たことも聞いたこともなかった。　(一七六)

八二

自在に歩きまわること。
惨めにならずに食を得ること。
高潔な人々と交際すること。
静寂のみをめざす生き方を教える学問。
外界に対する無関心……。
いくら考えこんでみても、それが
いかなる偉大な修養(タパス)の果報であるか、
私にはわからない。　(二〇八)

八三

ああ、心の願いは失せた。身体の若さも
去った。心ある人々がいないので、
諸々の美質も甲斐なきものとなった。
強力な時という堪え難い死神が
唐突に近づく。どうしたらよいか？
あ、わかった。愛神を殺す神(シヴァ)の御足
以外に、いかなる寄る辺もないのだ。　(一四九)

八一　輪廻の…（āsaṃsārāt）―この世の始まって以来。無限の過去から。
○ああ（tāta）―直訳「父よ」。
○激しく潜かに（gāḍha-gūḍha）―疑問の読みであるが、執著が顕である状態と、顕でない状態を指すと解する。批判版は gūḍha-rūḍha と読む。
○網（ānāya）―批判版は ālāna（象をつなぐ杭）と読む。
○見たことも…―直訳「我々の眼の道や耳の道に達しなかった」。

八三　愛神を殺す神（Madanântaka）―シヴァ神は、愛の矢で自身を射ろうとした愛神カーマを、第三の眼より発する火焔で焼き尽くした。『インド神話』二〇一、二〇七頁を見よ。

八四

世界の主である大自在天(シヴァ)と
宇宙我であるヴィシュヌ神との間に、
私は真実には相違を認めぬが、
それでも、三日月を頭に飾る神(シヴァ)に
信愛を捧げる。
(三〇〇)

八五

静まり返った夜々に、輝きわたる月光に
白く照らされた聖河(ガンジス)のどこかの岸辺に
心地よく坐り、
シヴァよ、シヴァよ、シヴァよ、と
高く叫び、内にあふれる〔法悦の〕
涙に満ちた境地……。
幾多の生存にうちひしがれた我々は、
いつ、そんな境地に達せるのか？
(三四七)

八六

新たな慈悲に満ちた心をもって
一切を布施してから、
輪廻における運命の帰趨は
畢竟益なきものと思い、
シヴァの御足を考えることのみを
寄る辺として、我々は清浄なる森で、
秋月の光が冴えわたる夜を過ごそう。
(三五)

八七

ベナレスで聖河(ガンジス)の岸に住み、
褌をつけ虚心合掌して、
おお、ガウリーの夫よ、
三都(トリプラ)の破壊者よ、慈しみ深きものよ、

八四 形而上学的な考察によれば、シヴァとヴィシュヌとは真実には一体である。しかし、情緒的には、自分はシヴァ神に対して信愛（bhakti）を捧げる。ここで詩人はシヴァ信仰を表明している。

八七 ガウリーの夫（Gaurī-nātha）―女神ガウリー（＝パールヴァティー、ドゥルガー）の夫、すなわちシヴァ神のこと。○三都の破壊者（Tripura-hara）―やはりシヴァ神のこと。阿修羅(アスラ)の建築家マヤがターラカの三人の息子のために建てた、

三眼者(シヴァ)よ、恵みを垂れ給え！
そう叫びつつ、日々を一瞬のうちに
過ごすのは、いつのことか？

（一三七）

八八

主よ、いつになったら私は、
ガンジスの水で沐浴し、清浄な花や果実で
あなたを敬い、山窟の石の床に坐り、
禅定に入って冥想することができるのか？
自己(アートマン)において楽しみ、果実を食べ、
師の教えに専念して……。

（三四五）

八九

愛神の敵よ、いつあなたの恩寵により、
王に仕えることより生ずる苦を
逃れることができるのか？

金銀鉄よりなる三つの都が、シヴァに破壊されたという伝説にもとづく。『インド神話』四二—四六頁を見よ。
○慈しみ深きもの（Śambhu）—慈悲深い相をとったシヴァの呼称。「幸福（śam）がそれにより実現する（bhū）からシャンブと呼ばれる」と通俗語源解釈される。

八八 石の床（grāva-paryaṅka）—ニルナヤ版の読み ·grāma-paryaṅka· は誤植であろう（註は ·grāva· と読む）。
○愛神の敵（Smarâri）—シヴァ神のこと。三・八三（解説）を見よ。
○王に（samakaracaraṇe puṃsi）—ニルナヤ版註の解釈（=mahābhāgya-sampanne puruṣe viṣaye, rājñi）に従った。異本（P.G. Nath etc.）は tava caraṇa-rato（あなたの御足に喜ぶ）と読む。

独りで、欲望なく、寂静で、
手を器とし、空を衣とする……。
シヴァよ、私はいつ
業(カルマン)を根こぎにすることができるか？

（一八五）

九〇

手を器とし、本来清浄な施食に満足し、
どこにでも坐り、繰り返し
一切をまるで草のようにみなし、
生きながらにして、欠けるところなき
最高の歓喜を味わうヨーガ行者にとって、
言い知れぬ道が、シヴァの恩寵により
容易に実現する。

（一六八）

〔厭離の行為〕

九一

襌はずたずたに摩り切れ、
綴衣（つづれ）もまた同様の有様である。
思い煩うことなく、求めずして
得た施食を食べ、墓地や森で寝る。
気ままに、束縛されることなく彷徨（さすら）い、
心は常に静まり返っている。
ヨーガの大祭においても平静でいる。
もしこのような状態であるなら、
三界の主権が何になろう。 （一三四）

九二

球体にすぎないこの梵卵（せかい）が、
どうして知者の心を掻き乱すのか。
海は、小魚がはねたとて
決して動揺することはない。 （一八四）

九一 後半は批判版とかなり異なる。〇ヨーガの大祭（yoga-mahotsava）―ヨーガの実修の窮極的境地である三昧（samādhi）を指す。三昧を大祭に喩えるが、そういう大祭においても浮かれることがないと述べる。

九二 梵卵（brahmâṇḍa）は宇宙のこと。一・九二（解説）参照。知者の心を海に喩え、宇宙を小魚（śapharī）に喩えている。

九三

母なる吉祥天女（ラクシュミー）よ、誰か他の男を
愛しなさい。私にかまわないで下さい。
諸々の享楽を望む者はあなたに支配される
だろうが、無欲の者にとっては、
あなたは何ものであろうか。
今や我々は、即座に作った
パラーシャの葉器の中で浄化された
施食のみで生活したいと願っている。 （三〇一）

九四

大地が広大なる褥、蔓草のような腕が
大きな枕、大空が天蓋、この快い風が扇、
秋の月が灯明……。

九三 欲を離れた我々は、一般の人々があれ程あこがれる幸運の女神ラクシュミーをも必要としない、という意。〇パラーシャ（palāśa）―大きい葉を持ち、赤い花をつける樹の名。キンシュカとも呼ばれる。学名 Butea frondosa.

そして、"離欲"という妻に接して喜ぶ。
聖者(ムニ)は快く寂静にひたり、
富貴に満ち足りた王のように横たわる。　（一九〇）

九五

行乞により食べ、人間(じんかん)の執著を離れ、
いつも自由に行動し、捨てることにも
受けることにも全く関心を払わず、
路傍に棄てられたぼろぼろの布で作った
綴衣(つづれ)をまとい、自惚れも自尊心もなく、
静寂の楽しみを味わうことのみを望む。
そういう修行者もいることはいる。　（二八九）

九六

不可触民であるか、再生族であるか、
シュードラであるか、苦行者であるか、
あるいは、誰か真理の探究に専念する
すぐれたヨーガ行者であるか？
このように、人々が疑惑を抱いて
道でうるさく問いかけても、
ヨーガ行者は怒りもせず、また
喜びもせず、ひとり黙然と進む。　（一四三）

九七

創造神により、蛇の食事は風で作られ、
他者を害することなく、苦もなく得られる。
家畜は草や芽を食べ、大地に寝るように
創られた。だが、輪廻の海を越え得る
知力を持つ人間の生活は、その生活を
追求すれば、すべての徳性が
失われるように創られたのだ。　（三五一）

九五　路傍に捨てられた……——批判版の読み（-jīrṇa-vasanaiḥ saṃprāpta-kanthā-sakho）を採用。ニルナヤ版（-jīrṇa-vasanaḥ saṃprāpta-kanthāsano）は疑問。

九六　再生族（dvi-jāti）——四姓（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）のうち、上位三階級（主としてバラモン）を指す。母の胎内より生まれ、入門式において再びヒンドゥー教徒として「生まれる」ので、再生族と呼ばれる。

九七　蛇の食事……——蛇は風を食べて生きているとみなされる。
○（大地に寝るように）創られた（sṛṣṭāḥ）——批判版の読みを採用。ニルナヤ版は tuṣṭāḥ.
○輪廻の海を……——人間は輪廻から脱して解脱できる能力を持っているが、その生活を追求すれば、必然的に悪しき結果となる。他の動物と比べると、人間は罪深くできている。

九八

ガンジスの岸、ヒマーラヤの岩上で
蓮華座を組み、私が梵（ブラフマン）についての静慮を
実修して、ヨーガの眠りについた時、
老いた鹿たちが恐れることもなく
私の体に身をすりよせてくる……。
そんな清浄な日々が私に来るだろうか。

（一三九）

九九

手を清浄なる器とし、遊行で得る
無尽の施食を食べ、広大な十方を衣とし、
大地が広大で不動な褥である人々、
無執著を受け入れ円熟した心で
満ち足り、惨めさという障碍の群を
捨てた幸せな人々は、業（カルマン）を根こぎにする。

（一六九）

九九　十方―四方四維と上下。

一〇〇

母なる大地よ、父なる風よ、友なる火よ、
よき縁者たる水よ、兄弟なる空よ、
あなた方の後で、頭を下げて合掌する。
あなた方と接して得た功徳により
広大に輝き出た清浄なる智によって、
一切の強大なる迷妄を退けた私は
最高ブラフマンに合一する。

（三〇一）

離欲百頌　おわり

一〇〇　ヴェーダーンタ哲学によれば、最高ブラフマン（para-brahman）に合一することが、すなわち解脱である。

第二章　バルトリハリの伝説と作品

一　義浄の伝えたバルトリハリとその年代

バルトリハリ(1)という詩人の生涯は謎に包まれている。彼は最も早い時期にヨーロッパに紹介されたインド詩人で、その作品は最高の箴言詩としてインドの内外で絶賛されてきたにもかかわらず、彼自身については、何ひとつ確実なことは知られていない。

従来、バルトリハリを語る場合、唐代の訳経僧であった義浄（六三五―七一三）の記録『南海寄帰内法伝』に言及することが多かった。ここでも、義浄の伝えるバルトリハリ（伐撥呵利）について検討することから始めたい。まずその原文を引用し、続いて現代語訳を示す。

「次有二伐撥呵利論一。是前朱儞議釋。卽大學士伐撥呵利所レ造。有二二十五千頌一。斯則盛談二人事聲明之要一。廣叙二諸家興廢之由一。深明二唯識一善論二因喩一。此學士乃響振二五天一德流二八極一。徹二信三寶一諦二想二空一。希二勝法一而出家。戀二纏染一而便俗。斯之往復數有レ七焉。自レ非三深信二因果一。誰能若レ此

勤著。自嗟詩曰。由レ染便歸俗。離レ貪還服緇。如何兩種事。弄レ我若二嬰兒一。即是護法師之同時人也。毎於二寺內一有二心歸俗一。被二煩惱逼一確爾不レ移。即令三學生輿向二寺外一。時人問二其故一。答曰。凡是福地。本擬二戒行所居一。我既內有二邪心一。即是虧二乎正教一。十方僧地無レ處二投足一。爲二淸信士一身著二白衣一。方入二寺中一宣二揚正法一。捨化已來經二四十年一矣。

次有二薄迦（抧也反）論一。頌有二七百一。釋有二七千一。亦是伐撥呵利所レ造。叙二聖教量及比量義一。

次有二蓽挐一。頌有二三千一。釋有二十四千一。頌乃伐撥呵利所レ造。釋則護法論師所レ製。可レ謂レ窮二天地之奧祕一。極二人理之精華一矣。若人學至二於此一。方曰三善解二聲明一。與二九經百家一相似[2]。」

〔現代語訳〕

「次に伐撥呵利論がある。これは前述の朱儞（Cūrṇi＝Mahābhāṣya）に対する注釈書である。すなわち大学者バルトリハリが作ったもので、二千五百詩節を含む。これは大いに人間に関することがらや文法学の原理を論じ、広く諸家の興亡の事情を叙述し、深く唯識を明らかにして、よく因喩（論理学）を論じたものである。この学者は、その名声は五天（インド）に鳴り響き、その徳は八極（全世界）に広まった。徹底的に三宝を信じ、またつまびらかに二空について考えた。すぐれた教えを希っては出家し、また享楽にひかれては世俗の生活にもどり、このようにして七度も往復した。深く因果のことわりを信じなければ、誰がこのようにあくせくするだろうか。みずから慨嘆して次のような詩を唱えた。

愛欲にひかれて世俗にもどり、

貪欲を離れてまた僧衣を纏う。

どうしてこの二つのことが

私を小児のように弄ぶのか！

彼は護法先生と同時代の人である。いつも寺院にいながらも世俗生活にもどることを考え、煩悩にせまられてそれがつきまとう時は、すぐに学生に命じて輿を寺の外に向かわせた。その時、人がその理由をたずねると、彼は次のように答えたという。

『およそこの安楽の地は、もともと戒律を守る人の住居にあてられている。私はすでに内に邪心があるから、すなわちこれは正法をそこなうことである。十方の僧院に住む場所がない。清信士（在俗信者）となって、身に白衣（俗人の標）を纏おう』と。

それからまた寺の中に入り、正法を宣揚した。捨化してから四十年が経過した。

次に薄迦論（Vākyapadīya）がある。頌（Kārikā）は七百〔詩節〕、注釈（Vṛtti）は七千ある。これもまた、バルトリハリが作ったものであり、聖教量（āgama）及び、比量（anumāna）の意味を説明する。

次に蓽挐（Paiṇṇa＝Prakīrṇaka）がある。頌は三千〔詩節〕、注釈は一万四千ある。頌はバルトリハリ自身が作ったもので、注釈は護法論師が作ったものである。天地の奥深い秘密を窮め、人理の精華を極めたと言うべきであろう。もし人が学んでこれに通達すれば、はじめてよく文法学を理解

できるという。つまり九経百家とよく似た書である。」

義浄が伝えたバルトリハリは、明らかに有名な文法学者・言語哲学者であったバルトリハリである。義浄はこの前の個所で、最大の文法学者パーニニ（波尼儞）のスートラや、それに対するパタンジャリ（鉢顚社攞）の註解書『マハーバーシャ』（朱儞 Cūrṇi）について述べ、更に、『マハーバーシャ』に対する注釈を著したバルトリハリについて言及するのである。このバルトリハリの注釈書は近年相次いで出版された。(3) ただし、義浄によれば、この注釈書は二千五百詩節よりなるというが、現在の写本は断片でそれよりはるかに少量である。また、その内容に関していえば、声明（文法学）の原理を論ずるというのは適切だが、「人事」や「諸家興廃之由」について述べているという点は疑問である。更に、「深明㆓唯識㆒」という個所では、バルトリハリは仏教の唯識説を説いたことになる。しかし義浄はおそらくこの難解な『マハーバーシャ註』を読んだことはなく、人づてにその内容を聞いたものであろう。そして、中国の仏教僧である彼は、この書の思想的内容を「唯識」としか表現出来なかったのであろう。それにしても、「徹㆓信三宝㆒」と言っているから、やはりバルトリハリを仏教徒であると考えたようである。文法家のバルトリハリにせよ、箴言詩を作ったバルトリハリにせよ、彼を仏教徒とみなすことは不可能である。また、この義浄の伝聞を根拠として、バルトリハリは晩年に仏教に改宗したと想像するのも馬鹿気たことであろう。義浄に、バルトリハリについて尊敬をこめて語った仏教僧は、この高名な文法学者が外教を信ずる者であるという点を曖昧にしたに相違なく、また、仏教以外を学ぶ目的を持たぬ求法僧義浄は、バルトリハリを仏教徒と信じて疑わなかったであろう。(4)

次に、義浄はバルトリハリの「薄迦（抧也反）論」(5) をあげている。これは、疑いもなく、『ヴァーキヤ・パディーヤ』(6) の第一章と第二章を指す。義浄によれば、本書は七百頌を含むというが、現存の『ヴァーキヤ・パディーヤ』の第一章と第二章は、数え方にもよるが、ほぼ六百三十四頌よりなるから、大体一致すると言えよう。また、義浄はそれに対するバルトリハリ自身の注釈について言及している。これは現存の『ヴリッティ』(7)（Vṛtti）に相当する。

次に、義浄は「革拏」という書をあげる。これはプラキールナカ（Prakīrṇaka）という語の俗語形のパインナ（Paiṇṇa）の音写であることが、今では定説となっている。『ヴァーキヤ・パディーヤ』の第三章は『プラキールナカ』と呼ばれて独立した書とみなされる。そこで、「革拏」は、この第三章を指すとされる。現存の第三章は約千三百二十詩節よりなり、義浄の言うように三千頌はないが、やはり原形のものはそれより多くの詩節を含んでいたと考えられる。(8) なお、義浄はこの書に対する護法（Dharmapāla）の注釈について言及しているが、それは今日まったく伝わっていない。最初に引用した文の直後に、「これらの文法書は、僧侶も俗人も悉く皆、共通に学ぶ。もし学ばなければ多聞（博識）の称を得ない」とあるように、当時のインドの仏教僧は文法学をも学んだのである。だから、護法がバルトリハリの著作に対するノートのようなものを書いたということも、まったく有り得ないことではない。(9)

以上見たように、義浄は文法学者のバルトリハリについて述べているのである。箴言詩集の作者が文法学者と同一人物であるか否かについては後で検討するが、いずれにせよ、義浄はバルトリハリの詩集については言及していない。しかし、詩人バルトリハリの面影を彷彿とさせるような記述はある。バルトリハリは在家と出家の生活を七度も往復したという。感受性が極めて豊かな人であったからこそ、このようにいずれの生活にも徹底できなかったものであろう。自嘲して詠じた詩は、そのままでは『三百頌』に収められてはいないが、非常にバルトリハリ的な雰囲気を有する詩である。[10] 彼は自己に誠実な男であったから、少しでも煩悩が生じたら、決然と僧院の外に出てしまった。決して優柔不断な性格ではなく、確固たる意志の持主であったようである。

問題は、「捨化已来経四十年矣」という個所である。従来、バルトリハリの年代を論ずる場合には、必ずこの個所が問題にされた。すべての学者は高楠博士の英訳に従い、「捨化」を死ぬことと解して、バルトリハリが死んでから四十年たったとする。[11] 義浄がこの文を書いたのは六九一年であるから、バルトリハリの没年は六五一年ということになる。しかし中村元博士は、仏教論理学者ディグナーガ（陳那）などとの関係から、文法学者バルトリハリの年代を四五〇—五〇〇年ごろとする。[12] 義浄の説にもとづく年代と百五十年ほどの開きがあることになる。だが、義浄はあくまで伝聞によって死後四十年と述べたのであって、たとい義浄自身が信頼に値するとしても、彼が間接的に聞いた没年をそのまま受け入れるべきではなかろう。それに、もし「捨化」という語が死ぬという意味でないとしたら、どうなるであろうか？「捨化」を死ぬという意味に解する他の例を、今のところ知らない。また、数行前の個所で、バルトリハリが護法と同時代と述べながら、ここでまたその没年を記すのは奇妙なことである。護法は五三〇—五六一年ごろの人と推定されているから、バルトリハリの同時代人で『プラキールナカ』に対する注釈を書いたと述べても、それ程矛盾しない。だから、「捨化」を別の意味にとることができれば、この問題は解消するわけだが、今までのところ、より説得力のある解釈がない以上、従来通り解するより仕方がない。しかし、別の解釈があり得るかもしれないということだけは、ここで指摘しておきたい。

この問題に関連して、更に多くの論争を喚起した、箴言詩集の作者バルトリハリと文法学者のバルトリハリが同一人物であるかどうか、という問題に触れることにする。インドの伝承では、この両者はあくまで同一人物であった。

大詩人であれ、大学者であれ、
大詩人も大学者も、同一の
バルトリハリであると説かれる。[13]

この同一説に対しては、マックス・ミューラーのようなヨーロッパの学者も、義浄の記録をよりどころとして、賛同を表明した。[14]

しかし、文法学者バルトリハリの年代が五世紀後半であることが学界の定説になって以来、この詩人・文法家同一説は大きく後退した。辻直四郎博士は諸説を総合して、次のように判定している。

「しかし義浄がバルトリハリの没年を示すのに具体的数字を用いているのは、何らかの根拠があ

ったにちがいない。今これを詩人バルトリハリに関するものと解すれば、義浄は五世紀後半の文法家と七世紀中葉に没した同名の詩人と誤聞したこととなる。義浄がシャタカの名を挙げなかったのは、当時寸鉄詩の名手として盛名を馳せたバルトリハリの詩が、まだシャタカの名のもとに蒐集・編纂されていなかったからに過ぎない。またおそらくこの詩人には早くから、俗世と聖域との間を彷徨したという実録ないし風説が拡まり、義浄はこれを聞き知って、文法家に転嫁したものと思われる。もちろん同一人が文法家と詩人とを兼ねることは可能であるが、その場合は義浄の挙げた没年を全く誤伝として捨てさらねばならない。むしろバルトリハリ二人説を採用する方が妥当である。(15)」

この説は現在、最も穏当なものと思われる。しかし、ここではあえて反対の立場に立ち、バルトリハリ二人説をとらぬことにする。ただし、文法家バルトリハリ自身が直接に「シャタカ」の作者だとするものでもない。

前述のように、没後四十年という説にこだわりすぎることは危険である。むしろ護法と同時代という記述の方を重視するべきであろう。また、わずか四十年前の、「盛名を馳せた」詩人を、更に高名な大文法学者と誤聞するようなことがあり得るであろうか。二人説はそれ程根拠のあるものとは思われない。バルトリハリの詩が、六九一年にはまだシャタカ（百頌）の名のもとに蒐集・編纂されていなかったことは確かであったろう。だが、現存の「シャタカ」の多くの詩節がバルトリハリ自身の作であると考えること自体に問題があるのではないか。

次のように推理することも可能であろう。義浄が記録を書いた頃、すなわち七世紀の後半には、大文法学者バルトリハリに関する伝説がすでに一般化していた。彼は世俗の生活と厭離の生活を往来して、自嘲的な詩を作った、というイメージが定着したのである。そして、このような傾向の詩作品は、「バルトリハリ風」であるということになり、当時流行していた世俗と厭離に関する口承の格言詩の多くに、作者としてバルトリハリの名を冠したものであろう。聖者や偉人の名を借りて、ある文献の著者とすることは、(16)古代インドの常套的な手法であり、他に例をあげればきりがない。こうして、ソーマデーヴァの言から知られるように、バルトリハリは十世紀中葉にはすでに大詩人（mahā-kavi）と呼ばれるようになり、詞華集（アンソロジー）にもバルトリハリに帰せられる詩が収められるようになった。それらの詩を含めて、類似した傾向の作品を集めて「シャタカ」（百頌）の名のもとに編纂したわけだが、少なくともこの段階では、いまだ彼が「シャタカ」の作者であると証言する資料はない。しかし、遅くとも十四世紀初頭までには、彼が「シャタカ」の作者であるとする説が確立されていた。(17)

もとより、辻博士の仮説を否定するものではない。しかし、今述べたような仮説も、相当の蓋然性をもって成立し得るということである。これによれば、文法家バルトリハリは、「シャタカ」あるいはその原形の直接の作者ではないが、後代に、他ならぬ彼の名を冠して「シャタカ」が編纂されたのだということになる。ただし、バルトリハリ自身の若干の詩が「シャタカ」に含まれているという可能性を、すべて否定するものではない。

現存の資料の証言による限り、「シャタカ」の名のつく詩集が編纂されたのは、十世紀中葉から十四世紀初頭までの間であることになる。ところで、十三世紀以前の詩人とみなされるシルハナは、『離欲百頌』(Vairāgya-śataka) に倣って、『寂静百頌』(Śānti-śataka) を作ったという。そうすると、バルトリハリに帰せられる「シャタカ」が編纂されたのは、十世紀中葉から十二世紀末ごろまでの間であるということになろう。[18]

二　バルトリハリの諸伝説

バルトリハリに関する後代の諸々の伝説はすべて信ずるに足らず、史料としての価値は皆無とされる。しかし、それぞれの時代のインドの文学者が、バルトリハリについていかなるイメージを抱いていたかを知るためには、それらの伝説を詳しく検討する必要がある。

まず、ジャイナ教徒メールトゥンガの著わした文人に関する逸話伝説集『プラバンダ・チンターマニ』(一三〇六年) のバルトリハリ伝説から紹介することにする。[19]

昔、アヴァンティー地方の都に一人のバラモンがいた。彼はパーニニ文法の教師をしていたが、弟子たちに意地悪な質問をされて悩み、シプラー河畔にある、何でも望みをかなえるというガネーシャ (聖天) 像を拝んでいた (ガネーシャは文法学の守護神ともされる)。

ある日、降雨のため川が氾濫した時、彼は川に飛び込み、ガネーシャ像のある岸にたどりついて、面と向ってガネーシャを拝んだ。神は彼の大胆さに満足し、何でも望みをかなえてやると言った。彼がパーニニ文法を授けて下さいと頼むと、神は承知して彼にパーニニ文法を教えた。六ヶ月後に文法学を修得し、彼はガネーシャに別れを告げて都に入り、ある家の前の場所に坐っていて、やがて眠り込んでしまった。翌朝、ある遊女が女中たちからこのことを聞き、彼を運んで来させて揺り椅子の中に寝かせた。彼は三日三晩眠り続けてから、半ば目覚めて豪華な部屋を見まわし、天国に生まれたのかと思うが、遊女は彼に一部始終を聞かせ、入浴させたり酒を飲ませたり食事を出したりして接待した。やがて彼は王の集会所につれて行かれ、パーニニ文法を正しく説いて、王や学者たちからこぞって敬意を表された。そしてそこで得たすべての財物を遊女に与えたのである。

さて、この男はやがて四カーストの各々に属する四人の妻たちを娶った。クシャトリヤ (士族) 出身の妻が生んだ息子がヴィクラマ・アルカ (Śrī-Vikramārka) であり、シュードラ (隷民) 出身の妻が生んだのがバルトリハリであった。バルトリハリは生れの卑しさ故に、地下室で密かに教育を受けた。他の三人は直接に指導されたが、バルトリハリは紐による通信 (raju-saṅketa) によって指導されたのである。

ある日、師は次のような詩を唱えた。

「布施、享楽、遺失、これが財産の三つの帰趨だ。[20]」

直接に指導されている三人の弟子は後半の行をたずねたが、バルトリハリは紐による通信を送らなかった。師が怒って、どうして通信を送らないのかと難ずると、バルトリハリは地下室から出て

皆の前に姿を現わして、［この格言詩の趣意を］批判して次のように述べた。
『幾多の努力により得られた財産は生命より尊く、その財産の唯一の帰趨は布施である。他のものは災なるかな[21]』と詠まれているから、財産の帰趨は唯一つであると私は考える」と。
このバルトリハリは、『離欲百頌』(Vairāgya-śataka) など、多くの作品を著わした。
(『プラバンダ・チンターマニ』中の、バルトリハリ誕生の逸話おわり)

次に、『獅子座三十二話』(Siṃhāsana-dvātriṃśikā) または『ヴィクラマ・チャリタ』に収められたバルトリハリ王伝説を紹介する。[22] この説話集には種々の伝本があるが、いずれにせよ、十五世紀以後の書である。[23] ここでは、諸伝本のうち、南伝本にもとづいてこの伝説を紹介することにする。他の伝本の内容も大同小異である。

ウッジャイニー[24]という都市に、バルトリハリというすぐれた王がいた。彼の弟はヴィクラマという勇者であった。このバルトリハリはアナンガセーナーという美しい妻を持っていた。

この都に、博識で呪術に通じてはいたが、貧困な一人のバラモンがいた。彼は呪法でパールヴァティー女神を満足させ、女神が何でも望みをかなえてやると言うので、不老不死にしてくれと頼んだ。そこで、女神は彼に一つの神的な果実を与えて、これを食べれば不老不死になると言った。

バラモンは果実をもって家に帰ったが、貧困であるのに不死となっても何になろうと考え、バル

トリハリ王のところに行って、王に果実を献上した。王はそれを受けとり、バラモンに多くの封地を与えてひきとらせたが、こう考えた。「この果実を食べれば不死になれるというが、最愛のアナンガセーナーに先立たれたら耐えられない。これを命よりも大切な妃に与えよう。」そこで彼は王妃に果実を与えた。

ところが、この王妃は馬丁の愛人を持っていて、彼にその果実を与えた。この馬丁にも召使女の愛人がいて、彼は果実を彼女に与えた。この召使女はある牛飼いを愛していて、果実を彼に与えた。この牛飼いは牛糞運びの女を愛していて、果実を彼女に与えた。

さて、この牛糞運びの女は、村の外で牛糞を運んでいた。彼女が牛糞を入れる容器を頭にのせ、その上に果実を投げ入れて大通りを通って帰って来た時、狩に行っていた王がその果実を見つけた。王はそれをとり、家にもどってあのバラモンを呼んで、他にあのような果実があるかどうかたずねた。バラモンが否定して、王妃に果実を食べたか否かを聞くことをすすめたので、王は王妃を呼んで問いつめ、真相を知った。王は深く嘆き悲しんで、女の不実を難ずるいくつかの詩句を詠み、最後にこう結論した。

「離欲よりもすぐれた幸福はない。
悟りの他に喜びはない。
ヴィシュヌ神の他に守護者はいない。
輪廻よりも大きな敵はいない。[25]」

この詩を唱えてから、バルトリハリは最高の離欲に達して、弟のヴィクラマ・アルカを王位につけ、みずからは森へ行った。

（『獅子座三十二話』のバルトリハリ伝説おわり）

バルトリハリ王の伝説は戯曲化された。すなわち、ハリハラ作『バルトリハリの厭離（ニルヴェーダ）』（Bhartṛhari-nirveda）である。[26] この作品には、十五世紀初頭のシヴァ派の聖者ゴーラクシャナータ（Gorakṣanātha, Gorakhnāth）が登場するから、十五世紀初頭以後に書かれたものである。以下にその梗概を述べる。

（第一幕）バルトリハリ王が不在がちなので、王妃バーヌマティーは沈みこんでいる。王は色々宥めるが、王妃の機嫌は直らない。バルトリハリは王妃の愛情を確かめるために、ある計画を思いついて狩に出かける。

（第二幕）侍女が泣きながら登場し、王が虎に殺されたという偽りの報告を聞いた王妃が悲嘆のあまり死んだことを仲間に告げる。狩から帰った王は、その悲報を聞いて、何度も気を失って倒れる。彼は、王妃の愛情を試すために、偽りの知らせを送ったのである。王妃は自分のために死んだのだと、彼はひどく嘆く。宰相のデーヴァティラカが色々と慰めるが、王は錯乱状態になり、彼女とともに火中に入ると言って、狂ったように死者を焼く薪に向って突進する。

（第三幕）侍従が登場し、あるヨーガ行者が王の悲しみを除くと約束したことを宰相に告げ、宰相はその行者を迎えに行く。狂った王が登場し、「王妃よ、最愛の女よ……」と嘆く。すると、外から、「私の鉢よ、お前はどこに行った？　おお、神よ、残酷にも私の鉢を奪って壊してしまった」と言ってひどく泣く声が聞こえる。それは、大事にしていた行乞用の鉢が壊れたことを嘆くヨーガ行者の声であった。王は聞き分けのない行者を慰さめ諭しているうちに、次第に人生の真実相に目覚めて行く。そして、行者が、鉢を思って死に次の生で再びそれと一緒になると言うので、「そのような大なる迷妄が輪廻の原因である」と述べる。すると行者は大声で笑って、

「愚者が他者を諭しているうちに、このように賢明に語る。闇をよりどころとする灯明が他を照らすように……。」

と唱える。王は、私自身の言葉によって私を教え悲しみを除いてくれたと言って感謝し、そのヨーガ行者が実は聖者ゴーラクシャナータであることを知り、「尊者よ、よくぞ私を闇の井戸から救って下さった」と聖者の足下にひれ伏す。王は、享楽は迷妄にすぎず、喜びは悲哀しかもたらさぬという理を悟り、現世的な欲望を捨てたが、解脱はまだ得られなかったので、どのように真理を考えればよいのか聖者に教えを請う。そして、「諸々の感官の対象から退いて心を空（くう）に集中せよ」という聖者の言葉に従い、人気（ひとけ）のない森に行き冥想することを決意する。

（第四幕）宰相が登場し、王が火葬場から森へ行ったことを喜ぶ。王は冥想を終えて叡知の楽を味わい、ゴーラクシャナータは彼にハタ・ヨーガを教授することを約す。宰相は王に火葬の準備を命

ずるよう頼むが、王は、「時は過ぎた」と言って、王位を捨てる決意を述べる。宰相は懸命に王を転向させようと説得したが、王の決意が堅いことを知って絶望し、ゴーラクシャナータの助力を仰ぐ。聖者はヨーガの力により王妃を蘇らせて、王と二人きりにさせようと言う。

（第五幕）王と蘇った王妃登場。王妃は甘えたり、怒るふりをしたり、微笑んだり、悲しんだりして王を誘惑しようとするが、成功しない。王が立去ろうとするので、王妃は上衣の縁をつかむと、王は上衣を捨てて去る。王妃は走り寄って王の手をつかむ。王が手を振りほどくと、王妃は泣きながら彼の足下にひれ伏す。王が官能の乗り越え難いことを嘆いているところに、宰相が登場。王妃は侍女に向かって、幼い王子をつれて来るよう命ずる。彼女は王の前で子供を抱いて、涙を流し、「この子は誰が守るのですか」と言って泣く。王が父性愛に負けそうになったので、宰相はすかさず説得しようとしたが、やはり王の決心を変えることはできない。そこにゴーラクシャナータが登場して王の不退転の心を賞賛し、王子を王位につけることを勧め、自分も王子を守護してやると申し出る。そこで、宰相は溜息をつきながらも、その申し出を受け入れる。悲嘆にくれる王妃に、聖者は、「夫が不死となった暁には、再び彼と一緒になれ」と告げる。

（以上、ハリハラ作『バルトリハリの厭離』の梗概おわり）

『バルトリハリの厭離』を英訳したL・H・グレイは、付録として、十七世紀のオランダの宣教師アブラハム・ローゲル（ロゲリウス）がインドで伝え聞いたバルトリハリの伝説を全訳している。(27)

ローゲルはパドマナーバというバラモンの助力により、『離欲百頌』と『処世百頌』とをオランダ語に訳し、それを一六五一年にライデンで出版した『隠れた異教に開かれた門』(De open Deure tot het verborgen Heydendom) に収めた。(28) これは一六六三年に独訳され、一六七〇年に仏訳された。またヘルダー (J.G. Herder, 1744-1803) は、この書によりバルトリハリの箴言詩を知り、若干の詩を独訳して紹介した。(29) つまり、バルトリハリは、最も早い時期にヨーロッパに紹介されたインド詩人であった。ローゲルの伝えたバルトリハリ伝説は、十七世紀の前半にインドの文人が抱いていたバルトリハリ観を知る上での貴重な資料である。以下、グレイの英訳にもとづき、その内容を概観する。

このバルトリハリ (Barthrouherri＝Bhartṛhari) は Sandragoupeti Narája (＝Candragupta Nārāyaṇa?) の息子である。Sandragoupeti はバラモンで、四つのカースト出身の四人の妻を娶った。バラモンの女が生んだ子がヴァラルチ (Wararóutje＝Vararuci)、クシャトリヤの女が生んだ子がヴィクラマ・アルカ (Wickerama-arca＝Vikramārka)、ヴァイシャの女が生んだ子がバッティ (Betti＝Bhaṭṭi)、シュードラの女が生んだ子がバルトリハリであった。第一の息子は賢者で、ヴェーダ聖典の一部を解説し、天体の運行について書き記した。第二の息子は強力な王で、第三の息子は彼の顧問であった。第四、すなわちバルトリハリも賢者で、三百の箴言を著わしたという。天国へ至る道についての百（＝『離欲百頌』）、人との道理をわきまえた交際についての百（＝『処世百頌』）、恋愛についての

百（＝『恋愛百頌』）である。彼はこれらを人類の啓発のために作ったという。彼は諸本が尨大になったので、それらから精髄を抽出して、短い箴言として提示したと言われる。

このバルトリハリは、最初、非常に女たちとの享楽を好み、三百人の妻と結婚したという。父は死期の近づいた時、四人の息子を呼び寄せ、三人の息子のことをこの上なく誉めたが、シュードラの息子であるバルトリハリを悲し気に見た。インドでは、バラモンの妻から生まれた息子は親たちを天国へ赴かせ、地獄から救うと考えられていた。反対に、シュードラの妻から息子を得て、その子孫が栄えたら、天国へ行けないとされた。そこで、バラモンがシュードラの妻を娶ることは許されていたが、シュードラから子孫を得ることは大きな恥であり罪であると考えられていた。

バルトリハリは父の悲しみを見ると、別室に行き、髪を刈らせ、赤色の衣をまとい、苦行者（sanjāsi＝sannyāsin）の身なりでもどって来た。父はそれを見て非常に満足し、彼は世界が存続する限り生き続けるであろうと予言した。

父の死後、彼は世界を見るべく出発した。三百人の妻たちは彼につき従おうとしたが、彼にとどめられて、「我々はどうなるのです?」とたずねた。すると彼は次のように言った。

お前たちはそれぞれ夫を見つけて再婚しなさい。そうしてもお前たちには罪はない。三百のカーストが出来るであろう。そのカーストでは、夫を失った時にいつでも再婚しても、何ら恥でも罪でもない。それは Cauwres（＝Kafirs "infidels"）と呼ばれる。[30] それはシュードラ内の一大カーストで、おそらく数の点ではシュードラの間で最大である。

（A・ローゲルの伝えるバルトリハリ伝説おわり）

最後に、『プラーナ辞典』でヴェッタム・マニが紹介する、「ウッタラ・バーラタ」（北インド）におけるバルトリハリ伝説[31]を検討する。この伝説はかなり後代のものであるようだが、従来の伝説を集大成してバルトリハリの生涯を述べている点で興味深い。ここでは、バルトリハリはパータリプトラ市の偉大なバラモン学者ヴィディヤーサーガラ（Vidyāsāgara）の息子である。

若い時、ヴィディヤーサーガラは師からヴェータ聖典を学んだが、それに満足せず、あらゆる論書について学ばんと志し、自分の望むすべてを教えてくれるような師を捜して旅に出た。道中、幾人かの大学者に会ったが、一人として師と仰ぐに値しなかった。

ある日、彼は長旅に疲れ、とある峡谷のバニヤン樹の下に坐って休息しているうちに眠ってしまった。そのバニヤン樹に住む一人の婆羅門鬼[32]が彼を見つけて起こした。そして、話し合っているうちに、ヴィディヤーサーガラは婆羅門鬼に自分の目的を告げた。婆羅門鬼はすべての論書を彼に教えてやると約束するが、条件として、彼は六ケ月間そこにとどまり、その期間は誓戒を守らなければならなかった。婆羅門鬼は、飢えと渇きと眠気に悩まされぬような呪文を彼に授けてやった。

こうして彼はバニヤン樹の上で六ケ月間教育を受けた。教育が完了した時、婆羅門鬼は彼に別れを告げて消え去った。彼は木から降り、師の葬式を行ってから、師の教えを書きとめたバニヤンの

葉の束を抱えて帰国しようとした。森を出た時、呪文の力が消失して、彼はひどい飢えと渇きを感じた。

彼は日暮れにカリンガ国に着き、マンダーキニーという踊子の家の戸口に立った。扉には錠がかけられ、所有者は近くのシヴァ神殿に行って留守であった。旅に疲れ果て、彼はその戸口で横になり、バニヤンの葉の束を枕にして眠りこんでしまった。踊子は夜になって寺から帰り、戸口で疲れきって眠っているバラモンを見て、すぐに召使に命じて彼を家の中に入れ、医者を呼びにやった。医者の適切な手当と彼女の手あつい看護により、彼はすっかり元気になり、出発しようとしたが、女は行く手を遮り、自分と結婚してくれと頼んだ。彼が承知しないと、彼女は彼を王のところにつれて行き、一部始終を話した。

王はヴィディヤーサーガラが博識であることを知り、自分の娘（すなわちクシャトリヤ）と、大臣の娘（バラモン）と、家長の娘（ヴァイシャ）と、踊子のマンダーキニー（シュードラ）と結婚せよと命じた。当時、バラモンは上位の三カーストと結婚した後、初めてシュードラと結婚できるという規定があった。四人の妻が息子を生んだ。バラモン女の生んだ子はヴァラルチ、クシャトリヤ女の生んだ子はヴィクラマ・アーディティヤ、ヴァイシャ女の生んだ子はバッティ、シュードラ女の生んだ子はバルトリハリであった。

カリンガ国の王が老いた時、ヴィディヤーサーガラに王国を譲った。そして、ヴィディヤーサーガラの死後、他の息子たちはバルトリハリを王にした。ところが、彼は臨終の父に、一人も息子を作らないと約束した。（バラモンがシュードラ女に生ませた子に息子が生まれたら、そのバラモンは地獄へ行くとされた。）そこで、バルトリハリは三人の妻と結婚したが、子供を作らないように注意した。

バルトリハリは王妃と幸福に暮していたが、ある日、神々しい姿のヨーガ行者から、不老長寿をもたらすマンゴーの実をもらった。ところが、バルトリハリは王妃に長く生きてもらいたいと考え、その実を妃に与えた。しかし、妃は愛人である馬丁に、馬丁は自分の妻にそのマンゴーを与えた。馬丁の妻は王宮の侍女であったが、一日の仕事が終わり、王宮から退出する時に馬丁からマンゴーをもらい、手に持って家に帰ろうとした。外出から帰ったバルトリハリは、彼女がマンゴーを持っているのを見て、どうして手に入れたかたずねた。そして王宮に帰って馬丁に問い質した。馬丁は最初は王妃を庇ったが、しまいには真実を白状させられた。その真実はバルトリハリを深く傷つけた。彼は女性を信じられなくなったが、その時はそれ以上追求しないことにして、馬丁を退出させ、寝室にもどって考え込んでいた。

ところが、馬丁はすぐ王妃に一部始終を報告した。王妃は事件が公になる前に夫を殺害しようと決意し、毒入りのパン（aṭṭaṭa）を作り、夫の寝室に行って親切ごかしに話しかけた。

「昼食ができるまでにまだ間があります。胃を空っぽにして寝ていてはいけません。さあ、これをお食べなさい。」

と言って、彼女はパンをバルトリハリの手に置き、部屋を出て行った。彼は、自分を暗殺するつもりだろうと疑い、こう考えた。

このパンは自分を殺すために、毒を盛られただろう。そうだ、彼女と住むことはやめた方がよい。一切を放擲して遍歴しよう。

彼はそう考えて、パンを持って部屋を出、そのパンをとある場所に隠し、「このパンは家を焼くであろう」と述べた。それから、托鉢のための土器を持ち、誰にも見られずに王宮を出た。彼が家を出るやいなや、王宮は燃え、その中のものはすべて灰燼に帰した。

バルトリハリはすべてを捨て、苦行者の衣を着て、托鉢で生活しながら遍歴した。少し後に、彼は行乞もやめ、他人が進んで彼に与えるものだけを食べた。そのうち、彼は南インドにある大寺院(33)にたどりついた。その寺院の東門のところに、高名な行者であったパッタナット・ピッラヤール(Paṭṭanatt Pillayār) が坐っていた。そこで、バルトリハリは西門に鉢を持って坐り、鉢の中に落ちた食物は何でも食した。時には一日中食事なしですませたが、決して病にかかったり衰弱したりすることはなかった。

ある日、一人の乞食がピッラヤールに施しを求めたところ、彼は答えた。

「私はあなたと同じ乞食であって、何もあげるものがない。しかし、西門に坐っている男は金持ちだから、何かくれるだろう。」

そこで乞食はバルトリハリのところへ行って施しを求めた。バルトリハリが、どうすることもできぬと答えると、乞食は「しかし、反対側の入口に坐っている男が、あなたを金持ちだと言った」と反論した。バルトリハリは笑った。彼はその時、ピッラヤールが何故そう言ったのか理解したか

らであった。一切を捨てた男は、行乞のための鉢をも持つ必要はない。鉢は贅沢であり、富のしるしである。そこでバルトリハリは鉢を投げ捨てて、死ぬまでこの寺院の入口にとどまった。そこに坐している間に、例の有名な詩を作ったのであった。

(「北インド」のバルトリハリ伝説おわり)

最後に、諸伝説の内容の特徴を整理してみる。

(1) 『プラバンダ・チンターマニ』(一三〇六年)

アヴァンティー地方のバラモンが、六ケ月間、ガネーシャ神から文法学を学んで修得する。疲れきって眠っているところを遊女に助けられ、接待される。王の前で文法学の知識を披露する。四カースト出身の四人の妻を娶る。クシャトリヤ女の子がヴィクラマ・アルカで、シュードラ女の子がバルトリハリ。バルトリハリは生れの卑しさ故に地下室で教育を受ける。彼は『離欲百頌』など多くの作品を著わす。

(2) 『獅子座三十二話』(十三世紀以後)

バルトリハリはウッジャイニー(アヴァンテーの首都)の王。弟はヴィクラマ。バルトリハリ王は一人のバラモンから不老不死をもたらす果実をもらい、それを王妃に与える。それは、王妃→馬丁→召使女→牛飼い→牛糞運びの女という経路で、再び王の手にもどる。(ここに、「手から手へ移った不老不死の果実」というモチーフが用いられている。) バルトリハリは世をはかなんで、弟のヴィクラマ

に王位を譲って森に隠遁する。

(3) 戯曲『バルトリハリの厭離(ニルヴェーダ)』(十五世紀初頭以後)

バルトリハリ王は王妃の愛情を試すため、虎に殺されたという偽りの報告をさせる。王妃は悲嘆して死ぬ。王は悲しみのあまり狂ったようになるが、聖者ゴーラクシャナータに諭され、修行者となる。聖者の術によって蘇った王妃や、宰相がひきとめようとしても、彼の決意は変らない。王位は息子が継ぐ。

(4) アブラハム・ローゲルの記録(十七世紀前半)

バルトリハリはあるバラモンの子。父は、四カースト出身の四人の妻を娶る。バラモン女の子がヴァラルチ、クシャトリヤ女の子がヴィクラマ・アルカ、ヴァイシャ女の子がバッティ、シュードラ女の子がバルトリハリ。バルトリハリは三百の箴言――『離欲百頌』、『処世百頌』、『恋愛百頌』――を作る。彼は若いころ女を好み、三百人の妻を娶るが、臨終の父がシュードラ系の子孫の栄えることを悲しんでいることを知り、修行者となる。

(5) ヴェッタム・マニの伝える「北インド」の伝承

バラモンのヴィディヤーサーガラは、ある婆羅門鬼から、六ケ月間、諸学を学ぶ。彼はカリンガ国のある踊子の家の前で疲れて眠り、彼女の看護を受ける。彼女は彼に結婚を迫り、王のもとへつれて行く。王は彼の博識を知り、自分の娘(クシャトリヤ)と、大臣の娘(バラモン)と、家長の娘(ヴァイシャ)と、踊子(シュードラ)と結婚せよと命じる。バラモン女の子がヴァラルチ、クシャトリヤ女の子がヴィクラマ・アーディティヤ、ヴァイシャ女の子はバッティ、シュードラ女の子がバルトリハリである。やがて、ヴィディヤーサーガラはカリンガ国王となるが、その死後、他の息子たちはバルトリハリを国王にする。バルトリハリは三人の妻を娶るが、シュードラ系の子孫を残すことを恐れ、子供を作らない。彼はある日、ヨーガ行者から不老長寿のマンゴーの実をもらい、それを王妃に与える。それは、王妃→馬丁→侍女という経路をたどる。バルトリハリは深く傷つく。王妃は真相を知った彼を毒殺しようと企てるが、彼は事前にそれを知り、王宮を出て遍歴行者となる。彼は南インドの大寺院に達し、その西門に坐って一生を終える。そこで有名な詩を作る。

(1)において、バラモンである父が四カーストの妻を娶り、偉大な帝王となるヴィクラマがクシャトリヤの子で、バルトリハリがシュードラの子であるという伝説がすでに成立していた。それは(4)(5)に引き継がれる。ただし、(1)では、バラモン女の息子とヴァイシャ女の息子の名は記されていない。バルトリハリに賤しい血が交っているという伝説は(1)の段階で成立していたが、(1)には、彼が女性を好み後に隠遁したという記載はない。

(2)に至って、バルトリハリが王であったという伝説が成立する。弟はやはりヴィクラマである。「手から手へ移った不老不死の果実」というモチーフが用いられ、女性に不信を抱いたバルトリハリが隠遁するという伝説に連結する。

(3)は全く文学的な創作である。ただし、王であったバルトリハリが修行者になるという点は(2)と

共通である。

(4)では、バラモンの父がバラモン女とヴァイシャ女に生ませた息子が、それぞれ有名な文学者であるヴァラルチとバッティであるとする伝説が(1)に付加されている。(1)の段階では、バルトリハリとヴィクラマ以外の二人の息子の名は何かという疑問が当然残るので、ヴァラルチとバッティという高名な文人の名を借りて、四人の名を取り揃えたものであろう。(4)には、バルトリハリが若いころ女を好み、多数の妻を持ったが、後に修行者となったとある。この伝説は(2)(3)から引き継いだものだが、ただ、隠遁の理由が異なる。

(5)は従来の伝説を寄せ集めたものである。前半は(1)から借りて、それに、兄弟としてヴァラルチとバッティの名を付加した(4)を導入している。(5)の作者は、(1)の伝説に(2)の伝説を接続した。バルトリハリは(1)ではバラモンとシュードラ女の子であるが、(2)では王である。この矛盾を解消するために、バラモンであった父が後に王となったと述べる。そして(5)では、(2)の「手から手へ移った不老不死の果実」というモチーフを用いた後で、王妃がバルトリハリを毒殺しようとしたという悪女物語を付加している。更に、王宮を出て遍歴行者となった後を物語る、ローカルな伝説を付け加えている。

三　『三百頌』のテクスト

バルトリハリの箴言詩集は、前述のように、アブラハム・ローゲルの翻訳と紹介によって、すで

に十七世紀中葉にはヨーロッパの知識人に知られていた。ただし、ローゲルは『処世百頌』（Nīti-śataka）と『離欲百頌』（Vairāgya-śataka）を訳したのみで、『恋愛百頌』（Śṛṅgāra-śataka）は訳さなかった。[34] その後、この三つの百頌（シャタカ）のテクストと翻訳書及び研究が続々と出版され、[35] 詩人バルトリハリの名は世界的に知られるようになった。

ここで、バルトリハリの箴言詩集の批判版を出した、D・D・コーサンビーの偉大なる業績に言及しないわけには行かない。

彼は従来出版された無数のテクストはすべて不完全であると考えて、バルトリハリ詩集の原典研究の仕事に着手した。彼は一九四五年と四六年に相次いでその北伝本と南伝本を校訂出版したが、[36] 四八年に彼がボンベイで出版した批判版は、[37] 批判的という点では後世にも恐らくこれを乗り越えるものは出ぬと思われるような、完璧に近いテクストであった。

彼は三千近くもある現存の写本の中から、三百七十七種にも及ぶ資料を調査し、それを北伝本（Northern Recension）と南伝（及び西伝）本（Southern and Western Recension）に大別した。[38] そして、従来の分類にとらわれることなく、バルトリハリに帰せられるすべての詩節を、真正度に応じて四つのグループに分類した。詳細は批判版の序（pp. 65-68）に述べられているので省くが、すべての類本[39]（version）に共通するものを「グループI」と呼ぶ。これは彼が最も権威あると見なす中核の部分で、二百の詩節を含む。更に、「グループII」には第二〇一―三五二詩節、「グループIII」には第三五三―八五二詩節を配分する。「グループIV」は全く真作とは認められないもので、バルトリ

ハリに帰せられた『ヴィタ・ヴリッタ』と『ヴィジュニャーナ・シャタカ』とから成る。

もっとも、この分類法に問題がないわけではない。バルトリハリの箴言詩は古来『三百頌』(Śataka-trayam) の名のもとに集められ、『処世百頌』(Nīti-śataka)、『恋愛百頌』(Śṛṅgāra-śataka)、『離欲百頌』(Vairāgya-śataka) に分けられている。諸伝本によって配例法は異なるが、いずれの伝本もそれぞれの地方で、現在に至るまで長い年月にわたって愛唱されて来た、由緒ある伝本である。現代の学者が諸系統の写本を入手し得る限り集めて、最も多くの写本に共通に見出される部分を抽出し、これが原形である、あるいは原形に近いと主張することに、どれほどの意義があろうか。そうしてできたテクストは、いかに用意周到なものでも、伝統を持たぬ根無し草である。いわゆる批判的方法に対するこの心情的な不満は、F・エジャトンの労作、『パンチャ・タントラ』の復原(40)に対しても感じられたところであった。

しかしながら、コーサンビー等の血の滲むような努力を、決して否定するものではない。それが原典研究に貢献した度合いは計り知れぬものであろう。ただ、ここで強調したいのは、彼らの「批判版」のみが最良のテクストであると信じこむのは危険であるということだ。『三百頌』や『パンチャ・タントラ』のように、無数の写本が存する書物の場合は、各伝承ごとに批判版を作る必要があろう。コーサンビー自身も、伝承の重要性を無視したわけではなく、南北に伝わる四本の最良の校訂版を出版している(41)。

バルトリハリは詞華集(アンソロジー)の編纂者であるとする説(42)は正しくないが、『三百頌』が、

かなり後代になって、彼の名のもとに編纂されたものであることは確かである。このことは、コーサンビーの分類による「グループI」にすら、カーリダーサの『シャクンタラー』や『パンチャ・タントラ』の古層が含まれていることからも明らかである(43)。後世の編纂者が、有名な詩節を積極的に借用したものである。前述の仮説によれば、五世紀の後半ごろにいた文法学者バルトリハリが、世俗と厭離の生活を対比するいくつかの詩を作り、それと同じ傾向の詩は「バルトリ風」とされるようになった。そして、十二世紀末ごろまでに、バルトリハリの名を冠する「シャタカ」が編纂されたと考えられる。

ところが、コーサンビーは、『三百頌』の大部分が後代に編纂されたものであることを認めつつも、バルトリハリがその原形を作ったと考え、驚くべきことに、この詩人の年代は西紀後の初めの時期 (the opening centuries of the Christian era) であるとする(44)。他の説はともかくとして、この年代論だけは、どう見てもインド文学史の常識に反するものである。「真正度Iに属する詩節すら必ずしも真作でないとすれば、機械的操作にのみ頼ることは危険である」(45)という辻博士の批判に賛同するものである。

『三百頌』の他に、詩人バルトリハリに帰せられる作品に、『ヴィタ・ヴリッタ』(Vīta-vṛtta)、『ヴィジュニャーナ・シャタカ』(Vijñāna-śataka)、更に、『プルシャールタ・ウパデーシャ』(Puruṣārthopadeśa) があるが(46)、すべて彼の真作か否かを論ずるに値する作品ではないので、ここでは題名のみをあげるにとどめる。また名前の類似の故に、六、七世紀ごろの詩人バッティをバルトリハリ

と同一人物と見なし、その作品『バッティ・カーヴィヤ』(Bhaṭṭi-kāvya)、別名『ラーヴァナ殺戮』(Rāvaṇavadha) をバルトリハリに帰する説もあるが、これも問題とするに足らぬものである。[47]

バルトリハリの『三百頌』が後代の詩人に及ぼした影響は極めて大きい。『離欲百頌』に倣って『寂静百頌』(Śānti-śataka) を作ったシルハナ (十三世紀以前) を初めとし、多くの詩人が『三百頌』の模倣を作ったが、いずれも詩的価値はバルトリハリの箴言詩集に遠く及ばなかった。[48]

最後に、日本語訳に際し底本として用いたニルナヤ版[49] (第八版) について一言述べたい。このテクストは南伝本であり、ラーマチャンドラ・ブデーンドラ (Rāmacandra Budhendra) による最良の注釈が付せられている。第七版は完全というにはほど遠く、誤植の多いものであったが、コーサンビーがN・R・アーチャーリヤの助力を得て、注釈とともに改訂して、その第八版を出版したものである。

訳者がこのニルナヤ版を採用した理由は、南伝本の例にもれず、全体の構成が比較的整然としているからである。コーサンビーの批判版を使用しなかったのは、前に述べたような心情的な理由からだけではない。もし、中核となる「グループI」だけを訳せば、『三百頌』とはならず、「二百頌」となってしまい、三つの「百頌」も不十分な数のものになってしまう。バーバラ・ミラー女史の最新の英訳も、二百の詩節を含むのみである。また、批判版に含まれるすべての詩節を訳したとしたら、実に八五二詩節に達する。「グループII」までを訳すとすれば、三五二詩節ということになるし、三つの「百頌」をどう配分するかが問題となろう。その点、ニルナヤ版は大体百詩節ずつからなり、しかもその各々が、一応同じ傾向の十乃至二十の詩節を集めた章 (paddhati) からなる。注釈者ラーマチャンドラは各々の章の最後に、その章の題名を記している。すなわち、この版の配列順及び構成はラーマチャンドラ自身が認めたものであろう。批判版と対照してこの日本語訳を読む読者の便を配慮して、批判版とニルナヤ版の対照表を掲げる (二〇九頁以下)。ただし、ニルナヤ版の採用した読みは、批判版のそれとかなり異なるので、注意する必要がある。

(1) バルトリハリに関する研究は多いが、ここでは主として次のものを参照した。D.D. Kosambi, *The Epigrams attributed to Bhartṛhari* (Bombay 1948), Preface and Introduction, pp. 1-81. K.A. Subramania Iyer, *Bhartṛhari* (Poona 1969), pp. 1-15. B.S. Miller, *Bhartṛhari: Poems*, Columbia University Press (New York and London 1967), Introduction. L. Sternbach, *Subhāṣita, gnomic and didactic literature* (Wiesbaden 1974), pp. 48-55. 田中於菟弥「伐撥呵利の薄迦論」早稲田大学文学部哲学年誌『フィロソフィア』第七巻、七一―八七頁。中村元『ことばの形而上学』(岩波書店 1956) 六―二四頁。辻直四郎『サンスクリット文学史』(岩波書店 1973) 一二五―一三〇。その他の参考書は、上掲の諸書及び注に網羅されている。テクスト及び翻訳については後述。

(2) 『南海寄帰内法伝』巻第四、大正蔵五四巻、二二九上中。外国の学者は、従来、高楠順次郎博士の英訳を典拠とした。J. Takakusu, *A Record of the Buddhist Religion as practised in India and the Malay Archepelego* (Oxford 1896), pp. 178-180.

(3) *Mahābhāṣya Ṭīkā by Bhartṛhari*, Vol. 1, ed. by V. Swaminathan, Hindu Vishvavidyalaya Nepal Rajya Sanskrit Series, Vol. 11 (Vārāṇasī 1965). *Mahābhāṣyadīpikā of Bhartṛhari*, ed. by

K.V. Abhyankar and V.P. Limaye, Bhandarkar Oriental Research Institute (Poona 1970).

（4） バルトリハリが仏教徒であるかどうかを論じた研究については、L. Sternbach, p. 48, fn. 244 を見よ。

（5）「抳也」の反切。すなわち kiă.（加藤栄司氏の御指摘による。）

（6） 最も重要な言語哲学書。主要な出版本と訳——K.A. Subramania Iyer: *Vākyapadīya*, Kāṇḍa I (Poona 1966); Kāṇḍa III, Pt. 1 (Poona 1963); Kāṇḍa III, Pt. 2 (Poona 1973);（英訳）Ch. I (Poona 1965); Ch. II (Delhi 1977); Ch. III, Pt. 1 (Poona 1971); Ch. III, Pt. 2 (Delhi 1974). M. Biardeau: *Vākyapadīya Brahmakāṇḍa*, texte, traduction, introduction et notes (Paris 1964). K.V. Abhyankar & V.P. Limaye, *Vākyapadīya of Bhartṛhari*, Ch. I–III (Poona 1965). K. Raghavan Pillai: *The Vākyapadīya*, Ch. I, II, with Eng. Transl. (Delhi 1971). P.S. Sharma, *The Kālasamuddeśa of Bhartṛhari's Vākyapadīya* (Delhi 1972).『ヴァーキヤ・パディーヤ』を中心とするバルトリハリ及び言語哲学一般の研究書としては、次のものが良書である。K.A. Subramania Iyer, *Bhartṛhari* (Poona 1969). M. Biardeau, *Théorie de la connaissance et philosophie de la parole dans le brahmanisme classique* (Paris 1964). D.S. Ruegg, *Contributions à l'histoire de la philosophie linguistique indienne* (Paris 1959). K.K. Raja, *Indian theories of meaning* (Madras 1963). なお、バルトリハリの言語哲学における重要な術語スポータについては、拙稿「インド古典における文学理論と言語哲学の接点」(『東方学』第四八輯) 七九頁を見よ。

（7） あるいは、*Vivaraṇa* or *Ṭīkā* と呼ばれる。インドの伝承によれば、この注釈はバルトリハリ自身のものである。しかし、M. Biardeau は、注釈の作者ハリ・ヴリシャバ (Harivṛṣabha) はバルトリハリとは別人であるとする。S. Iyer は頌 (kārikā) の作者と注釈の作者はともにバルトリハリであると論証する (*Bhartṛhari*, pp. 16–36)。D.S. Ruegg (ibid., p. 62) も、注釈の作者はおそらくバルトリハリであるとする。

（8） S. Iyer, *Bhartṛhari*, pp. 7–8. 中村、九一一〇頁（及び注14）を見よ。

（9） 中村、一一頁及び注（24）（25）を見よ。

（10） 特に *Śṛṅgāra-śataka*, 36–39 を見よ。

（11） L. Sternbach (p. 48) は、誤って "fifty years" と記している。

（12） 中村元『ヴェーダーンタ哲学の発展』（岩波書店 1955）三三頁。ディグナーガを四〇〇—四八〇年ころとする。E. Frauwallner (WZKSO, III, 1959) は、ヴァスラータ（バルトリハリの師）を四三〇—四九〇年、バルトリハリを四五〇—五一〇年、ディグナーガを四八〇—五四〇年とする。その他の研究については、S. Iyer, p. 2, fn. 6 を見よ。

（13） 作者不明。S. Iyer, p. 1 の冒頭に引用されたサンスクリット文から訳した。なお、Iyer は Rāmabhadra Dīkṣita の詩人・文法家同一説にも言及し (p. 11)、その著作 *Patañjalicarita*, 8, 10–11 を引用している (p. 408)。

（14） F. Max Müller, *India, what can it teach us?* (London 1883), pp. 347–353. キースもこの説を支持している。A.B. Keith, *A History of Sanskrit Literature* (Oxford 1928), pp. 176–177.

（15） 辻『文学史』一二六—一二七頁。

（16） Somadeva, *Yaśastilakacampū*, Kāvyamālā 70, II, p. 113. ソーマデーヴァは「シャタカ」には言及していない。

（17） Merutuṅga, *Prabandhacintāmaṇi* (Bengal 1933), p. 121. この作品に含まれる伝説については後述。

（18） もちろん、ソーマデーヴァが「シャタカ」の名をあげなかったからといっても、それが十世紀以前に編纂されていたという可能性は残る。

（19） *Prabandhacintāmaṇi* of Merutuṅga, ed. by Jinavijaya Muni, Siṅghī Jaina Granthamālā (Bengal 1933), p. 121. Eng. Tr. by C.H. Tawney, (Calcutta 1899–1901), pp. 197–198.

（20） "dānaṃ bhogo nāśas tisro gatayo bhavanti vittasya" *Nīti-śataka*, 34[ab].（批判版 No. 50）後半の

行は、"yo na dadāti na bhuṅkte tasya tṛtīyā gatir bhavati."「施さず、楽しまぬ者には、第三の帰趨がある。」この格言詩は、*Pañcatantra*, ed. G. Bühler, II. 151 などにも見出される。その他については、批判版脚注を見よ。

(21) "āyāsaśatalabdhasya prāṇebhyo 'pi garīyasaḥ,
gatir ekaiva vittasya dānam anyā vipattayaḥ."
この詩は「シャタカ」(批判版 No. 400) に収められている。*Tantrākhyāyika*, II. 109 にもある。

(22) F. Edgerton, *Vikrama's adventures or the thirty-two tales of the throne*, (Cambridge, Mass. 1926) Pt. 1, trans., pp. 5-14; Pt. 2, text, pp. 5-13.

(23) 辻『文学史』一五六頁。

(24) ジャイナ伝本では、アヴァンティー。ウッジャイニー (ウッジャイン) は中部インドのアヴァンティ (あるいはアヴァンティー) 国の首都であった。バルトリハリがアヴァンティーの王であったという伝説は、チベット語文献ターラナータ (一五七三―一六一五?) の仏教史の記述と符合する。ターラナータは、マーラヴァ (アヴァンティー国の別名) の王であったバルターリ (Bharthāri=Bhartṛhari?) の名をあげている。A. Schiefner, *Tāranāthae De Doctrinae Buddhicae* (Petropoli 1868), p. 149, *l*.20; *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus* (St. Petersburg 1869), p. 195.

(25) 大体、「シャタカ」(批判版 No. 566) と同じ。

(26) *The Bhartṛharinirveda of Hariharopādhyāya*, 4th ed., Kāvyamālā 29 (Bombay 1936); translated by Louis H. Gray, JAOS. Vol. 25, 1904, pp. 197-230.

(27) L.H. Gray, ibid., pp. 226-227 (オランダ語の原文); p. 228-230 (英訳).

(28) Abraham Roger (Rogerius), *De Open-Deure tot het verborgen Heydendom* (Leyden 1651); ed. W. Caland (Haag 1915), pp. 171-204. パドマナーバは『恋愛百頌』の内容を不道徳として訳さなかった。

(29) M. Winternitz, *Geschichte der indischen Litteratur*, Bd. 3, p. 143, fn. 1, 2 を見よ。なお、中

村元『比較思想論』(岩波全書) 一一頁を参照せよ。

(30) Kafirs については、L.H. Gray, p. 229, fn. 2 を見よ。

(31) Vettam Mani, *Purāṇic Encyclopaedia* (Delhi 1975), pp. 124-126. ここで「ウッタラ・バーラタ」(Uttara-bhārata) は単に北インドを意味する。マニが何を典拠としたか不明。

(32) brahma-rākṣasa 生前、邪悪な生活を送ったバラモンの亡霊。『マヌ法典』一二・六〇、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』三・二一二参照。

(33) Chidambaram Temple と信じられている。

(34) 注28を見よ。

(35) 重要なテクスト及び翻訳書は、D.D. Kosambi (Bombay, 1948), Preface, pp. 4-8. L. Sternbach, pp. 51-52, fn. 258. B.S. Miller, pp. 153-156. *Union List* (New York 1967), 1164-1180. 及び、辻『文学史』注六六〇に網羅されている。日本語による抜粋訳としては、辻『文学史』に掲げられた松山俊太郎訳の他に、田中於菟弥訳 (『インド集』三三六―三三八頁、『酔花集』三二五―三二八頁)、辻直四郎訳 (『サンスクリット読本』一六七―一六九頁) がある。

今回の翻訳にあたっては、底本として、
Subhāṣitatriśatī, with the comm. Sahṛdayanandinī of Rāmacandrabudhendra, 8th ed. by D.D. Kosambi, Nirṇaya Sāgar Press (Bombay 1957) 〔翻訳注において、「ニルナヤ版」と呼ぶ〕
を用い、その他、特に次のテクスト及び訳本を参照した。
D.D. Kosambi, *The Epigrams attributed to Bhartṛhari*, Singhi Jain Series, No. 23 (Bombay 1948) 〔「批判版」と呼ぶ〕; *Bhartṛhari's Śatakatrayam*, with the comm. of Dhanasāragaṇi, Singhi Jain Series, No. 29 (Bombay 1959).
B.S. Miller, *Bhartrihari: Poems*, Columbia University Press (New York and London 1967).
P.G. Nath, *The Nîtiśataka, Śringâraśataka and Vairâgyaśataka of Bhartrihari*, 2nd ed. (Bombay

1914).

(36) D.D. Kosambi, *Bhartṛhari Śatakatrayam*, ed. with a ṭīkā of Rāmarṣi, ĀnSS, No. 127 (Poona 1945); ed. with an anonymous Skt. comm., ed. by K.V. Krishnamoorthi Sharma, Bhāratīya Vidyā-granthāvalī 9 (Bombay 1946). 後者の注釈の作者は，後に Ārkuṭṭyālaya Bālarām Kavi と判明。前注であげた一九五九年 (Singhi Jain Series, No. 29) 出版本 (Preface, p. 1) を見よ。

(37) Singhi Jain Series, No. 23. 注35を見よ。

(38) 辻『文学史』二二七頁及び注六六二を見よ。

(39) 辻，二二八頁一行目を見よ。

(40) F. Edgerton, *The Panchatantra reconstructed*, 2 Vols. (New Haven, 1924).

(41) 注35，36を見よ。

(42) Cf. J. Hertel. WZKM. 16 (1902), pp. 202-205; 298-304.

(43) *Nīti-śataka*, 61 (批判版 No. 63)=*Śakuntalā*, (ed. Pischel) V. 13. *Nīti-śataka*, 38 (No. 40)=*Tantrākhyāyikā*, I. 185. *Nīti-śataka*, 97 (No. 40)=*Tantrākhyāyikā*, II. 115. *Vairāgya-śataka*, 21 (No. 152)=*Tantrākhyāyikā*, II. 76. その他の「グループ」における借用は更に甚だしい。

(44) 批判版 Introduction, p. 78.

(45) 辻『文学史』二二八―二二九頁。

(46) L. Sternbach, pp. 54-55. 辻『文学史』二二九―二三〇頁を見よ。

(47) S. Iyer, p. 14. を見よ。

(48) L. Sternbach, pp. 55f. を見よ。

(49) 注35を見よ。

批判版とニルナヤ版の対照表

N=Nīti-śataka; Ś=Śṛṅgāra-śataka; V=Vairāgya-śataka

批判版	ニルナヤ版	批判版	ニルナヤ版	批判版	ニルナヤ版	批判版	ニルナヤ版
1	V 1	18	N 56	35	N 47	52	N 71
2	Ś 78	19	N 70	36	N 60	53	N 26
3	N 54	20	N 67	37	N 44	54	N 62
4	N 2	21	N 73	38	N 14	55	N 20
5	N 8	22	N 91	39	N 84	56	N 40
6	Ś 69	23	N 33	40	N 97	57	N 23
7	N 94	24	N 43	41	N 80	58	N 37
8	N 3	25	N 31	42	N 19	59	N 38
9	N 4	26	N 82	43	N 51	60	N 46
10	N 45	27	N 42	44	N 69	61	N 41
11	N 35	28	N 66	45	N 95	62	N 49
12	N 36	29	N 93	46	N 99	63	N 61
13	N 11	30	N 9	47	N100	64	N 63
14	N 52	31	N 65	48	N 98	65	N 29
15	N 12	32	N 50	49	N 81	66	N 39
16	N 13	33	N 58	50	N 34	67	N 6
17	N 21	34	N 25	51	N 32	68	N 7

69	N 48	92	Ś 3	114	Ś 53	136	Ś 18
70	N 16	93	Ś 6	115	Ś 75	137	Ś 93
71	N 18	94	Ś 45	116	Ś 23	138	Ś 83
72	N 53	95	Ś 74	117	Ś 9	139	Ś 12
73	N 27	96	Ś 48	118	Ś 10	140	Ś 91
74	N 24	97	Ś 31	119	Ś 15	141	Ś 99
75	N 30	98	Ś 87	120	Ś 72	142	Ś 95
76	N 15	99	Ś 81	121	Ś 21	143	Ś 96
77	Ś 70	100	Ś 77	122	Ś 22	144	Ś 97
78	Ś 61	101	Ś 49	123	Ś 25	145	Ś 100
79	Ś 2	102	Ś 56	124	Ś 24	146	Ś 68
80	Ś 8	103	Ś 33	125	Ś 43	147	Ś 71
81	Ś 40	104	Ś 54	126	Ś 57	148	V 2
82	Ś 47	105	Ś 30	127	Ś 11	149	V 3
83	Ś 35	106	Ś 29	128	Ś 27	150	V 4
85	Ś 39	107	Ś 7	129	Ś 55	151	V 43
86	Ś 28	108	Ś 46	130	Ś 14	152	V 21
87	Ś 92	109	Ś 58	131	Ś 16	153	V 9
88	Ś 37	110	Ś 59	132	Ś 17	154	V 45
89	Ś 4	111	Ś 82	133	Ś 13	155	V 7
90	Ś 5	112	Ś 1	134	Ś 89	156	V 8
91	Ś 44	113	Ś 79	135	Ś 38	157	V 12

158	V 15	180	V 63	205	Ś 51	240	N 85
159	V 16	181	V 26	207	V 22	242	V 73
160	V 18	182	V 64	209	N 88	243	V 96
161	V 54	183	V 66	210	V 55	244	Ś 99
162	V 57	184	V 25	212	Ś 94	245	V 65
163	V 51	185	V 89	215	Ś 26	246	N 79
164	V 58	186	V 67	217	Ś 19	247	Ś 50
165	V 56	187	V 68	218	Ś 63	248	N 68
166	V 52	188	V 69	221	N 64	249	V 83
167	V 61	189	V 70	224	V 17	251	Ś 76
168	V 5	190	V 94	226	N 76	252	V 20
169	V 41	191	V 71	227	V 87	253	V 19
170	V 48	192	V 36	229	Ś 60	256	N 1
171	V 42	193	V 79	230	N 75	257	Ś 34
172	V 76	194	V 75	231	Ś 41	258	V 77
173	V 10	195	V 46	233	Ś 66	261	N〔91〕
174	V 28	196	V 14	234	V 91	263	V 11
175	V 47	197	V 32	235	V 50	265	N 74
176	V 81	198	V 33	236	V 6	267	V 69
177	V 53	199	V 37	237	N 17	268	V 90
178	V 35	200	V 49	238	V 24	269	V 99
179	V 23			239	V 98	271	Ś 84

第二部　ビルハナの人と作品

273	Ś 20	290	V 30	315	V 80	335	N 55
274	Ś 85	292	V 39	316	V 44	338	V 60
275	N 57	293	V 34	317	Ś 64	340	Ś 86
276	N 83	294	V 31	319	N 5	341	Ś 32
277	N 72	296	Ś 73	321	N 28	342	N 86
278	N 89	298	Ś 51	322	N 77	343	N 96
279	N 59	300	V 84	323	V 74	345	V 88
280	Ś 98	301	V100	324	N 78	347	V 85
281	V 27	302	V 93	325	V 86	348	Ś 42
282	Ś 62	303	V 78	326	Ś 67	349	Ś 88
283	V 13	304	V 59	327	N 90	350	N 22
284	V 92	306	V 72	328	Ś 65	352	V 97
285	N 92	308	V 82	330	Ś 80		
286	V 40	313	N 87	332	V 38	361	Ś 84
289	V 95	314	V 29	334	N 10	759	N[10]

第一章　チャウラ・パンチャーシカー

凡例

一　底本に用いたプーナ本と、対照したミラー本については、第二章の二（注16）を見よ。

二　プーナ本の訂正表は二六六頁に付した。

一

今もなお、あの女(ひと)のことを考える。
金色のチャンパカの花輪に白く輝き、
花開く蓮のような顔をした女を。
その〔腹部には〕柔(やわ)いうぶ毛の線……。
あの女は眠りから醒めたばかりで、
その肢体は愛にふるえ没入している
まるで酔いしれた魔術のようだ。

二

今もなお……
月のような顔をしたあの女(ひと)は
若々しさに満ち、豊かな乳房をして、
輝かしい美にあふれている。
その躰は愛神の矢の火に焦がれて。

一　チャンパカ (campaka) マグノリア樹。淡黄色で芳香性の花をつける。学名 Michelia champaca Linn.
○うぶ毛の線 (roma-rājī)—女性の臍の上部に縦に走る毛脈。美女の特徴の一つ。ローマーヴァリー (romāvalī) ともいう。
○酔いしれた (pramāda-guṇita-)—直訳「酔いによって倍加した」。バーバラ・ミラーは pramāda-galitām の読みを採用し、「怠慢により私が失った」と解する。
○魔術 (vidyā)—呪文・魔術の擬人化（女性形）。vidyā には「学術」「知識」の意もある。ヴィディヤーはまたシヴァ神妃ガウリー (Gaurī) の異名でもある。「白く輝き」(gaurī) との間に暗喩が存するかもしれない。
「彼女は酔いにより倍加した魔術のようだ」という比喩は疑問であるが、愛に酔いしれた女の風情がなおさら男の心を魅了することを、「酔いによってその威力を増加した魔術のようだ」と表現したものと解する。なお Vidyā は、ビルハナ伝説の一つにおけるヒロイン（王女）の名である。それと関連づけて解釈する学者もいる。S.N. Dasgupta, *A History of Sanskrit Literature*, Vol. I (Calcutta 1962), p. 657 and fn. 3.

今また私が彼女と会えるなら、
その肢体をこよなく涼しくしてあげる。

三

今もなお……

豊かな乳房の重みに疲れた
あの蓮のような眼の女(ひと)に
もし再び会えるなら、
両腕できつく抱き、狂ったように
その口を思うさま吸うだろう。
蜜蜂が蓮花を吸うように。

四

今もなお、あの女(ひと)を想い出す。
その肢体は愛の交わりに疲れて気怠く、
一連の束髪が蒼白い頬に落ちていた。

二 今もなお、初々しい若さに満ちた美しい彼女のことをありありと心に思い浮べる。しかし、彼女は別離のため、愛にもだえ苦しんでいる。まるで火に燃やされているようだ。もしいま一度彼女と会うことが可能ならば、彼女の熱―別離の苦しみ―を取り除くことができるのだが。
○愛神の矢 (manmatha-śara)―愛の神カーマは五本の矢で人の心を射て、愛に狂わせる。愛神の矢をうけた苦しみを、火で燃やされることに喩えたもの。

三 彼女は華奢な身体にしては豊満すぎる乳房をして、いつもその重みのために疲れているようだった。その身体をきつく抱いて、蜜のような唇を思いきり吸ってみたいものだ。ちょうど蜂が蓮の花の蜜を飲むことに熱中するように。
○蓮のような眼の女 (kamalāyatākṣī)―美女の眼をしばしば蓮の花に喩える。

四 あの時、彼女は激しい悦楽の後で疲れ果てて恋人の横に寝ていた。人の目を憚る禁じられた情事に対する罪の意識を忘れようとするかのように、男の頸にその腕を巻きつけて。

五

秘めた過ちを内に包むように
私の頸に柔らかい蔓草の腕(かいな)を巻いて。

今もなお、あの女(ひと)を想い出す。
夜を徹す快楽(けらく)に、きらめく瞳は
廻り、あらぬ方にそれていた。
そんな切れ長の眼をした女を。
恋の極みの蓮池にいる水鳥のような女、
暁には恥じらいでうつむいていた……。

六

今もなお……

耳に達す切れ長の眼をした女(ひと)、
長い別離に嫋やかな肢体を燃やす
あの女に、もしまた会えるなら、

○秘めた過ちを……―ミラーの読み pracchanna-pāpa-kṛtam antar ivāvahantīṃ を採用。プーナ本は pracchanna-pāpa-kṛta-mantharam āvahantīṃ の読みをとり、「秘めた過失〔によってひきおこされた恐れ〕のためにふるえて」と訳す。秘めた罪（密会）ゆえに一層激しく燃えて、その結果けだるくなるとも解せる。いずれにせよ、疑問の個所である。

五 夜じゅう愛しあって、とうとう眠らなかった。彼女の切れ長の眼の中では、不眠の快楽のために瞳がぐるぐる廻って、わきの方にそれていた。愛戯においては蓮池を游ぎまわるラージャ・ハンサ（水鳥の一種）のように激しく動きまわった彼女も、朝になると恥ずかしくてうつむいていた。
○夜を徹す快楽に……―ミラーの読み tiryag-valat-tarala-tāraka-dīrghanetrām を採用。
○恋の極み (śṛṅgāra-sāra)―プーナ本では、「愛戯の家」(keli-gṛha) と解する。
○水鳥 (rāja-haṃsa)―ラージャ・ハンサを「水鳥」と訳した。ラージャ・ハンサはハンサ (haṃsa) の種類。赤い足と嘴を持つ鵞鳥の一種。一般のハンサの学名は Anser indicus. 第二二、四四詩節

私は全身できつく抱きしめ、
眼を閉じたままでいるだろう。
そして、決して離しはしない。

七

今もなお、想い出す、
愛戯の舞踏を指揮する女を。
満月のような顔のあの女は
快感に肢体をふるわせ、
豊かな臀と乳房の重みで
嫋やかな躰を撓めていた。
巻き毛の束を波うたせ……。

八

今もなお、あの女を想い出す。
寝台で、彼女は軟かな栴檀の煉香と

でも、女をラージャ・ハンサに喩えている。ちなみに、臀が大きく重いのでよたよた歩く美女の歩きぶりを、「ハンサの足どり」(haṃsa-gati) という。

六 美女の大きくて切れ長の眼は、しばしば「耳まで達する」と誇張して表現される。

七 時には女の方が愛戯の主導権をとることもあった。そういう時の彼女の様子を今でも想い出す。
○愛戯の舞踏 (surata-tāṇḍava)―ターンダヴァ (tāṇḍava) は激しい動作をともなうダンスの種類。特に、シヴァ神が有頂天になった時に踊るとされる。激しい愛戯をターンダヴァに喩えた。
○指揮していた女 (sūtra-dhārī)―スートラ・ダーラ (sūtra-dhāra) は舞台監督のこと。愛戯を舞踏に喩えたが、その舞踏の指導をしていた女、という意味である。つまり、愛戯において女の方がイニシアティブをとること。第一二詩節解説参照。

八 軟かな……―直訳「軟かな栴檀の煉香と混じった麝香の香水から立ちのぼり拡散する芳香を有する(女を)」
○唇 (cañcu-puṭa)―直訳すれば「嘴の穴」。プーナ本注にある異本の読み、any-

麝香の匂いをあたりに放っていた。
唇を交わして口づけすれば、
睫毛をかたく閉じるその魅惑の眼。

九

今もなお、想い出す、愉悦の時の
あの嫋やかな躰の女を。
酒を飲んで赭ら顔、唇も艶めいて、
切れ長の眼は廻り、サフランの煉香と
麝香を身体に塗って、その口は
樟脳の薫る檳榔子に満ちていた。

一〇

今もなお、いまわの際に想い出す、
愛しい女のあの顔を。
顔に塗られた金色に輝くサフラン香は

onya-cañcuputa-cumbana-khañjarita-yugmā-「互いに嘴を合わせて接吻する番いのセキレイのように魅力的な眼をした(女を)」を採用すれば、「嘴」という語を活かせるが、セキレイを美女の眼に喩える例は稀である。

九 酒を飲んで赭ら顔 (madhu-pāna-rakta-ānanā ... madhu-pāna-ra-ktāṃ)―プーナ本の読みを採用。
○唇も艶めいて (lilâdharāṃ)―プーナ本の読みを採用。ただし、プーナ本の編者は、līlā-dharāṃ と解したらしく、"she of a sportive nature" と訳している。ここでは、līlā-adharāṃ と切って訳した。
○樟脳の薫る檳榔子 (karpūra-pūga)―樟脳で香気を添えられた檳榔子の実。檳榔子 (pūga) の学名は Areca catechu. 英語名 betel-nut tree. インド人は檳榔子の実を蒟醤の葉に包み、チューインガムのように噛む。樟脳も檳榔子も清涼感をもたらし、酔いを醒ます。サフラン香や麝香を身体に塗るのも、酔ってほてった身体を冷やすためである。

一〇 いまわの際に (ante)―「愛戯の終った時の」とも解し得る。ここでは伝説を活かして、「まさに処刑されようとする時」の意にとった。第二二詩節をも参照せよ。

汗の滴にまみれ、その両眼は
快楽(けらく)の疲れに震えていた。
月蝕の悪魔から逃れた
月輪のようなあの顔……。

一一

今もなお、あのことは残っている
ありありと、私の心に。
夜中に私がくしゃみをすると、
王女は怒っていて、「鶴亀」と
めでたい文句は出ずじまい。
何もいわずに、その耳に
黄金の葉をつけたっけ。

一二

今もなお、想い出す、

○月蝕の悪魔（Rāhūparāga）―直訳「ラーフの蝕」。ラーフは不老不死をもたらす神々の飲料アムリタ（amṛta 甘露）を飲んだためヴィシュヌ神に首を切られた悪魔の名。ところが、首のところまでアムリタが及んでいたのでその頭部のみ不死となり、ヴィシュヌ神に密告した太陽と月とを追って日蝕・月蝕をひき起すと信じられた。『インド神話』六四頁を見よ。

一一　夜中に恋人がくしゃみをするのは不吉な前兆と考えられていたから、厄払いのために「鶴亀」（jiva―「生きよ」）と唱えなければならない。ところが痴話喧嘩のために王女は怒っていたので、その吉祥の句を唱えなかった。しかし彼女は、やはり恋人を深く愛していたから心配でたまらず、葉の形をした黄金のイアリング（「黄金の葉」）を耳につけた。黄金の葉も厄除けのお守りと考えられていたものであろう。そういう強情だがいじらしい女の心づかいを今も忘れはしない。

一二　女は男の上にのしかかり、激しく身体を揺り動かす。その顔に吹き出る汗の滴は、真珠のようにきらめいていた。
○愛戯で男役（viparita-rata）―直訳「逆転の愛戯」。性交において、女がイニシ

愛しいあの女(ひと)の顔を、
愛戯で男役をつとめる時の。
金の耳環がその頬をこする。
躰を揺すり、吹き出る汗の
きらめく滴は真珠の群にも似て
その顔をおおっていた。

一三

今もなお、想い出す、あの女(ひと)の
愛情あふれるながしめを。
快楽(けらく)にわななき肢体を反らすのを、
衣の縁が蹟く魅惑の乳首を、
私の歯形に飾られたその唇を。

一四

今もなお、想い出す、

アティヴをとり、男が受け身となること。女上位のセックス。puruṣāyita と同義。『カーマ・スートラ』二・八（一七）を見よ。

一三　これも女との情交の場面を想い出しているものである。歯形の種類については『カーマ・スートラ』二・五（一一）を見よ。
○衣の縁が蹟く（vastrāñcala-skhalana-）―乳首が魅力的に高く尖っているので、脱ぎ捨てた衣服が「蹟く」のである。

一四　無憂樹（aśoka）―アショーカ樹。学名は Jonesia asoca roxb あるいは Saraca indica. 赤い花をつける常緑樹であるが、その若葉は赤い。赤いラックを塗った女の手をアショーカの若葉に喩えている。

無憂樹（アショーカ）の若葉のような
赤い手をした愛しい女（ひと）を。
真珠の連がその乳首に口づけし、
蒼白い頰は秘めた笑いに息づく。
彼女のけだるい千鳥足……。

一五

今もなお、想い出す、
あの女（ひと）の金色の太腿についた
私の爪の傷あとを。
彼女が起き上る時、私は
その金色に輝く衣を引く。
恥ずかしくて、あの女は去りながら
手でそれをおさえたっけ。

一六

○真珠の連が……――真珠の頸飾りが彼女の乳首に触れているという意。
○蒼白い頰は……――笑いをこらえているため、彼女の頰はふるえている。
○千鳥足（hamsa-gati）―直訳は「ハンサ鳥のような歩行」。ハンサについては第五詩節の解説を見よ。美女は大きくて重い乳房と臀を持つので、ハンサ鳥のようによちよち歩く。つまり、ハンサの足どりは美女の条件の一つ。

一五　性的興奮が高まると、恋人の身体に爪あとをつける。前述（第一三詩節）の歯形も同様である。爪あとの種類については、『カーマ・スートラ』二・四（一〇）を見よ。
男は女の太腿に爪あとをつけた。性の歓びも終り、女は寝台から起き上って下衣を身に着け、その場を離れようとする。男はそうさせまいとその衣を引っぱる。すると彼女の太腿についた爪あとがあらわになる。女は恥ずかしくて衣をおさえてその傷を隠す。交わりの間は奔放に振舞ったが、日常にもどると恥ずかしくなってしまう、初々しい娘心が歌われている。
○金色の（kanaka-renu）―直訳「金色の粉」。おそらく、栴檀の煉香のこと。

今もなお、想い出す、
二人きりの時のあの女（ひと）を。
黒く彩られたその眼は揺れ動き
束髪は種々の花に満ちていた。
紅を塗った〔唇〕、真珠のように輝く歯。
金の腕環をつけていた女……。

一七

今もなお、想い出す、
二人きりの時のあの女（ひと）を。
束髪の結びはほどけ
その花飾りはずり落ちて
甘露のように甘い唇は微笑む。
真珠の頸飾りは、豊かに隆起した
両の乳房の上に優しく口づけし、
そのまなざしは揺れていた。

一六　男に抱かれる前の、まだ化粧が乱れていない時の女の描写。
○二人きりの時の（rahasi）―「ひそかに（想い出す）」とも解し得るが、やや弱いように思われる。
○種々の花…（prabhūta-kusuma-）―この個所の直前にある pṛthvīṃ（プーナ本）は疑問。プーナ本の編者は女を指す epithet ととり、彼女の豊かな臀や胸などを指示すると解する。ミラー本の採用した pṛthvī-prabhūta- という読みも、疑問点を解決するには至らない。
○紅を塗った〔唇〕…――真紅の唇と、純白な歯とを対比させている。合成語中の saṃlulita は疑問の語。モニエルの梵英辞典の指示（'smeared with' Sch.）により訳した。
一七　今度は、激しい情事の後で、髪が乱れ、髪に飾った花輪のずりおちた女の様子の描写。

一八

今もなお、想い出す、白い館で
二人きりの時のあの女を。
立ち並ぶ宝石のランプが放つ
光の群が、闇をうち払う……。
面と向って見つめんとすれば、
その眼は羞恥と恐れに苦しむ。

一九

今もなお、想い出す、
鹿の眼をしたあの婀やかな女を。
その躰は別離の火に苦しむ……。
性の歓びの唯一の器である女、
きらびやかな飾りをつけ、
水鳥のような足どりをした、

一八　宝石のランプ（ratna-dīpa）—「宝石を塡め込んだランプ」ともとれるし、「宝石というランプ」ともとれる。後者の場合は、部屋がランプのようなおびただしい宝石の群で明るい、という意味を示す。

一九　水鳥のような足どりをした（rāja-haṃsa-gamanā）—乳房と臀が重いので、ラージャ・ハンサのようによちよち歩く女。ラージャ・ハンサについては第五詩節、ハンサの足どり（haṃsa-gati）については第一四詩節の解説を見よ。

美しい歯のあの女を。

二〇

今もなお、想い出す、
微笑むあの愛しい女を。
乳房の重みに躰を撓め、
その頸に真珠の連が白く輝く。
愛の神の、愛戯のマンダラ山で
艶やかに輝く花の旗のような女。

二一

今もなお、想い出す、
快楽の疲れにふるえていた
あの愛しい女の言葉を。
幾百の睦言、意味も定かでない、
はっきりせず、おずおずした

二〇　愛の神（kusumāyudha）—「花を武器とするもの」という意。愛神カーマは花で出来た弓矢で人の心を射るとされる。○マンダラ山（Mandara-giri）—神々と阿修羅がアムリタ（甘露）を得るために乳海を攪拌した時、攪拌棒として用いたとされる伝説の大山。『インド神話』六二頁を見よ。「愛戯のマンダラ山で」（tat-keli-mandara-girau）の意味は不明。彼女の愛戯をマンダラ山に喩えるという比喩は唐突である。あるいは、マンダラ山には「攪拌」のイメージが強いから、エロチックな意味を暗示しているのかもしれない。他の写本の tat-keli-mandira-gatām という読みをとれば、この詩の後半は、「彼女の娯楽の家（keli-mandira）にある、愛の神の……花の旗のような女を」という意味になり、幾分解釈しやすくなるが、それにしても疑問が残る。

二一　激しい情事は終ったが、なおもその余韻が残っている。女は男に寄り添って、とりとめもない甘い言葉を囁きかける。

とりとめもない声……
そういう甘い言葉を。

二二

今もなお、あの女(ひと)を想い出す、
いまわの際に、後生でもきっと。
愉悦にまわる眼を閉じた女を。
嫋やかな肢体はぐったりとし、
衣は脱げ、髪の結びは解けていた。
恋の蓮池の水鳥のような女を。

二三

今もなお……
昼の終り、若鹿の眼の女(ひと)に、
甘露に満ちた瓶のような乳房をした
あの愛しい女に、もしまた会えるなら、
天国の至福や人の世の王たる幸せをも
私は捨ててしまうだろう。

二四

今もなお、想い出す、
愛しいあの女(ひと)を。
総身の美しさにかけて、
この世の美女のうちで第一の女を。
恋の劇の精髄を飲む器、
愛神の矢に苦しむ女を。

二五

今もなお、忘れはしない、
一瞬たりとも、
命にもまさるあの娘のことを。
濡れた衣のようにあの女(ひと)は

二二 恋の蓮池の水鳥のような女を（śṛṅgāra-vāriruha-kānana-rājahaṃsīṃ）—第五詩節と同じ比喩。

二三 天国の至福（svargâpavarga）—天国や解脱（apavarga）とも訳し得る。

二四 第一の女（prathamaikarekhā）—インゴールズ教授によれば、prathamaikarekhā は経度ゼロ度を示す基準子午線のことであるという。この線はウッジャイニーを通ると考えられた（ミラー本の註、一七八頁参照）。すなわち、彼女は美女の基準であるという意。
○恋の劇の…（śṛṅgāra-nāṭaka-rasottama-pāna-pātrī）—この合成語は二重義を含む。第一は、第一九詩節の「性の歓びの唯一の器」と同様の意味である。第二は、「恋の情趣(ラサ)（śṛṅgāra-rasa）を主題とする戯曲（nāṭaka）における最高のヒロイン（pātrī）」という意味である。演劇論におけるラサ（rasa）とは、演劇上の諸条件が完備した時、観客の恋情（rati）などの潜在的感情が覚醒されて、その結果、観客に経験される美的快感である。

二五 別離の時、彼女は私の身体にしがみついて行かせまいとした。生木を裂かれるように私からひき離された今、彼女はきっと可哀そうな状態でいることだろう。

私の躰にからみついてきた。
燃え盛る愛の火に身を焦がし、
頼る私がいないので、
哀れなさまでいるだろう。

二六

今もなお、想っている、
情愛の唯一の器として創られた
あの王女のことを。
絶世の美女らのうち第一に……。
ああ、皆さん、この別離の火は
私には耐えられません。

二七

今もなお、私の思いは変ることなく、
魅惑的なあの女(ひと)に向う、否応なく。

二六 ああ、皆さん (hambo janāh)—以下は伝説にもとづき、詩人が刑場で人々に呼びかけたものと解し得る。

二七 もうすぐ死ぬのであるから、神々を祈念すべきであるのに、どうしようもなくあの女のことを考えてしまう。
○魅惑的なあの女(vismaya-kāri)—直訳は、「驚異をもたらす女」。

刻一刻と末期に近づくのを知りつつも、
神々を思うことなく。
愛しい女、最愛の女、私の女、と。
どうしようもないのだ。

二八

今もなお、あの女(ひと)のことを想う。
「行くのだ」と言うのを聞くと、
おののく雌鹿のように
揺れるまなざしをしていた。
声はふるえ、眼にはあふれ出る涙、
深い悲しみにうつむいていた。

二九

今もなお、あの愛しい女(ひと)を……。
いかによく探し求めても、

二八 同じく、別離の時のいじらしい女の様子の描写。
○「行くのだ」……—直訳「私の出発が告げられたのを聞くやいなや」。ミラーは「私の処刑が告げられたのを聞いた時」と訳す。

二九 あの愛しい女を (tām... kāntām)—プーナ本の読みに従う。この場合、「想い出す」(smarāmi) というような動詞が

この世で彼女にひとしい顔を
私はかつて見たことがない。
全く汚れないという美質ゆえに、
その顔は、美しさにかけて
ラティや月の輝きを凌ぐ。

三〇

今もなお、あの女(ひと)を想い出す。
豊かな黒髪と、美しい歯をした女を。
一瞬でも別れると毒のようだが、
結びつく時は甘露をふり灌(そそ)ぐ。
あの女は、私の生命を支え、
愛の熱から救ってくれる。

三一

今もなお、私の心は苦しむ。
閻魔(ヤマ)の使いにも似た
抗し難く恐ろしい手により
あの館から私がつれ去られた時、
私のためにあの女(ひと)が
してくれた種々のことを
言い尽くすことはできないと。

三二

今もなお、私の心は絶えず苦しむ、
夜も昼も。愛しい女(ひと)の
満月のように美しい顔、
その美でラティを凌ぎ
カーマの誇りを破る顔が、
もう二度と目の前に見えぬから。

三三

省略されたと解する。
○ラティ（Rati）―愛神カーマの妻。
○月（dvija-rāja）―月の表面には黒い斑点（汚れ）があるから、全く汚れのない彼女の顔の方が勝っているという意。また、rati は「女陰」の意を含むから汚れのイメージを伴い、彼女の汚れなき顔が勝っているというのであろう。

三〇 熱から救ってくれる（ātapa-tra）―ātapa-tra は、日よけの傘のことでもある。

三一 詩人が王女の館からつれ去られた時、王女は助命のために、ありとあらゆる手だてを尽くして奔走してくれた。彼女の努力に対する感謝を十分に表現することはできない、と詩人は悩んでいる。

三二 その美で…（lāvaṇya-nirjita-rati-kṣati (kṣata)-kāma-darpaṃ）―愛神カーマの妃ラティは美しいことで有名。ミラー本は lāvaṇya-nirjita-sudhāmaya-kunda-kānti「その美で甘露よりなるジャスミンの美を凌ぐ顔」という読みを採用している。その他にも多くの異本の読みがある。

今もなお、変らぬ心で想う、
私の生きる希望である
あの禁じられた女のことを。
その豊かな若さの精を
他の男は味わうことはない。
次の生でもあの女が、
私の寄る辺であるように！

三四

今もなお、腕環の音が
私の心をこよなくしびれさす。
あの女の蓮花の顔の香を求め
飛び交う蜂の群がその頬に口づけすると、
彼女は柔らかい手を艶やかに振う。
その腕環の音が……。

三三　変らぬ心で（manasācalena）—manasā-acalena「不動の心で」とも、manasā-calena「揺れる心で」とも解せるが、ここでは前者をとった。
○禁じられた……—ミラー本の読み avihitām によった。プーナ本は avahitām（'deeply attached to me'）

三四　直訳「今もなお、彼女の顔という蓮花の香を渇望して飛び交う蜂の群に口づけされた頬の部分で優美に振られた新芽のような手の腕環の音が、私の心をこの上なくしびれさす。」（「頬の部分で」（gaṇḍa-deśe）はミラー本を採用）彼女の顔は蓮の花のように美しく芳わしい。そこで蜂たちは彼女の顔を蓮の花と錯覚し、その頬にとまろうと群がる。彼女はコケティッシュな手つきでそれを追い払う。すると腕環の連が音をたてる。

三五

今もなお、あの女を想い出す。
私は口うつしに飲む酒に酔い痴れ、
その乳房に爪あとをつけた。
彼女はすっかり総毛立ち、
眠りもせずに爪あとを見守る。

三六

今もなお、あのことを想い出す。
あの女は怒って顔をそむけ
行ってしまおうとする。
何も言わずに振り返るので、
口づけすると、ひどく泣く。
私はその足もとにひれ伏して
「最愛の女、私は君の奴隷だ、

三五　口うつしに飲む酒（āsya-madhu-pāna）—まず女に酒を含ませ、その口うつしに酒を飲むこと。
○爪あと（nakha-pada）—第一五詩節の解説を見よ。
○すっかり総毛立ち（udbhinna-roma-pulakair bahubhiḥ samantāt）—インド文学では、体毛をさか立てるのは快感の表現である。

三六　痴話喧嘩（praṇaya-kopa）の想い出。
○何も言わずに……—プーナ本の解釈「接吻のため顔を差し出しもしない」はとらない。

愛してくれ」と言ったものだ。

三七

今もなお、私の心は駆けめぐる、
あのこよなく美しい館に。
あの女の友らとともに
次は何をして遊ぼうかと……。
恋人の体を抱いてふざけ
絢爛たる舞踊を観て、
快い愛戯に耽ったあの家で、
今また時をすごせるように！

三八

今もなお……
比類のないあの女を、私の妻を、
描けるものはこの世に誰もいない。

三七　王女の家で楽しく遊んだことを回想して懐かしんでいる。
○友らとともに（sakhibhir）—インド古典文学中にはヒロインの女友達（sakhi）—多くは侍女—が登場し、相談相手になったり恋のとりもちをしたりする。ミラー本の読み kim aham karomi sārdham sakhibhir iti を採用。

三八　私の妻を（parigraham me）—プーナ本の読みを採用。
○似た（tayoḥ sadṛśayoḥ）—直訳「似ている二人の」。知らないものを描く場合には、他に類似物が無くてはならない。彼女の場合は、似ているものがないから、描くことは不可能だという意。なおプーナ本とミラー本とでは、詩節（三八）と（三九）の順が逆になっている。

もし似た姿を見た人がいれば、
その人のみが描けるだろうが、
他の人にはできはしない。

三九

今もなお、実のところ
あの女のことがわからない。
シヴァ神の妻だろうか、
天主の呪詛におちた天女か、
クリシュナの妻ラクシュミーか。
造化の神が創ったものか、
世を迷わすために、はたまた
宝石に似た少女を見んとして……。

四〇

今もなお、君の輝く顔を

三九　シヴァ神の妻（Īśa-patnī）—シヴァ神の妻はヒマーラヤ山の娘のパールヴァティーである。ウマー、ガウリーなど多くの異名を持つ。
○天主（Sura-pati）—インドラ神（帝釈天）のこと。天人がインドラの呪詛により地上に下る物語は多い。
○クリシュナ（Kṛṣṇa）—クリシュナはヴィシュヌ神の化身（avatāra）の一つとして民衆の信仰を集めた。ラクシュミー（吉祥天）はヴィシュヌの妻。
○造化の神（dhātṛ）—ブラフマー（梵天）のこと。

四〇　この詩には不明瞭な個所が多く、多くの異本の読みが存する。
○君の…心の中に（tavâtmani）—プーナ

心の中に見る。ふざけて笑い、
アイシャドーが
両耳についていた。
瑞々しい乳房の重さで
その体がやつれ滅んだとて、
私の罪ではない。

四一

今もなお、私の心は苦しむ。
汚れなき秋月のように白く輝き
甘露よりなるその顔は
隠者の心をも奪うだろう。
ましてや私の心など……。
もしもそれを再び見たら、
口づけし絶えず飲むだろう。

本の読みを採用。
○両耳についていた (viśrānta-karṇa-yugalam)―原文の真意は不明であるが、ひどく笑って涙を流し、アイシャドーが耳の方まで流れていった、と解する。
○私の罪ではない (no na doṣaḥ)―ミラー本の ko 'tra doṣaḥ という読みをとれば、「そこに何の不都合もない」という意味になり、ミラー訳のように「誰の罪でもない」とは訳せない。こちらの読みを活かせば、体が無くなっても美しい顔だけで十分という意になる。なお、美女の乳房があまり重いので体がやつれるというのは、インド古典の常套的表現。

四一 隠者をも魅了する彼女の美しい顔が自分の心を奪うのは当然のことである。もし再びその顔を見たら、その蜜のような唇を思うさま吸ってみたい。
○苦しむ (vyathate)―プーナ本の vyad-hate は誤植であろう。ミラー本は vyat-hate mano me の代りに cyavate na yena と読む。

四二

今もなお……
蓮の花粉で芳わしく、
情愛の水をたたえ、愛神をも
おとしめる、愉悦の唯一の聖地を
もしまた得ることができるなら、
私は必ず生命を捨てる。
それを得るからには……。

四三

今もなお、私は心の中で考える。
この世は無数の美しきものに充ち、
互いに最高の特質を競っているが、
彼女の容姿を他のものと
比べることはできないと。

四二 彼女の体を、聖地 (tīrtha 神聖なる沐浴場) に喩えている。聖地 (例えばガンジス河) で沐浴して死ねば天国に行けると信じられていた。彼女を再び得るならば死んでも悔いはないということ。

四三 互いに……―直訳「(この世は) 互いに最高の特質で他に勝るものをそなえているが」。

四四

今もなお、私の心の川として
あの女（ひと）はいつもいる。
波のように総毛立ち、
その多感さをあらわにし……。
カダンバの花芯のごとく輝く女は、
爪あとを見ている私に
躰の疲れを語りつつ、
愛しい水鳥のようだった。

四五

今もなお、想っている、
最勝の王の姫のことを。
あふれる若さに酔い
ものうく揺れるまなざしをし、

四四　この詩には問題点が多く、かなり異なる種々の異本の読みが存するが、ここではプーナ本の読みに従って、他の読みに言及しない。
○私の心の川として（mama manas-tatini）—難解な個所。ここでは、彼女を川に喩えたものと解する。すなわち、この個所は、「彼女は私の心の中に川のようにいつも流れている」という意味になる。そして、快感によってさか立った体毛（第三五詩節解説参照）を波に喩える。「私の心を川として」ともとれるが、そうすると「立毛＝波」という比喩が活かせない。
○カダンバの（kādamba）—カダンバの花は雨季のおとずれを告げるとされ、女性の髪かざりに用いられる。学名 Neuclea cadamba または Anthocephalus cadamba.
○爪あとを……—激しい愛戯の後の状態を示している。爪あとについては、第一五詩節解説を見よ。
○水鳥（rāja-haṃsi）—第五及び二三詩節参照。

四五　ガンダルヴァ（gandharva）—インドラ（帝釈天）の宮廷に仕える天上の音楽師。乾闥婆（けんだつば）と音写される。

天から落ちた、ガンダルヴァ、
夜叉（ヤクシャ）、神、キンナラ、竜の
娘のようなあの女（ひと）を。

四六

今もなお、眠りから起きた
あの女（ひと）を忘れない、夜も昼も。
その躰は祭壇のように
胴のところでくびれていた。
隆起したその乳房は
甘露に満ちた二つの瓶。
きらびやかな装身具で
身を飾っていたあの女……。

四七

今もなお、想い出す、

○夜叉（yakṣa）—夜叉はヤクシャの音写。インド文学におけるヤクシャは、鬼神としての恐ろしい面を持つとともに、しばしば人に恩恵を与え、美しい姿をとることもある。
○キンナラ（kiṃnara）—財宝の神クベーラ（毘沙門天）に仕える半神。ガンダルヴァと同じく、音楽に長けている。
○竜（nāga）—ナーガの訳。コブラのことであるが、やはり半神族とみなされ、しばしば美しい姿で現われるとされる。

四六　祭壇（vedi）—真中のところが細くなっている特別の種類の祭壇。

四七　愛の歓びが終り、彼女は陶然と横

私を蘇生さす薬草のようなあの女(ひと)を。
金色に輝き、酔い痴れて
けだるい肢体をしていた女を。
あの女は恥じらいつつもなお求め、
倒れたふりをしても、
躰を合わせ口づけすれば
たちまち我を忘れてしまう。

四八

今もなお、想い出す、
あの女(ひと)の、歓びの時の
魅惑的な残酷さを。
種々の体位をとって、倒れたり
起き上ったり、素手で……
歯で唇を咬み、爪で傷をつけ、
血に濡れて……

たわっていた。もう何をする気力もないようにぐったりしていたが、男が抱き寄せて接吻すると、再び燃え上って男を回復させるのだった。だから、彼女は「私を蘇生さす薬草」(jīvanauṣadhi) のようなのである。

四八 性交の時、彼女はサディスティックにふるまったが、それがまた男をこの上なく魅了する。激しい愛戯を武器なき戦いに喩えている。
○種々の体位 (bandhopabandha)—bandha も upabandha も、性交時における特別の体位。

あの愛戯の武器なき戦い！

四九

今もなお……
あの素敵な女(ひと)との悦楽なしには、
他のやり方で一瞬たりとも生きられぬ。
だから諸君、死のみがこの苦しみを
鎮めることが出来るのだ。
あなたがた、お願いだ、
早く〔首を〕斬ってくれ。

五〇

今もなお……
シヴァ神は猛毒を棄てぬという。
亀は背中で大地を担い、
大洋は耐え難き海中の火を蔵す。

四九 前半はプーナ本にもとづく。
○諸君 (bhrātaro)—直訳「兄弟たちよ」。
○あなたがた (bhavatas)—死刑執行人に呼びかけている。

五〇 猛毒 (kāla-kūṭa)—太古、神々と阿修羅(アスラ)が乳海を攪拌した時、猛毒が現われた。シヴァ神は皆を救うためにそれを呑んだので、青黒い頸をもつもの (Nīla-kaṇṭha) となったという。『インド神話』六五頁を見よ。
○亀 (kūrma)—ヴィシュヌ神の化身の一つで、大地を支えていると信じられた。『インド神話』六五頁、一二四頁を見よ。

高潔な人は受け入れたことを守る。

○海中の火（Vaḍavāgni）—海中で燃え続けていると信じられた火。『インド神話』一五七—一六一頁を見よ。
○高潔な人は……シヴァや亀（ヴィシュヌ）や大洋は、一たん引き受けた大仕事を忠実に遂行している。このように、高潔な人は一度引き受けたことをあくまで実行するものである。そこで、自分も与えられた運命を甘受し、今は心静かに死のう、という覚悟を述べている。

第二章　ビルハナの実像と虚像

一　ビルハナの自伝

バルトリハリは謎の詩人であったが、それに対しビルハナの生涯は、インド古典期の詩人としては例外的に、極めて明確に知られている。ビルハナ自身、カリヤーナのチャールキヤ朝のヴィクラマ・アーディティヤ六世（一〇七六—一一二七）の治世を讃えた詩史『ヴィクラマーンカ・デーヴァ・チャリタ』[1]の最後の章（第十八章）において、[2]誇らかに自己の足跡を語っている。以下、その自伝を中心にして、ビルハナの生涯について述べる。[3]

ビルハナは十一世紀にカシミール地方で生まれた。当時カシミールは、政治的にも文化的にも最盛期を迎えていた。首都はプラヴァラプラで、ヴィタスター（ジェーラム）河とシンドゥ河の合流点に位置していた。アナンタデーヴァ王、その息子カラシャ王と、英邁な君主の治世が続いていた。

ビルハナは首都のプラヴァラプラから少し離れた、コーナムカ（Khonamukha）という村で生まれ

た。その地は、サフランと白ブドウの産地であるという。ビルハナの曾祖父は、カウシカ・ゴートラに属する、ムクティカラシャ（Muktikalaśa）という名の敬虔なバラモンで、絶えずアグニホートラ祭を行い、またヴェーダに通じた学者であった。彼の息子のラージャカラシャ（Rājakalaśa）も諸学に通達していた。ラージャカラシャの息子のジェーシタカラシャ（Jyeṣṭhakalaśa）も、文法書『マハーバーシャ』の注釈書（vyākhyā）を書いた学者で、大勢の弟子を持っていた。彼は慈善事業を行い、客人をもてなし、召使に親切であり、その他、種々の善行に専念した。彼の妻はナーガーデーヴィー（Nāgādevī）という気高い婦人であった。ビルハナはこのジェーシタカラシャの息子として生まれた。「入門式以来、彼の口には言葉の女神が住む」と、みずから述べている。彼はヴェーダとその補助学、文法学（特に『マハーバーシャ』）、詩学（sāhitya-vidyā）を研究した。彼の兄のイシタラーマ（Iṣṭarāma）も博識の誉れ高く、すぐれた詩人であった。そして、弟のアーナンダ（Ānanda）も詩人であった。

（ビルハナの家系）

ムクティカラシャ（曾祖父）
｜
ラージャカラシャ（祖父）
｜
（父）ジェーシタカラシャ＝ナーガーデーヴィー（母）
｜
イシタラーマ（兄）　ビルハナ　アーナンダ（弟）

　ビルハナはカシミールで諸学を修得してから、各地を遍歴する。インドの文学者は学業を終了したら、見聞を広めるために全国を遍歴する習慣であった。彼がカシミールを出たのは、カラシャ王の治世（一〇六二年に即位）であると、カルハナの史詩『ラージャ・タランギニー』は証言している。[4] だから、おそらく一〇六二年から一〇六五年までの間のことで、二十代の前半であったと推定される。[5]

　ビルハナはマトゥラー市を訪れ、そこの学者グループを粉砕し、また、クリシュナとその愛人ラーダーの伝説で有名なヴリンダーヴァナの付近で数日間を過ごした。彼は各地で多くの弟子を得、彼らはまた師の名声を広めた。彼の詩は、老若男女を問わず、あらゆる人々によって愛唱されるようになった。

　それから彼は、ガンジス河を渡って、カーニヤクブジャ（カナウジ）に入り、そこでも能力を発揮した。続いて、ガンジスとヤムナー河との合流点にある聖地プラヤーガ（Allahabad）を経て、ベナレス（Vāṇārasī＝Vārāṇasī）に行き、聖河ガンジスで沐浴した。その前に、彼はたまたまその地を訪れていた「悪王たち」に遭遇し、不愉快な経験をしたらしい。

　それから彼は南西に向い、ダーハラ（Dahāra＝Chedi）に行き、カラチュリ朝のカルナ王（c.1034-1073 A.D.）の知遇を得た。彼はダーハラにかなり長く滞在したようである。そこで詩人ガンガーダラと競い合ってこれを破っている。[6]

　次に、彼は文人の誉れ高いボージャ王[7]の首都ダーラー（マーラヴァ地方）を訪れたらしい。

「……ダーラーは悲しげに叫んだ。
――かのボージャ王は、邪悪な王たちと異なるのに、あなたはその王の眼前にどうしてやって来なかったのか？　ああ、残念だ！」（XVIII. 96）

　この詩的な記述は、ビルハナが訪れる前に、尊敬していたボージャが死んだことに対する哀悼の

意を表わす。[8]

次に、彼はグルジャラ（グジャラート）で、何か不快な経験をしたようである。グルジャラの人々は「常に不浄であり、嫌悪の的となるようなことをしゃべる」。「道中、そのようなグルジャラの人人との交際から得た苦しみを、彼はソーマナータを見て癒した」。ソーマナータはサウラーシュトラにある有名なシヴァ神殿であった。

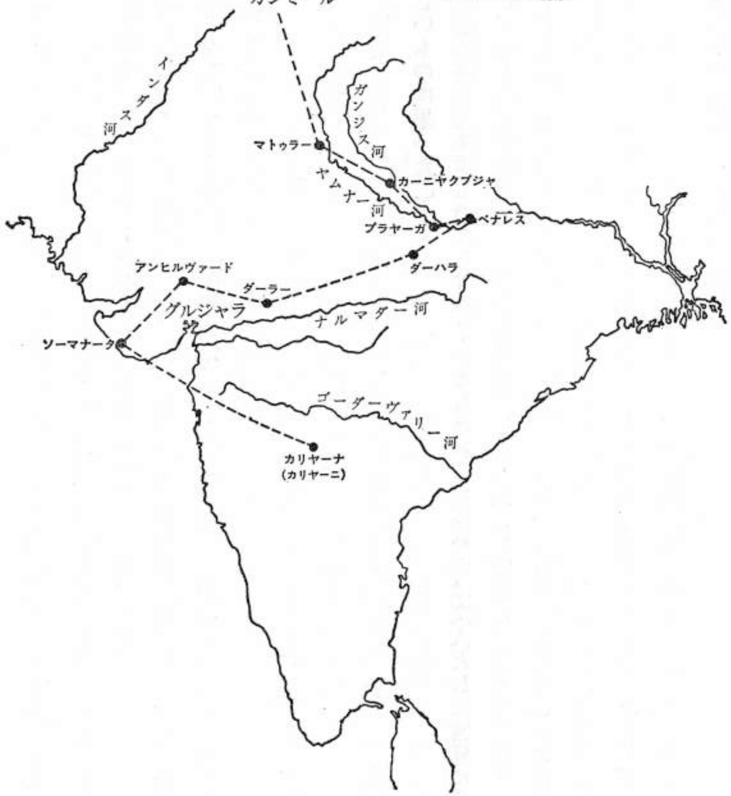
彼はソーマナータから海を渡り、おそらく今日のボンベイ付近に再上陸し、[9]「好奇心にかられて次第に南方へ進んで行った」。彼は南インドの女性の美について語っている。

「その地の、揺れるまなざしの女たちの乳房の重みについては、何をか言わん……。その〔乳房の〕弟子である愛神は、三界を征服して跳梁している。」（XVIII. 100）

最後に、彼はチャールキヤ朝の首都カリヤーナ（Kalyāṇa）に滞在し、ヴィクラマ・アーディティヤ六世に厚遇されてその宮廷に仕え、青いパラソルとヴィディヤーパティ（学問の主）の称号を得た。[10]

『ヴィクラマーンカ・デーヴァ・チャリタ』はチョーラとの戦いについて言及しているが、一〇八八年のヴィクラマ・アーディティヤの中インド遠征については触れていないので、それより少し以前、おそらく一〇八五年頃に書かれたものと推定される。[11]二十代の前半にカシミールを出て以来、実に二十年余の歳月が経過していた。この史詩の最後で、興味あることに、誇り高きビルハナは同郷のカシミールの人々と話したいと希い、また厭離の心境を吐露している。

ビルハナの足跡



「吉祥は各地で得られた。繁栄は善行において享受された。学者たちとの論争にかけて、高らかな勝利の栄誉が得られなかった場所があろうか。だが、今や私は、真理を得ることに長けた智慧により称讃される、よきカシミールの人々に早く会って話がしたいものだ。

私はわずかばかりの王の恩寵を得た。わずかばかりの吉祥を見た。わずかの文学を学んだ。自分の美点によっていくばくかの論敵を挫いた。……だが今は、清浄なる知を受け入れた私の心は、神の河（ガンジス）を望んでいる。」（XVIII. 103-104）

その少し後、一〇八八年に、カシミールでは、後に暴君となるハルシャデーヴァが即位式をあげた（一一〇一年まで在位）。カルハナはその頃のビルハナについてこう伝えている。

「寛大なるハルシャデーヴァがすぐれた詩人の友であることを聞いて、ビルハナはあれほどの栄光を空しいものに思った。[12]」

この記述は何を意味するのだろうか？ ともあれ、ビルハナは文人として宮廷に仕えることに嫌気がさし、過去の名声を捨て、文学をも捨ててしまったようである。彼の晩年は全く知られていない。文学者として彼が活動した期間は、一〇六二年から一〇八五年までということになる。

この間に彼は四幕からなる戯曲（nāṭikā）『カルナスンダリー』[13]を作っている。この戯曲はアンヒルヴァード（グジャラートの首都）のカルナデーヴァ王（Karṇadeva Trailokyamalla, 1064-1094 A.D）の結婚を祝って書いたものとされる。この王が、晩年に、カルナータ国王ジャヤケーシンの娘（Miyāṇalladevī）を娶った時のことである。

この戯曲は、チャールキヤ朝の王と、ヴィディヤーダラ（半神の一種）の王女カルナスンダリーとの恋愛を主題としている。宰相が彼女を後宮に導く。王は彼女を夢の中で見、続いて絵で見る。彼は恋におち、王妃が嫉妬する。王妃は色々と妨害するが、最後に二人は結ばれてハッピーエンドとなる。

この作品の筋はカーリダーサ、ハルシャ、ラージャシェーカラ等の戯曲を寄せ集めたもので、特にハルシャの『ラトナーヴァリー』と類似している[14]。

ビルハナはこの戯曲を、グジャラート滞在中に書いたと思われる。彼はアンヒルヴァードのカルナデーヴァの後援を受けた筈だが、前述のように、何らかの不愉快な経験をして、そこを去ってソーマナータに行った。自伝の中でこの王について言及していないことから見ると、自分の履歴書の中から抹殺したいような、余程の痛手を被ったことと想像される。

ビルハナに帰せられる詩はアンソロジー（詞華集）の中にも数多く見出される。B・N・ミスラは、アンソロジーにあるビルハナの作品を網羅的に集めている[15]。

『ヴィクラマーンカ・デーヴァ・チャリタ』と『カルナスンダリー』の二著だけによっても、ビルハナの名は文学史に残ったことであろう。しかしながら、彼の名声を真に不朽にならしめたものは、珠玉の小品、『チャウラ・パンチャーシカー』であった。

二　『チャウラ・パンチャーシカー』のテクスト

『チャウラ・パンチャーシカー』[16] (Caurapañcāśikā) という題名は、直訳すれば「盗賊 (caura) の五十の〔詩〕(pañcāśikā)」という意味だが、「チャウラ」(盗賊) という語の真意はいまだ曖昧である。最新の批判版と英訳を出版したバーバラ・ミラー女史は、チャウラを「心の盗人」(thief of hearts)、「恋盗人」(love-thief) の意に解し、[17] その英訳書の題名を "Phantasies of a love-thief" とつけている。チャウラとは作者の名であるという説もあるが、後述のように、あくまでビルハナを作者と考えることが妥当である。

この詩集はまた、『ビルハナ・パンチャーシカー』(Bilhaṇapañcāśikā)、『チャウリー・スラタ・パンチャーシカー』(Caurīsuratapañcāśikā) と呼ばれる。後者の場合は、「盗まれた (または秘めた) 恋の歓びの五十の〔詩〕」の意味で、この詩集の内容にそってつけられた題名である。その他、『チャウラ・シャタカ』、『ビルハナ・カーヴィヤ』、『ビルハナ・シャタカ』などとも題される。また、前後にビルハナ伝説を付して、『ビルハナ・チャリタ』と呼ばれる場合もある。

東部インドを中心に見出される諸写本には、この詩集の作者を、チャウラパッリのスンダラ王子とするものが多い。また、注釈者ガナパティは、作者をチャウラとする。これに対し、グジャラートとマハーラーシトラと南インドの写本は、作者をビルハナとする。原典批判の立場からすれば、後者の方が古く、前者はより新しい。ミラー女史は、この作品が東方に移行するにつれて、それと

ビルハナとの連関が忘れられたと推理する。[18]

ミラー女史は更に、この詩集の作者をビルハナであるとする他の理由をあげている。それは、『チャウラ』と『ヴィクラマーンカ・デーヴァ・チャリタ』第七―九章とが、主題と文体の点で非常に類似しているということである。[19] また『カルナスンダリー』にも、類似の詩節が見出される。

更に、『チャウラ』と『ヴィクラマーンカ』とのいくつかの詩節が、十四世紀の詞華集『シャールンガダラ・パッダティ』の中に、ともにビルハナ作として収められている。このことは、詩人の死後、遅くとも三百年後には、この二つの作品の作者がビルハナとみなされていたことを意味する。[20]

ビルハナの場合は、バルトリハリの場合とは異なり、詩集の大部分が後世の口承の格言詩から成るというような可能性はない。すべての詩節は、一様に、「今もなお」(adyāpi) という表現で始まり、ある女との過去の情事を、まるで現在の出来事であるかのように活々と描写している。文体は明晰で、詩的表現力にあふれている。文学作品として、一つ一つの詩の完成度は、明らかにバルトリハリに帰せられる格言詩のそれよりも高い。この詩集の原形は、疑いもなく、一人の卓越した詩人――ビルハナ――により作られた。十一世紀にもなると、文学者にせよ哲学者にせよ、インドの一流の著述家はかなり強固に、作者としての自我意識を持つようになる。にもかかわらず、ビルハナの場合も、「ビルハナ風」というスタイルが出来、後代になって多くの偽作が作られ、彼の詩集に編入され、どの詩が彼の真作であるか不明になるという運命から逃れ得なかった。

従来、『チャウラ・パンチャーシカー』は三種の伝本に分けられた。すなわち、中印またはベン

ゴール伝本、南印伝本、北印またはカシミール伝本である。しかし、ミラー女史は、多数の写本を調査して、北伝本（Northern Recension）と西南伝本（Western-Southern Recension）に大別する。[21] これからはこの分類法が主流となるであろうが、従来の分類法と混同しないよう、注意する必要がある。

北伝本と西南伝本に共通する詩節はわずか五詩節のみである。[22] そこで、ミラー女史は、両伝本の原型となるテクストを作ることを断念し、別々の批判版を作ることにした。日本語訳に際し、この良心的な批判版を底本に使用しなかった理由については、最後に触れる。

多くの西南伝本には、この詩集がビルハナに詠まれた事情に関する伝説――王女との恋物語――が付せられているが、これに対し、北伝本は伝説を伴わぬ場合が多い。しかし、興味あることに、北伝本の詩節の方が、より多く別離と死について言及し、伝説を想起させるような表現に富んでいる。西伝本は前後に伝説がついているにもかかわらず、より客観的で、伝説を思わせる詩が少ない。[23] おそらく、西南伝本の場合、伝説を想起させる要素が少ないので、後世の編者が伝説を付して編纂する必要性を感じたものであろう。

ここで、ビルハナの伝説を紹介する。今は、プーナ本の編者の言う「北方の伝承」（auttara-pāṭha）に従うことにする。[24]「南方の伝承」（dākṣiṇātya-pāṭha）も、固有名詞その他が若干異なるだけで、大筋は同様である。

三　ビルハナ伝説

マヒラパッタナにヴィーラ・シンハ[25]という王がいた。彼はアヴァンティ国王の娘を妃にした。やがて美しい娘が生まれ、シャシカラーと名づけられた。彼女は成長して、王に寵愛されたが、王は彼女の教育問題について頭を悩ませていた。

ある日、司祭官（プローヒタ）が、カシミール出身のビルハナという卓越した詩人が面会を求めていると告げた。王は娘の教育を頼むべき人が訪れたと考えて喜んだ。翌朝、ビルハナは司祭官につきそわれて、王に面会した。王は娘の教育を彼に要請してから、王女に告げた。

「シャシカラーよ、遊びを捨てて論書（シャーストラ）をとれ。詩人ビルハナの言葉をとれ！」

王女はわずかの間に博識になっていった。彼女は純正なプラークリット（俗語）、サンスクリット、諸論書を学んだ。ある日、ビルハナは芳香ただよう王女の部屋で、性愛論（カーマ・シャーストラ）を、この汚れを知らぬ少女に教えた。王女は愛の技法を知悉すると、愛神の矢に貫かれた。少女は揺れるまなざし、艶やかな笑い顔、甘露のような唇、わずかに隆起した乳房によって、即座にビルハナを魅了してしまった。彼は賢者で、分別を持っていたのに！　彼は王女を愛神（カーマ）の蔓草のように思った。

王女は彼に愛を求め、こうして二人はガンダルヴァ王の作法（愛欲のままに、親の許しを得ずに結びつく婚姻法）により結婚した。

処女であったのに、王女は愛の技法に巧みであった。彼女は性愛学の作法によって、彼との愛戯を望んだ。彼の方は、初めての恋に酔い痴れた少女を、甘露水のような言葉で燃え上らせた。彼は王に厚遇され、種々の聖典(アーガマ)に通暁していたにもかかわらず、夜も昼も、秘かに王女を愉(たの)しんだ。

詩人は恋人を「私の可愛い女(ひと)」と呼んだ。王女は彼に「あなたは私の愛しいかた」と言った。彼は王女の顔に口づけし、抱擁し、腰帯を解いて秘所に触れようとして、とどめられた。彼は王女をベッドに運び、きつく抱きしめてその上に乗り、歯で唇を咬んだりして、我を忘れて交わった。月のような顔の全裸の女は、両手で彼の眼をふさぐとベッドに乗り、上位の体位をとり(puruṣāyamānā 男役をつとめる)、恥ずかしさも忘れて、詩人を愉しませた。こよなく柔らかい身体をし、月のような顔、くびれた胴、白くて切れ長の眼をした女は言う。

「いずれの生においても、妾に幸せを下さい。」

詩人はありとあらゆる体位(karaṇa)をとって王女の肉体を愉しみ、また王女を満足させた。(作者は種々の体位による悦楽を長々しく描写する。)王女は美しい肉体のすべてを彼に捧げた。

「師に対する謝礼(guru-dakṣina)として……。」

彼女は愛戯に長けた詩人によって、思うぞんぶん愉しまれた。二人の間の愛は並々ならぬものになっていった。

だが、ついに破局が訪れる。後宮の警護官たちは、王女の豊かな尻や乳房に飾り(傷あと)がつき、唇に歯で咬まれた傷があり、身体に爪あとのあることから、彼女が男と情事を重ねていること

を知った。そして、相手の男が師のビルハナであることをつきとめ、王に報告した。王は二人を愛していたので、すっかり動揺する。そして、二人が痴話喧嘩をしている現場を目撃した。その場は何とかとりつくろった。しかし、もう二人は前のようには会えない。王女は叫ぶ。

「雲が去れば、どうして稲妻がありましょう。
月が沈めば、どうして月の光がありましょう。
ああ、命の主よ、快楽をくれる人よ、
カーマ・ラージャよ、あなたと会えぬなら
もう一刻でも生きて行けない!」

やがて、ビルハナは愛神に身体を苦しめられ、再び王女と密会する決意をした。司祭官は、「あまりにも軽率で、夢幻のようで、畢竟空しいものだから、女性と交わることはやめなさい」と忠告したが、ビルハナがきかないので、王のところへ行って胸のうちの不満を訴えた。

「異邦人がわが王家に汚点をもたらしています。それを見ながら、どうして許しておくのか、わけがわかりませぬ。」

司祭官がこう言うと、王は風にあおられた火のごとく怒り、ビルハナを串刺しの刑に処せと命じた。王の命令によって連行されて行くビルハナを見て、人々は言った。

「このすぐれた詩人が王の宝を奪った盗賊なのか?」

スキャンダルは都じゅうに広まった。

城門のところに佇む王女を見てビルハナはこう言ったものだ。

「今日、私は天女を愉しむために赴きます。詩人ビルハナは二度と再び、あなたのもとにはもどらないでしょう。」

婦人たちは、彼を見るためにあわてふためいて丸窓に走り寄った。すべての人々が、「ああ、運命とは！」と言いながら出て来た。人々は憐れみをもって彼を見、都の婦人たちは、「シヴァよ、シヴァよ、彼を釈放して！」と叫んだ。刑場で死刑執行人たちは彼に言った。

「沐浴せよ。神を念ぜよ。……輪廻の海を渡るべく……解脱の原因である〔アートマン〕を念想せよ。」

その間にも、ビルハナは、過去にも未来にも王女のことのみを見て、他のことを考えなかった。

「今もなお、彼女のことを思う。神ではなくて……。」

そして、五十の詩節――『チャウラ・パンチャーシカー』を詠んだ。[26]

ビルハナの詩を聴いて、王の従者たちは心を奪われ、王命を実行しなかった。一方、王女は悲嘆にくれて死のうとしたが、侍女たちにとめられた。王妃や大臣たちや司祭官など、すべての人々は王にビルハナの助命を嘆願した。そこで王は死刑を中止するよう命じた。王はこの卓越した詩人を釈放して王女を与え、更に、広大な土地、衣服、象と馬と戦車と歩兵を与えた。このように、王の最高の恩寵をうけて、ビルハナは喜んだ。

以上の美しい伝説は、遺憾ながらビルハナ自身の体験とは認められていない。まずビューラーによれば、[27]アンヒルヴァードにヴァイラシンハ[28]という王がいたが、彼は九二〇年、すなわちビルハナの年代の百年前に死んでいる。[29]それに、王と王女の名が異なる写本も存する。更に、同様の逸話は、いくつかの写本で『チャウラ』の作者とされる詩人チャウラについても語られている。最後に、ビルハナの晩年に書かれた自伝にこの話が言及されていない。

ビューラー以外のほとんどの学者も、この伝説に全く真実性を認めていない。[30]

しかし、少なくともビューラーの論拠は十分な説得力を持たない。何といっても伝説それ自体は後代の創作には違いないのだから、伝説中の固有名詞にこだわる必要はあるまい。また、ビルハナの自伝で、この種のスキャンダルに触れていないのは当然である。すでに揺ぎなき名声を得て、宮廷詩人として最高の栄誉に輝く大詩人ビルハナが、しかも次第に厭離の生活にひかれていた彼が、若い時のスキャンダルを自伝に書くということは絶対に考えられない。現に、『チャウラ・パンチャーシカー』という作品自体についても、自伝の中で全く触れていないではないか。すべて「若い時のこと」なのである。伝説のように、実際に王女と結婚して広大な土地を所有したということはあり得ないが、それでも、若き日のビルハナが何らかのスキャンダルの渦中に入ったという可能性はある。自伝においてすら、彼はわざわざ南インドの女性の美を讃えている。女性に対する関心はかなり大きかったと思われる。それに、『チャウラ』の詩節には、経験者しか描写できないような迫真性がある。単に性愛学（カーマ・シャーストラ）の文献を研究するだけでは、あれ程の性描写や

秘められた情事における刹那的な絶頂感を表現できない。『チャウラ』のエロチシズムは、この種の詩作品におけるそれとは異質である。ビルハナは伝説の設定とは多少異なる情況のもとで、『チャウラ』的な体験をしたと考えられる。『チャウラ』は彼の「在りし日の歌」なのである。あえて大胆な推理を述べれば、ビルハナがスキャンダルを起こしたのは、グジャラートのアンヒルヴァードではなかろうか。前述のように、彼はそこでカルナデーヴァ王のために『カルナスンダリー』を制作しながらも、何故か自伝の中でそのことに全く触れず、グジャラート人に対する不快の気持を表明している。余程この土地に嫌な思い出があるようである。そして、現実の恋人は、伝説の王女のような理想の女性とは程遠かったことであろう。

想像はさておき、ビルハナの伝説はその詩集とともに、後世のインド人たちによなく愛好された。それが真実であるかどうかは問題ではなかった。ビルハナと言えば、人々はすぐに王女との恋物語を思い浮べたであろう。『チャウラ』に対応して、王女の悲しみを詠んだ『ビルハナ五十頌に対する返歌』(Bilhaṇapañcāśatpratyuttara) が作られた。[31]

四　日本語訳の底本について

『チャウラ・パンチャーシカー』の日本語訳に際し、底本としてプーナ本(北伝本)を用いたことは先に述べた。[32] 何故、ミラー女史の批判版を用いなかったのか? 最大の理由は、訳者が最初に『チャウラ』を訳した時に、まだミラー本を入手できなかったからである。また、後にミラー本をプーナ本と一々対照してみた結果、ミラー本の読みが必ずしも納得できるものではないことが判明したからである。確かに、ミラー女史は豊富な写本を利用し得て、そのテクストはプーナ本よりも遥かに批判的であると言える。しかし実用的でない読みが多いのである。『チャウラ』のようなインド古典文学の爛熟期の作品の場合、原則としてインド古典の規格からはみ出すような不合理な表現はあり得ないと考えるべきである。もし規格からはずれる表現がある場合は、他の読みを採用しなければならない。これは、多くのインドのパンディットが採用する方法である。写本の数の不足は、編者のバックグラウンドで補うのである。このようにして作られたテクストは、極めて実用性の高いものである。これに対し、欧米の学者の場合、純粋に原典批判の立場から、より客観的なテクストを再構成しようとする傾向が強い。より古いと思われる写本で、より多くの写本にある読みを採用するのである。多少不合理な読みでも、そのままテクストにとり入れ、より合理的な読みがあっても、その写本が新しい場合、あるいはその読みを採用する写本の数が少ない場合は、それをヴァリアントとして注記するにとどめる。その結果、再構成されたテクストは不合理な読みを含み、実用性を欠いたものになることがある。もっとも、欧米の学者といえども、最近はインドの伝統的な方法を重視し、最終的な読みを決定する場合にパンディットの意見を尊重する傾向が強まったように思えるが。このような理由で、必ずしも改めてミラー本を底本として旧訳を改める必要はないと判断した次第である。しかし、明らかにミラー本の読みの方が良いと思われる場合は、それに従って訳した。

それにしても、プーナ本には異常に誤植が多い。そこで、最後にプーナ本の訂正表を掲げることにした。また、ミラー本の読みを採用した個所をも表に収めた。

(1) *Vikramāṅkadevacarita*, ed. by G. Bühler (Bombay 1875); ed. by V.S. Bharadwaj, 3vols. (Varanasi 1958, 1962, 1964); translated by S.C. Banerji & A.K. Gupta (Calcutta 1965).
(2) 特に Ch. XIII. 70-101.
(3) Ch. XIII のテクストとともに、主として Bühler, Introduction, pp. 7f. Banerji & Gupta, pp. 10-13, 288-296. B.S. Miller, *Phantasies of a love-thief* (注16を見よ), pp. 188-191. を参照した。
(4) *Rājataraṅgiṇī*, VII. 936.
(5) Bühler, pp. 22, 23. Cf. also p. 20. 辻直四郎博士は、およそ 1065-1070 A.D. とする。『文学史』七〇頁。
(6) Bühler (p. 18) は、ダーハラ滞在中に彼が英雄ラーマに関する詩を作ったと推測する。問題の個所は、「……かのシーターの夫（ラーマ）の首都であるアョーディヤーを、彼は美しい表現の流出により冷たいものにした。」(XVIII. 94) アョーディヤー (Oude) まで旅行したと考えるには、遠すぎるようである。
(7) 詩論 *Śṛṅgāraprakāśa* など、多くの著作を残した。
(8) ボージャの死は一〇五五年頃とされる。しかし、ビューラーは、ボージャの死を一〇八〇年としビルハナはダーラーを訪れなかったと理解する。Bühler, pp. 19, 23.
(9) 自伝には明瞭に述べられていないが、パラシュラーマの伝説に言及している (XVIII. 98) から、Gokarṇa の近くに上陸したようである。Bühler, p. 19.
(10) このことはカルハナの史詩によっても確認される。*Rājataraṅgiṇī*, VII. 937.
(11) Bühler, pp. 21, 23.
(12) *Rājataraṅgiṇī*, VII. 938. プーナ本の編者 S.N. Tadpatrikar は、この記述により、ビルハナは晩

年に再びカシミールに帰ったと推測している (Introduction, p. vii.)。しかし、ビルハナが他国でカシミールの事情を伝聞したと解する方が自然であろう。
(13) *Karṇasundarī*, ed. by Durgāprasād and K.P. Parab, Kāvyamālā 7 (Bombay 1888); 2nd ed. (1895).
(14) A.B. Keith, *The Sanskrit Drama*, p. 256. を参照。
(15) B.N. Misra, *Studies on Bilhana and his Vikramankadevacarita* (New Delhi 1976), pp. 69-106. なお、この研究書は、ビルハナの最新の文献目録を掲げている (pp. 110-125)。
(16) *Caurapañcāśikā* のテクスト及び翻訳、研究書の詳細な文献目録は、B.N. Misra, pp. 115-123. 辻『文学史』注六九五にある。日本語訳にあたっては、
S.N. Tadpatrikar, *Caurapañcāśika and Indian Love Lament of Bilhaṇa Kavi*, Critically edited with Introduction, Notes, Translation and Appendices, Poona Oriental Series No. 86, 2nd ed. (Poona 1966)〔プーナ本と呼ぶ〕
を底本として用い、必要に応じて次のものを参照した。
B.S. Miller, *Phantasies of a love-thief, The Caurapañcāśikā attributed to Bilhaṇa*, a critical edition and translation of two recensions, Columbia University Press (New York and London 1971)〔ミラー本と呼ぶ〕。
Bilhaṇakāvya, Kāvyamālā, Part XIII, ed. by Durgāprasād, revised by W.L. Shāstrī Pansīkar (Bombay 1916), pp. 145-169.
(17) Miller, p. 2, fn. 1.
(18) Miller, p. 3. 辻『文学史』注六九七をも見よ。
(19) Miller, pp. 3-4, and fn. 6.
(20) Miller, p. 4.

(21) Miller, pp. 5-6, 125ff.

(22) 北 ──1 2 3^{b-d} 11 12
　 西南──1 4 6^{b-d} 5 3

ただし、北50は多くの西南伝本に見出されるが、"floating" oral tradition に属する詩節と見られるから、除外する。Miller, fn. 15.

(23) Miller, pp. 2, 7.

(24) 「北方の伝承」は、*Bilhaṇakāvya*, KM. Pt. XIII, pp. 145f. (『チャウラ』の部分は、ミラーの言う「西南伝本」に属する…) と、プーナ本の付録Ⅰに収められている。両者とも疑問の読みが多く、そのことはプーナ本の編者 (S.N. Tadpatrikar) 自身も認めている (p. viii)。また、誤植も多い。「南方の伝承」はプーナ本の付録Ⅱにある。

(25) Śaśikalā、後の個所では、Candrakalā, Candralekhā とも呼ばれる。いずれにせよ、「弦月」の意。

(26) ここで、Pūrvapīṭhikā あるいは Pūrvacatuḥsaptati は終る。以下、Kāvyamālā, pp. 164f. によって結末を要約する。

(27) 以下、Bühler, Introduction, p. 7. 参照。

(28) ビューラーは Vairisiṃha の読みが正しいとする。Bühler, p. 7, fn. 1.

(29) パンチャーラの首都ラクシュミーマンディラの王、マダナービラーマ。王女の名は、ヤーミニープールナティラカー。これはプーナ本付録Ⅱに収められた「南方の伝承」の伝説。
なお、王女ヴィディヤーとチャウラの恋愛を扱った *Vidyāsundara* という作品その他については、S.N. Dasgupta, *A History of Sanskrit Literature*, Vol. I, pp. 657-659. を見よ。

(30) 例えば A.B. Keith, *A History of Sanskrit Literature*, p. 188. 辻『文学史』一三一頁。

(31) Bhūvara 作。年代未詳だが、一五四四年付けの写本が存する (Miller, p. 5 and fn. 11) から、それ程後代の作品とは思われない。この作品はプーナ本付録Ⅲに収められている。

(32) 注16を見よ。プーナ本は Northern Recension に属し、ミラーの分類の type I, version A に属する。Cf. Miller, p. 123.

プーナ本訂正表（異本の読みを採用した場合をも含む）

1^{c}	sūptotthitāṃ→suptotthitāṃ
2^{d}	sūśītalāni→suśītalāni
3^{c}	bāhuyugulena→bāhuyugalena
4^{c}	pracchanra(na)pāpakṛtamantharam āvahantīṃ →(Miller:) pracchannapāpakṛtam antar ivāvahantīṃ
5^{b}	-tiryagvalattaralatārakam āyatākṣīm→(Miller:) -tiryagvalattaralatārakadīrghanetrām
8^{c}	-cumbanalagra-→-cumbanalagna-
13^{c}	vasnāñcalaskhalata-→vastrāñcalaskhalana-
14^{c}	antaḥ smito-→antaḥsmito-
15^{d}	karaghṛtaṃ→karadhṛtaṃ
16^{b}	pṛthvīṃ prabhūta-→ (Miller:) pṛthvīprabhūta- (?)
18^{c}	saṃmukhadarśanārtha → saṃmukhadarśanārthe
25^{b}	-taptadeham→-taptadehām
26^{b}	praticintathāmi→praticintayāmi
28^{b}	cañjalākṣīm→cañcalākṣīm
29^{c}	-nirjitarati dvija-→-nirjitaratidvija-
30^{b}	ṣunar→punar
30^{d}	udvattakeśa-→udvartakeśa-
31^{a}	vāsa gṛho→vāsagṛho
31^{d}	vaktaṃ→vaktuṃ
32^{b}	pūṃṇendusūndara-→pūrṇendusundara-
33^{a}	avahitāṃ→(Miller:) avihitāṃ
34^{b}	-gaṇḍadeśām→(Miller:) -gaṇḍadeśe
37^{b}	sakhībhir api→(Miller:) sakhībhir iti; vāsagṛha→vāsagṛhe
40^{b}	-karṇayugulaṃ→-karṇayugalaṃ
41^{d}	vyadhate→vyathate
43^{b}	anyānyam→anyonyam
43^{d}	rūpa→rūpaṃ
44^{a}	adyāṣi→adyāpi
45^{a}	nṛpatī śekhara-→nṛpatiśekhara-
48^{c}	-nakhakṣataratkta-→-nakhakṣatarakta-

本書は『インドの詩人』（一九八二年刊）に大幅な修正と加筆をほどこし、改題されたものである。